川柳雑誌

麻生路郎☆主宰

十二月號

No. 379

Pensoj flugas trans la land-limon

THE SENRYU ZASSHI

日本盛酒坊

東京酒坊八重洲口名店街

大阪酒坊は
大阪市南区九郎右衛門町に新築中
（松竹座西ノ辻道頓堀橋南詰北西角）

明春一月末新築完成の予定でございます。ミナミの新名物として、堂々開店の節は何とぞよろしくお願い申上げます。

灘の清酒

ニホンサカリ

西宮酒造株式会社

山葉ピアノが月払いで買えます！

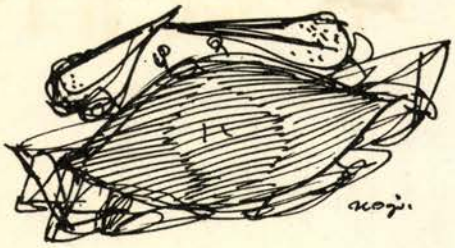
お子さまの創造力を
のばすために

山葉ピアノ

創立70周年 日本楽器

大阪支店 ⑮ 5956～9 梅田店 ㊱ 2783

一九五八年を顧みて

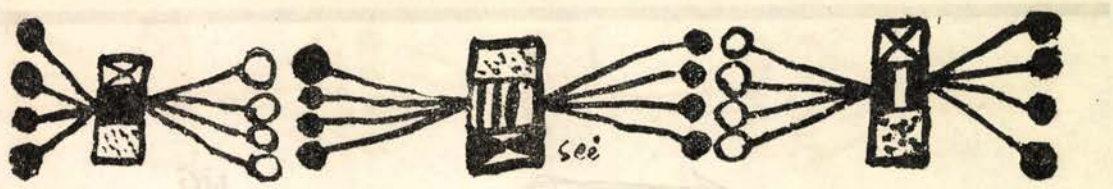


ナベ底景気という言葉は
年中ナベ底景氣の私達には
ピンと来なかつたが
勤評問題や
警職法改正問題の騒ぎでは
嫌な思いをさせられた
サツクドレスの流行は
幾らか印象的だつたが
フラフープの流行には
呆れる外はなかつた

――路郎

十二月号目次

題字……麻生路郎
表紙…〔サンタクロース〕…野尻弘
一九五八年を顧みて……麻生路郎…(三)
句評りレー……(四)
文庫・八歩・味平・不二・水客
ナツベリ・ファーム……築山快夢起…(一一)
新川柳鑑賞……麻生路郎…(一二)
川柳歳時記……水谷竹荘…(一三)
須崎豆秋論……高鷲亜鈍…(九)
思うこと……戸田古方…(一九)
秘湯・籠坊温泉……福田丁路…(二〇)
絵島・生島……富士野鞍馬…(八)
一路集短評……清水白柳子…(七)
啼かぬ法師蟬……東野大八…(三三)
関西短詩文学作品展……(二五)
胃袋拜見……諸家…(二六)
川柳に詠む姑……池上知恵美…(二四)
雅号私見……宮原慈雨…(三三)
ニセ者本モノ……不二田三夫…(二三)
不朽洞の人々……快夢起氏の巻…(二九)
★
川柳塔……麻生路郎選…(四)
同舟近詠……諸家…(一七)
近作柳樽……麻生路郎選 北川春巣選…(二〇)
一路集「短気」……清水白柳子選…(三六)
「名辯士」……大西八歩選 三鴨美笑選…(三七)
金泥集……麻生葭乃選…(三四)
各地柳壇……(四〇)
不朽洞会から……(三九)
柳界展望……(三八)
青ペン・赤ペン……(四六)



川柳塔

豊中市　戸田古方

がむしゃらに登って見るも面白く
大自然がきこえる宵寝静かすぎ

西宮市　若本多久志

再婚も同じ神社で式を挙げ
四十二の恋は襦袢を派手に着て
諦めを日記に書いて寝るとする
風邪引きが上手なだけの母となり

大阪府　川村好郎

再起する決意へ銀行冷たすぎ
嫁いでもきっと逢いますそれっ切り

祝結婚

愛されつかぐわしく咲け菊のごと

米子市　三鴨美笑

病後だと云っても保険屋承知せず
特選会女ばかりを寄せた秋
なしくずしそれでもよいと取りたてる

大阪市　正本水客

家計簿へ夫の無欲ゆるしとく
肩ぐるま父のない子が直ぐなつき

大阪市　丸尾潮花

こおろぎの声と歩いた夜のあべの

兵庫県　小西無鬼

下ッ端と見てか挨拶せなくなり

大阪市　西いわを

痩せてるに彫刻みたいとは嬉し
零号で四年ばかりをうかうかと

新発田市　高沢一浪

売残り自衛隊でも我慢する
閑な妓の機嫌とるのも趣味の内

ホノルル市　内藤草一郎

有りそうな人が集まる新車展
労資会談出させる弁と出さぬ弁
避ける気はないが女難に遠い顔
二上りも都々逸も出ぬハイボール

東京都　宮田不二

満員車僕の背丈は低くない
散髪して帰れば集金良かったネ
お隣りがしずか賢妻留守らしく
余っ程のずぼら仙人掌こりゃいいや

ホノルル市　白砂旋風

二世小林副領事になって歴史をつくり

豊中市　福田妄夢

散らすには惜しいお嫁が隣りへ来
雨の宿寝ましょ寝ましょの音になり
葬式に松・竹・梅と級があり
山・山・山こんなとこにも人が住み

奈良県　尾崎方正

秋や秋燈火親しむ酒もてこい
若人がいたわる程に老いていず

堺市　吉田圭井堂

鷹揚になったとたんに病み始め
向丁が変れば客種皆変り
嫁にやった娘に実はなと借りる

宇部市　国弘半休

テレビ見てる間に床屋よい子にし
ハイハイと言う口ぐせを叱られる

防府市　長野井蛙

隣りでは犬でも百匁の肉を喰い
掛声でニコヨン監督来たが知れ
捨鉢の女に恐いものがなく
サックドレス不倫の果をひたかくし
世が変りこんどは嫁に気を使い

岡山県　直原七面山

愛人が他人の顔で嫁いで来
寝そびれて恋のほてりを冷やす浜
逝きし児の墓石の雪を払うてみ

大阪市　西森花村

コスモスは風に溺れるようにゆれ
縁うすく生れて母に生き写し

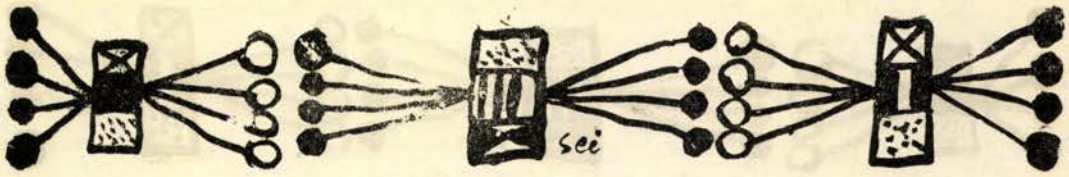
鳥取市　河村日満

由谷義治先生を悼む

真っ直ぐだから左翼とも思われて

告別式にて

時間通りの告別式もお人柄



花輪一つなき告別へ知事市長
焼香も代表だけという簡素
倉敷市　木村千容

極楽へたつ気の転居準備する
鰯雲観てから親爺気が弱り
お師匠の二号が出来て欲呆ける
倉敷市　田垣方大

発表の時期ではないとなめられる
上役の余裕はアゴをなぜている
十二月襖をしめるのも忘れ
十二月労基法など言うとれず
加賀市　野村味平

逃げ腰のボーイ英語でちとすごみ
日本の明るさ遊覧バスに揺れ
大阪市　木村水堂

養子ではあるが本家の当主にて
高槻市　福田丁路

柿一つ盗って追われるハイキング
どん底で死んだ学士のなれの果て
かまきりのけなげに迎え撃つ構え
大阪市　真鍋一瓢

のみと云えばつち人生はそうか知ら
勤評所感

鉢巻じゃまさかやるまい修身科
大阪市　後藤梅志

二丁目に住んで一丁目も知らず
ビタミンもうち陶枕もいるのなり

行き当りばったり今日も傘がなし
うぬぼれたあたま今夜も眠られず
米子市　小西雄々

盛り場の近くでけちけちして暮し
盛り場で妻の方から飲む話
お産した数より堕した数がふえ
大阪市　吾郷玲人

テレビ済みアッ宿題を忘れてた
特価品だよと喋った女の子
挨拶はよう降りまんな秋の路
大阪市　山川阿茶

又買うてしまうて何か淋しい気
親分とまちがえられた博士なり
大阪市　金井文秋

アルバイトするのに家業手伝わず
箪笥一つ買えば嫁入りかと問われ
小松市　伊藤茶仏

大丈夫だよがだんだん頼りなし
課長さん課長さんとはリズミカル
間をおいて君ーと社長おこりはる
加賀市　那谷光郎

足袋を脱ぐ名取は若い坐り胝
愛の巣に世間を憎む気が揃い
西瓜選る女医はうっかり打診する
大阪市　北川春巣

ワイシャツへネームを入れて若返り
洗濯機買うて内職する積り

英語の質問ないかないかと父はひま
岡山県　浜田久米雄

夕刊の運勢欄にたりとし
錠前を開けて独居をたのしまん
野球拳まではほのぼのおぼえてい
岡山市　逸見灯竿

失業のように恩給生きて行く
お隣りへ留守を頼んだ秋が澄み
裕ちゃんの映画へ母が誘われる
大阪市　武部香林

病上り衣替えして友を待ち
頬にふれるは秋の手のひら
出雲市　尼緑之助

録音は怒号二波とか三波とか
李明君の結婚

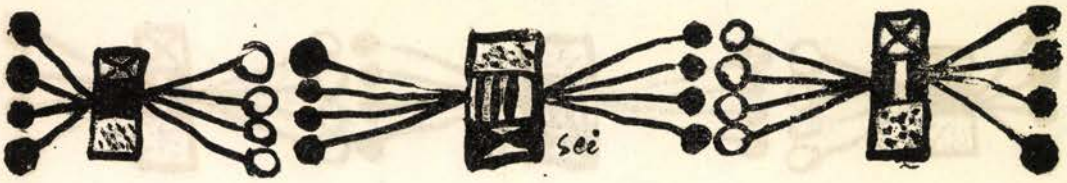
蒼空へ二人の呼吸が合う門出
大阪市　水谷竹荘

恋せねばひげののびたも気にならず
鳥取市　杉谷湖山

粗品進呈なるほど風船一つくれ
サックドレスあそこあたりにない丸み
尼崎市　小林文月

満員車ガールフレンド見えただけ
婦人会に招待されてジュースのみ
大阪市　冨岡淡舟

住宅の設計をする秋夜なが
蟹の味城崎小唄ききながら



呉市　林野甦光

心だけ錦で故郷へ寄り付けず
ハイカーの自信は雨を予想せず

岡山県　福島鉄児

独房へ父になったと知らされる

岡山市　服部十九平

社運よし応接室に蘭が咲き
未亡人父の立場で子を叱り
市場前始発の客が皆んな降り

岡山県　大森娯句楽

君と僕当選の肩叩き合い
呑む段になって愈々顔を売り

兵庫県　若林草右

影さえも踏ませかかったのが引ばられ
にせ者がでる程医者は儲けてず

豊中市　足立春雄

心斉橋男やったと振りかえり
別れ行く肩に淋しさこぼれそう

熊本県　有働芳仙

面会のない日がつづき花を買い
履歴書は要らず鶴嘴与えられ
教え子の自家用車にのせられてフト淋し

広島県　山田季贊

降職は斜線ですなとあっけなし

大阪市　山本葉光

感情の浪費女が勝気過ぎ

倉敷市　水谷谷水

行楽へ隣りも樟脳匂わせて
かんよりできまった委員とは淋し
陰口になったら妻君のりだして

岡山県　田村藤波

接木した父はこの柿食べず逝き
十円の客を粗末にせぬ老舗
ただ今がもう柿の木に昇っとり

岡山県　岡田夜潮

禿げたのが蠅の基地とはいたわしい
蛮勇をふるうも女の手前なり

玉島市　臼井三林坊

かたくなな父方言が捨てきれず

茨木市　下山清潮

月並みの御世辞に妻の顔を見る
手内職テレビの前で老妻の

岡山県　本田恵二朗

婿選びせいと勤めに出してやり

京都市　松川杜的

握手して別れる峠赤トンボ
教え子にもう酒量まで追い越され

尼崎市　藤井春日

住み馴れてヘンリー巧い箸さばき
力無き咳コスモスの揺れている

岡山市　津田麦太楼

寒むざむと魔の踏切の地蔵さま
産制の一粒種が小児痲痺
赤い羽根ラッシュの浪に押し抜かれ

吹田市　橋本幸男

恋敵歩き方まで気にくわず

堺市　高崎雄声

道徳教育裏から自由まくしたて
悪いとこみんな母似とおしつける

鳥取県　藤井明朗

金持ちの少々の馬鹿通させる
親友のザックバランの酒うまし

岡山県　永松東岸

仮病ではないかと思う倦怠期
痩せた子の哀れは脊丈ばかり延び
片腕のない行商を疑わず

倉敷市　野田素身郎

女房が留守だとしょんぼり遊びに来
五分前の五分が新婚には永し
正確に帰る夫で出世せず

大阪市　清水望峰

恋に泣く顔に生んだもお母様

大阪市　木村十悟

映画では泣く妻僕には強い妻

大阪市　伊達堰子

パパ逃げてッママ暴力はイケマセン

カスバ山王町

やくざから一軒置いて防犯委

大阪市　不二田一三夫

親分が利息の勘定する時代

兵庫県　酒井ひか平

お手本にされる社宅の愛妻家
竜の口力授ける様な水
大輪のダリヤ邪恋もかくならん
霧の中から次々と労働者

宇部市　津秋六花

買うらしい客へも一度もみ手する
署名もう父兄は味方の数に読み
風采だけで居留守を使われる
闘争へ先生ネクタイをはずして来
入墨へ銭湯一人減り二人減り
尋卒の実力自家用車にそり返り

神戸市　野村初甫

口許からシスターボーイ汗を拭き
百円の寄付も思案の台所
余韻じょうじょう奈良一ばいに鐘が鳴る
丸出しでチップをやるも旅のこと

唐津市　新岡回天子

退職金こんな小さい店が出来
挨拶の合間に選挙匂わせて
ヌードショウ口がすべった妻の前

東京都　石居高志

皆様に宜敷く結ぶ旅便り

松江市　勝谷山川児

次々と課長に亡夫の友がなり
百貨店の隣りでネクタイ投げ売りし
だし昆布の如く停年すてられる

大阪府　早川清生

偽文士来てから村に図書部など
幕間にも社長は思いつきをメモ
堕胎料割勘にして恋終る
一つ墓に寝かせ両親不和なりき

堺市　辻圭水

かけ声でせめて寒さをまぎらす気
労基法化粧時間にふれてなし

加賀市　中松恒雄

英雄に負けぬ色気は持ち合わし
秋晴れにガラスを磨くのも楽し
二日分の薬待つ間のテレビジョン

大阪市　児島与呂志

頼られてそれからの酒素通りし

岡山県　野々口美舟

病むたびにその愛情の量をみる
物をやる時の笑顔が後妻めき

西宮市　小浜牧人

秋晴れを欠勤したい顔になり
面白い方ねと金を使わされ
売りに出す屋敷の柿が熟れてくる

西宮市　菱田満秋

離縁する日が仏滅とかぎらない
いい趣味をひとにすすめてぜにが要り

兵庫県　前川左文字

稲を刈り終えて大地の細りたり
禁酒禁煙すればテレビが買えそうな

岡山県　池上知恵美

補聴器で聞きたくもない事も聞き
十人前つくるコックになる祭り

大阪市　橋高薫風子

ゲイバーのナンバーワンは高商出
末っ娘ももう声上げず泣く齢に
新生の吸殻もあり清交社
本心が二伸に女心かも

大阪市　池戸桃村

労働歌さけぶ先生に子をたくし

米子市　石坂新雪

呑みに出るそうな入院していても
会長もお次も呑まぬのに不満

大阪市　西川晃

無から有生じ神殿華麗なる
生れ変りますと便利なことをいう
血の様な雨日雇の屋根を洩り
底なしの阿呆哲人めいて見え
忍従に底光りする老婦人

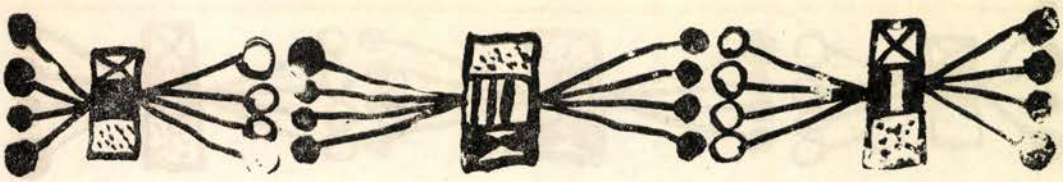
鳥取県　田中蛙眠子

飯食えるのに断食をしてデモり
投げ出した辞表よ明日の米がない

名古屋市　野田一念

抱擁にキッスに秋の陽は落ちる
夏物のように見切って嫁くときめ
試験日が明日で台風早く来い
四十の手習い子供が寝て始め

神戸市　仲どんたく



見え切ったまんま菊人形枯れて行き
口げんか電車通る間しばし待ち

長男十五才となる

元服の年だとビール酌いでやり

平田市　久家代仕男

飲めぬのを承知で酒を出したがり
養鶏もやっていますと六羽きり

大阪市　本多省三

ハイキング疎開の村の稲の出来
悪筆の方が目に立つプラカード
何一つ買うても婚期覗かれる

大阪市　大谷月都

客馴れた女中に軽く捌かれる
くじ一枚で投資したよな気にもなり
頼みにくい事は大阪弁にする

岡山市　江国幽谷

反抗することだけ覚えて卒業し
子沢山の番付へ住職がトップ
定員以上の切符を知らん顔で売り

岡山市　光好陽子

祭客下してバスはガランとし

尼崎市　徳永鬼美

富士山のために青空ある如く

西宮市　河相すゝむ

来賓競走へそれでも若い気で走り
しびれた足へ釜しゅんしゅんとたぎるなり

西宮市　野呂鵜汀

雨戸皆閉めて避暑地は秋に入り
とっぷりと暮れてススキの穂が怖し

西宮市　樋口舟遊

吸殻を拾って傾むくプラカード
医者が来て痛み薄らぐのもおかし

新潟県　高野むじな

テレビ料理の材料御隣りさんも買い
かつぎ屋へもったいなくも遊ぶ旅
百株の僕にも宛名印刷機
死ぬ前に云うてやりたいほめ言葉

高砂市　吉原紅月

窓開けて女話を外らせる気
友情の限界を知る淋しい日
珍客にされて離れで寒う寝る

大阪市　欄蘭

電化しても米はやっぱり手で洗い
電話帳で出世しそうな名をさがし

大阪市　石倉旅風

蟻の列働き続けてストも無く

大阪市　魚住満潮

立って喰ううどんいよいよ秋深し
掛取に来れば中風が寝てるだけ
鶏と一緒に起きた日もありし
菊人形姉も妹も美しい

堺市　田中狂二

社長死去さる

涙雨なお降りしきる社長の死

大阪府　林昌男

妻と出てきれいな人が多すぎる
何時からか恋をしていた別の僕

愛媛県　村上旭章

赤蜻蛉かがしをよけて流れたり
結局は医者へもってく土地だった
四桁にもたりぬ売上げ生きている

倉吉市　大前鳴恍

借金を苦にせぬようになって癒え
ノーマネー三人寄って秋寒し

鳥取市　北村三歩

不細工だからこそ厚う厚う塗り

浮世絵展

鋭角で北斉の富士天をつき
歌麿の首香水をかけたろか

神戸市　傍島静馬

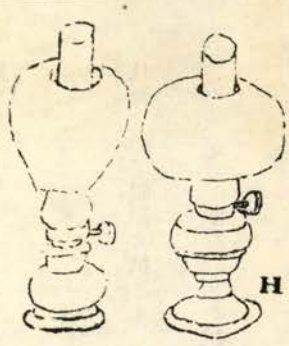
隣席の美人の方へ向けて読み
あの時は飲んでたからと破約され
仏壇の掃除は祖母がすると決め

笠岡市　木山遠二

云いたいこと大抵誰かが言うてくれ
癖になりますと親切にしてやらず
しょうもない活字の手紙沢山来
手折りては捨てらるるなり曼珠沙華

大阪市　中谷ハナ子

垂れてる稲穂に雀邪慳なり



須崎豆秋論 (4)

――或は詩川柳に於けるディオニソス――

高鷲亞鈍

孤獨と冷酷

豆秋は筆まめであり、柳友の誰れ彼れと文通を交わす。私はセミ・プロ的原稿生活をしていながら、関係知己から便りがあれば、最近その返事を書くのが負担を感じる。昔はそれほどでもなかったが、と今の年齢を初老のせいにするわけでもないが、豆秋よりは一廻りも若い。私が数年間流離の生活を送った時にも豆秋はたびたび友情の濃る便りをくれたし、柳界の模様なども疎い私に知らしてくれる。あのよく判る長めの綺麗な字体など見て、とても六十過ぎのお爺さんと思えないのである。句もそうだが、文字も私達の師路郎の影響を受けている（註・1）個所があるのは争えぬものだ。昨今古稀を迎え、八十八の米寿に向って、今年から一歩挑戦されだした路郎師が、会えば、文学青年の血をたぎらして、私などにでも激論するさまは、やっぱり豆秋にだってあるのは何とも恐れ入る。

A　恋人の坐ったとこへ坐って見
B　元旦だ一二の三で跳び起きむ
C　お元日ばかりは小原の庄助さん
D　今年こそはと立ち上ったがもう櫻
E　なにやらが欲しい水でも呑んで寝る
F　ノーパンでいけたらいっそ涼しかろ
G　白骨ともなれば涼しからん
H　秋の灯に読みたい本が陳べられ
I　均一の中にさみしき荷風集

など自分の生活を語る句の如何にも若いこと。いや生活が若いのでなく句が若々しいのである。豆秋の句は最初ドライと私はきめた。しかしここでは豆秋にもウェットが少しはのぞいている点を私は指摘しよう。それは糊つけした浴衣へ霧吹きするように、豆秋の抒情は乾いた現実(川柳)をしめらすのである。HとIの句はその点文学老年らしい読書癖をみせたものだが、Iのさみしき荷風集の「さみしき」は流石に動きはしないが、時折り、「さみしい」「かなしい」語句が句に入るのは考えものだ。

初めのAは勿論豆秋自身を詠んだものでなく、（強いて作者自身とすれば憶出の句）映画の一シィーンからみた印象の句であろうけれど、恋人と、青春の対象を座にもってきた作者の若々しさを私は取上げたい。（註・2）

A　すべったら丁稚にするぞと励まされ
B　泡をとばして独乙では〳〵
C　直角に質屋の中へ折込んだ（註・3）
D　ストツプがわからんのかと**怒**こりゃ**はり**
E　首になるのをまん中にして撮し
F　けっきょくはミミズ煎じたので治り
G　金歯でも抜こうかというところまで
H　所も言はずいっぺん遊びに来い

右の句は豆秋の真骨頂といってよい川柳的現実を庶民の紛色のない散文で、そのまま吐き出した句を拾った。ここには丁稚（A）怒こりやはり（B）抜こうか（C）いっぺん（D）の大阪弁が多分にはいっている。そして自ら大阪風土の匂いがただよい、庶民生活の矛盾を発見する。道順を知らぬ人にでも教えるのに親切な東京人に比し、久しぶりに会った友人にも所を教えない大阪人の横着さ不親切さをあばいたHの句は、私など大阪で生れた生粋の大阪人だけにその薄情さが苦々しくやりきれない。殊に

葬式で会いぼろいことおまへんか

に至っては、穿ちでぐさっと胸を突く大阪商人への生命とりである。穿ちと言えば豆秋は愈々冴える。

A　蔵医者のなんのとぼやきながら死に
B　速よいかな消えてしまうと火事見舞
C　オーライで動き出したる靈柩車
D　恐ろしや火葬へ点火するマッチ
E　火葬場は火をつけてから夕涼
F　一生の小骨を箸でよりわける

豆秋の住所は、阿倍野葬場の近くである。昨年から火葬場を廃して葬儀場だけとなったが、以前は風呂屋の煙突より太く高い煙突が二・三本立って、毎夜盛んに黒い煙を出していた。豆秋は、火葬場に火をつけてから夕涼をするオンボ（E）の肩を叩き――作句のうえで――一生の小骨を箸でよりわける(F)。小骨を箸でよりわける子供を死なした親、親を死なした子、妻の夫の愛人の親友の小骨を拾う者の有情に、霊柩車の運ちゃん、おんぼ、箸の非情との対立は凄まじく、やがてはなべて人間のゴールインをする場であることを知っていて、他所ごとのように知らない庶民の一人一人の矛盾。火事と喧嘩は大きいほど面白いとは誰が言った。Bはここの心理を捉える喜び勇んで火事見舞にゆく状景であるが、何と憎らしい豆秋。と読者は思いませんか。

豆秋は肉親と言えば、愛犬ポスの死に会っただけではないのだろうか、ポスの場合は、おんぼや箸のような非情と対立せしめず、とぼとぼと尾をたれて天国へゆくさまを有情をもって素直に書いているが、人間の死ということになると、かくも冷酷なる豆秋であるか。人間嫌になった豆秋・無神論者豆秋は、その故に自分の死を、愛犬ポスにみても、面倒くさい死後の形式のわずらわしさ、人々の偽礼にソッポを向けていると私は解したらどうであろう。豆秋も亦路郎師と同じ孤独なる詩人であったからだ。

（註・1）師の句風に弟子が次第に影響されるのは当然で、それは真似ているのではない。句意と着想の近似を左に例を上げる。

君見給えほうれん草がのびている　路郎
どの草も草も見給え実を結び　豆秋

二階から降りてどこえゆく身ぞ　路郎
行くあてもなく傘をひろげし　豆秋

元旦だせめて眼鏡を拭きましょう　路郎
ふるさとが近し眼鏡の玉を拭く　豆秋

（註・2）〃恋人の坐ったとこへ坐ってみ〃は、〃大臣の座ったところへ座ってみ〃と恋人と大臣とすげかえても、「父ちゃん」「気狂」でもよい。其点この句は動く句である故に、佳句とは受けとれないが、本文に述べた理由で豆秋の若さを例証した。

（註・3）〃直角に質屋の中へ折込んだ〃は曽て「私達」出版記念会の時、出席した短詩聯盟詩之部の小野十三郎氏が抜かれて、批評された。たいした批評でないので省略するが、詩人が「私達」から取上げた点を買いたい。

川柳の社会性

故人になった批評家大西野介氏（註・1）が豆秋に「時事吟」は命数がないし、つまらぬから書かぬ方がよい。と言ったことが、豆秋の胆に銘じたそうで、それからは余り時事吟を書かないと、私に語ったが、私はそうは思わない。時事吟は時に社会吟とも考えられ、時に川柳の社会性という必然の課題が提起されるからである。例えば路郎師の

人生は悲しからずや右派と左派

は句意の説明をするまでもなく、時事吟であってなお時事吟に止まらず、大きく人生の思想とか生活をその時代の政党にかけて、詠む社会吟でもあるからだ。

但し最初にも述べ、そして最後にも述べざるを得ないことは、もともと川柳は庶民の声によるその時代々々の散文である。その故に横に拡がってゆく空間的な存在であれば、柳樽初篇の川柳は古典としての川柳と認めねばならず、明治・大正の久良伎・剣花坊の新川柳も、或る意味では、その時代に生きる庶民の声として存在し、然して現代川柳は戦前戦後を通じた昭和の庶民の声として川柳は発展する。それら川柳の伝統はその時代々々の庶民の声を記録する散文精神である。プロレット・クルトの文芸思想は古典、浪漫、象徴の弁証法的三段階に置いている。例えば芽が出て蕾から花が咲くまでを浪漫（ロマンチシズム）開花した瞬間を象徴（サムボリズム）開花して種を宿った時を古典（クラシズム）と説き、そのクラシズムは既にロマンの芽を約束する。斯る時、散文芸術は、その現実を過去を（伝統を）背負い、未来を想定する歴史的現実を捉えねばならない。従って私達の川柳的現実は、歴史的現実としてのクラシズムを止揚して未来を予見するロマンチシズムを次の時代の芽とし、蕾に飛躍せしめねばならないなれば、私は私の詩川柳は、路郎師のロマンチシズムを推挙することは、文芸史的には正しい位置を与えたものと考えてよい。

そして豆秋が、そういう文学主流を意識し、歴史的現実に自己の川柳的現実を把握すれば、時事吟も亦社会吟としての歴史的現実として発展する可能を持ち、前章の不審と危機は打開されよう。

A あめりかのおっしゃる通り判を捺し
B 平和とは先生でさえわからない
C 税金をしぼられに生れ来たような
D 金もろた方へ政治はころぶなり
E こんな時えらい坊主も出んかいな
F 大臣らどんぐりの味御存じか

二・二六事件

G 年寄の寝ごみを襲う戦術か
H 刑務所がいちばん早やく餅をつき
I 街を見よ汚れた白衣鉄の足

以上は大体社会性のある句、でここでは対象を個人に置かず、又作者も個人的な感情でなく、公憤をもって苛酷な税金を怨み（C）白衣（I）を思う。政治もまだまだ金でころぶ（D）だろうし、老政治家を倒す暗殺者（青年将校）（G）も絶えないし、為政者は兎に角、食糧不足（F）や物価の値上りも当分はつづくだろう。

何を選んでいたゞくかは先様におねがいしてタカシマヤの商品券をお贈りするのも心にくい贈物かと存じます
一〇〇円から
一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です
大阪・なんば
東京・日本橋
京都・四条
高島屋

A（開戦）もやもやがいちどに晴れたみことのり
B さるほどに火葬料まで値上され
C 統制とテレコなにもかもあがり
D（出征）塵箱へ突っ立ち上り訣別す
E（終戦）お月さんざんねんながら負けました
F 横穴がいらなくなったあっけなさ
G モンペイのバケツ一杯よう提げず

これらの句は大なり小なり、前書がなければ理解が出来ず、後世になったら死語として、通用せぬ言葉も出てくるだろう。然しそういう戦前、戦後の庶民を拉した句（G）や（D）の句は、それ故にその時代性を掌握しているし、殊にモンペ（G）はそれ故に古川柳的描写である。開戦のAに終戦のEも時事吟として成功しているし、Fの横穴には註釈が必要とされるかも知れない。

以上挙げた作品のほかにも豆秋の時事吟に優ぐれた句が沢山ある。私は野介氏が時事吟を断続的な句として価値ひくくみたのは判るが、しかし川柳の性格は時事吟とか社会吟を作って決して不自然なものでなく、却って必然的なものとさえ私は考えて異論をさしはさんで筆をひらく。

（註・1）五月号の「殿様句会」参照。

（一九五八・七・六　川柳祭に脱稿）

あとがき

私は須崎豆秋論を書くにあたってある冒険を敢えてした。それは豆秋氏の精しい履歴を知らず、「豆秋録音」が唯一の史料で、ただ私だけの想像は、いわば八卦をたてたようなものだったからだ。だから、卦の当ったところもあり、当らなかったところもあるようだ。

例えば豆秋論（2）に〃豆秋の生家は貧しく食うや食わずで中学を出された。ところで養家先では富有なので少し位は遊んだが……〃とあって「食うものも食はず少尉に育てたが」の句意と彼自ら語った「豆秋録音」を類推して書いた。つまり私の想像では中学を出、現役の兵役を終えて養家に入ったと思っていたが、事実は豆秋氏は四才にして叔父（実父の兄）の家に貰われ、従って坂出の資産家の坊ちゃんとして育ち、中学はおろか、大学でも卒えれば卒えられる筈であったが、持前の放蕩がやまず、一年志願の兵役が終えると、無理やりに嫁さんをとらされたということである。だから少尉の句は、豆秋自身のことでなく、第三者の家庭から出た少尉をテーマにしたものである。それから養家を飛び出る決心をして、一夜名文の遺書まで認めたということは、大体私の観察に誤りなく、豆秋氏自身が〃実はそのまま養家先で辛抱して居れば今頃は村の村長位で収まってたでしょうが、養子が厭で自分からおん出てしまいました。その時の心境は、本当に亜鈍さんの思ってられた通りでした。〃と感慨を洩していた。何れにしても豆秋論は豆秋伝記でも、人物論でもなく、いわば豆秋作家論で川柳を通じて、伝記を点描し人物を髣髴したに止まるだけだから事実との相違は許して貰おう。然しその後の実録を参考に資すれば、大正七年単身上阪（養家を出て一旦実家に戻ったが、間もなく）短歌雑誌「絵日傘」の同人で親友西沢黄鳥氏の経営する栄屋石綿K・Kに頼ること二ヵ年、後援者があって、立売堀南通りで石綿業三共商会を自立経営をなす。たまたま、その頃の経済パニックに遭遇して三共商会を解散、風呂釜の製造、天王寺区大道の内藤製作所に勤務するようになったのが昭和三・四年頃で、その頃既に川柳作句に専念、川・雑天王寺支部を創設した。内藤製作所はその後津村製作所に代り、平和産業から、軍需工業に転換して、現在の東住吉区桑津町に工場移転したが、豆秋氏はそのまま勤続して現在に至っている。自宅は昭和六年頃現住所に住み約三十年になる。三共商会を自営していた頃、縁あって、現在の奥さんと結婚する。結婚生活三十年になるも子供がない等のことは本文に述べた通りだ。

引用の句は、豆秋氏の句集「ふるさと」の初版（昭廿九・十一・十発行、川・雑阿倍野支部発行）及再版（昭卅・四・十発行、全阿倍野支部発行）から抜いた。句集「ふるさと」は当時の川柳界に投げた反響は非常に大きかった。次に二・三諸家の「ふるさと」評を記録すれば

「ふるさと」を見て（「ふるさと」）　海上　天横（昭三十、新年号）
「ふるさと」の魅力（「ふるさと」）　葵　徳三（昭三十、新年号）
句集「ふるさと」礼讃（「番傘」）　古下　俊作（昭三十、新年号）
ふるさとのほほえみ（「川柳雑誌」）　冨士野鮫馬（昭三十、二月号）
「ふるさと」を読みて（「川柳雑誌」）　堀口　塊人（昭三十、四月号）

で、他に「私達」句集から豆秋氏の句を引いて詩人小野十三郎氏が朝日新聞紙上で寸評をしていた記憶が私にある。（完）

川柳雑誌社
本社新春川柳大会
―句集「三人」刊行祝賀句会
日時　一月十五日（祭）一時
会場　光明寺大広間

川柳雑誌社
婦人友の会新春総会
日時　一月二十五日（日）十一時
会場　割烹　大　万
（阿倍野区松崎町三丁目一〇）

大阪・名古屋・伊勢を結ぶ大動脈
近鉄特急ダイヤ

大阪上本町発	近鉄名古屋発	宇治山田発
7.40	8.00	8.40
・8.40	9.00	9.40
9.40	10.00	
11.40	12.00	・12.40
13.40	14.00	14.40
・15.40	16.00	16.40
17.40	18.00	・18.40
18.40	19.00	
19.40	20.00	20.40

上本町 9.40 18.40　名古屋 10.00 19.00発
はお楽で便利な新設特急　ご愛乗下さい
・印は二階展望室つきビスタ・カー

座席指定特急券　5日前から発売
近畿日本ツーリスト　交通公社　特急始発駅
近畿日本鉄道

新川柳鑑賞

麻生路郎

〔五九〇〕

踏切はジンガジンガと夕焼ける　（水客）

駅の近くのあわただしい踏切の情景を巧みにスケッチした句である。ジンガジンガという擬音が踏切の夕暮れのあわただしさと、車輌の通過を待つ間のいらだたしさをうまく表現していて、しかも、作者はそうしたあわただしさの中にいて、踏切の向うが夕焼けている美を見のがさなかったのである。

〔五九一〕

先生に云うたろ先生喧嘩中　（阿茶）

「先生に云うたろ」

「云うのなら云うて見い」

というのが、学童の喧嘩の売り言葉に買い言葉であるが、「先生に云うたろ」と云ったところが、その先生は、そんな学童に耳を貸すどころか、先生自身、喧嘩の真ッ最中だというのである。学童そこのけでストをしている先生達へ投げられた実に痛烈な皮肉の句だと云えよう。

〔五九二〕

極楽で会えば過労で死にました　（梅志）

誰も死んだら極楽へ行けるものと決めているのも面白い。極楽で会ったら、私は過労のために死にましたと、シャバでは人一倍に働いたことを云っているのである。人間というものは極楽へ行っても、人間らしい見栄や自慢を捨てきれぬものらしい。この句はきびしい今の世の現実を空想化して詠んだところに興趣の尽きぬものがある。

〔五九三〕

枯すすきだけですパパのハーモニカ　（方大）

「お父さん、ふいて」

と子どもいう。

「ああ、よし、よし」とは云うが、このパパのふけるのは、野口雨情作詞の「おれは河原の枯すすき」だけだと云うのである。

親に対する親愛感も出ているし、パパの時代感も出ていて面白い。

〔五九四〕

子の目にも二度目の父は金があり　（草一郎）

この句の裏には、この子の母の複雑な素性が隠されていることに気づくであろう。

何んとしてでもこの子を育ててゆきたいという母性愛が、金持である二度目の父との関係を結んだのであるが、こどもはそこまでは知らない。知らないが二度目の父には金があり、最初の父のよう

ナツベリ・フアーム

ナツベリ・フアームは
(Knott's Berry Farm)
ロスから50哩ほど田舎にある

築山快夢起

ウオルター・ナツトが妻君と子供四人をガタガタのフオード車へ乗せ、現在の場所へやってきてベリー栽培を始め道端の小屋で畑から出来るベリーを売出したのが一九二〇年の夏のことであった。それが今日では二百エーカもあろうと思われる広大な土地を所有し、お得意のベリー其他を材料にした瓶詰やドライフルツ、パイなどを売るPastry土産品部の外に、子供服装品、キユリオ、美術品などを売る百貨店を経営し、更に入場者の便利を考えて建てた、ステーキ・ハウスとチキンデンナの大食堂があり、五千台の自動車をパーク出来る六十エーカのパーキングロットまで立派に出来て居ると云う驚異的な大企業に発展して居る。

試にこのナツベリー・フアーム発展の径路を示す数字を拾って見ると、経営は純然たる家族本位で、ウオルタ・ナツト夫婦と一男三女に加えて、娘の婿さん達が各々の受持デパートで腕を振うと云う組織になって居り此処で働いて居る従業員九百余人、他のデパートは数字がないので分らないが、食堂の統計を見ると、今から廿年前の一九三七年に一年間の客が十万九千人であったのが年を追うて増加、昨年一カ年中に扱った客数百六十七万人一日の平均数四千七百人と云うのだから驚く。

此処はロス中心から東南に当り、有名なデズニランドに余り遠くないブェナパークにあるので、デズニランドのお蔭も大分あることであろうが（之はお互様らしい）何れにしても、百貨店や食堂だけで此の遠方まで観客を引付ける事はむずかしい、所がこのフアームには前に述べた呼物以外にゴストタウンと称する奇想天外のアトラクションがあるので、恐らく此処を訪ねる人はゴストタウン見物が主で土産物などは第二第三、見物が済んだら名物のチキン料理かステーキで舌鼓と云うのが順序らしく、事実此処の料理は相当名が売れて居る。ゴストタウンの大体を記せば、加州のゴールドラッシも次第に衰え、之に代る石油その他の新産業が漸く発達し始めた十九世紀末頃、人口は大都会に集中され、一獲千金の荒くれ男が、

に貧乏で母をいじめるようなことのないことだけは判るが、やはり二度目の父にはなじめないという子どもの心理を巧みにとらえている。

〔五九五〕

俺と寝たことにしとけと歸らさず　（千　里）

遊里華やかなりし頃には、この句に詠まれたような場面はザラにあった。

「今から去んだところで、寝るだけじゃァないか」

と、巧みに誘惑されると、

「じゃァ泊っていこうか」

と立ちかけた腰をおろすのである。妻の待ち呆けを思わないのではないが、こんな時の悪友の言葉を一蹴し得ないのが、男としての弱さである。この句、柳樽を思わすうまみを持っている。

〔五九六〕

名士の仲人花嫁の名を忘れ　（春　雄）

名士というものは、よく仲人役をたのまれる。それも、座り仲人といって、挙式の時だけの仲人が多い。この句の仲人も、そうした仲人なのであろう。挨拶の時に、新婦はと云ったが、常に親しくしている間柄でもないので、花嫁の名がアタマに出て来ないことを詠んだもので、一寸した穿ちの句である。

〔五九七〕

老人を車掌苦もなくつまみ上げ　（夜　潮）

街頭風景のスケッチである。電車かバスか、それは判らないが、老人を「苦もなくつまみ上げ」と云うところを見ると男の車掌らしいので電車なのであろう。この場合の車掌の行動は親切というよりも、早く発車させるためと解する方が妥当であろう。

老人のヨボヨボとした動作と、くっきょうな車掌の動作とが眼に迫って来る。

〔五九八〕

ツンとした妻の背中が岩に見え。　（芳　仙）

こんな句は解説したんでは味が抜けてしもう。ジッと句の内容をみつめていると、何んとなくユーモラスな感じが湧いてほおえましさを覚えさされる句なのである。「岩に見え」は誇張法であるが、弱点を持った夫には確かに岩に見えて来るものであろう。

〔五九九〕

メートル法定年覺えようとせず　（清　生）

市場でもメートル法になった。百貨店でもメートル法になったが、まだメートル法では、感じが出ないと云うのが定年組なのである。

是非必要な場合には換算表を見て用だけはすますが覚えようとはしないのである。明治生れの人間には晩酌何リットルでは酔えないからであろうか。

〔六〇〇〕

眺望がよすぎ賽銭わすれられ　（花　村）

旅をした時の句であろう。山の中を幾曲りして絶頂の神社を訪ねた時、眼界が俄に開らけ、眺望が素晴らしくよすぎたので肝心お詣りした神社へ背を向け、ただただ景色にみとれていて賽銭のことなどは忘れたというのである。その時の旅人の心境を巧みにつかんだ句である。

暴れ廻った酒と女とバクチの田舎町は、次第に寂れて行った、然し、そうした廃人のようになった町の風景の一つ一つは、そうした町々に出入した人にとって、とても懐しい思いであり、又若い人々にとっても懐古的なロマンチックな気分の湧くものである、ナットベリ・フアームのゴスト・タウン（寂れた町）は此処をねらったもので、大体千八百五十年頃から九十年位までの、古いタウンの状態をまのあたり見るように作ってある、其処にはペンキの剝げ落ちた建物が軒を並べ、サイドウォークの板も朽ちて今にも落ち込みそうなのがありGeneral Merchandiseの看板を出した店の隣に郵便局、続いてリカ、ストアに鍛冶屋、それから少し離れて机も椅子もひどく痛んだのが列べてある小学校、その隣に教会が建って居る、向側は、赤線区域で怪しげな女が二階家から顔を出して居り、下がサルーンになって居て、飲み助が管を巻いて居ると云う工合またそちこちには昔ホンルルにもよく見たハック（一頭立の馬車）やワゲン（荷馬車）が置いてある。裏の方には墓標に立てた板切の名前も読めないような墓地もあるし、其近くをサンタフエ鉄道の汽車が実際に走って居ると云ったような、まだまだいくらでも紹介出来るが、実に興味ある見世物で、なおお客の興を添える為に正真正銘のアメリカン印度人と写真を撮らせたり、マネキン美人と並んで撮る場所も出来て居たりで、僕も其モデルの一人となって愉快な写真を撮って貰った。西部人特有のフロンテヤ、スピリットの表われとも云うか、加州にはデズニランドと云い、このナッペリフアームと云い、こうした興行的見世物に莫大な資本を投じ、観客を引き寄せる為には至れり尽せりの設備を作って之を経営し、立派に企業化して行く勇気と才能の持主が少くない。その中で、家族中心の経営であれだけ大規模の事業を成功させて居るナッペリー・フアームの如きはその中でも特に紹介の価値があると思って書いて見た。

胃潰瘍を内服でなおす

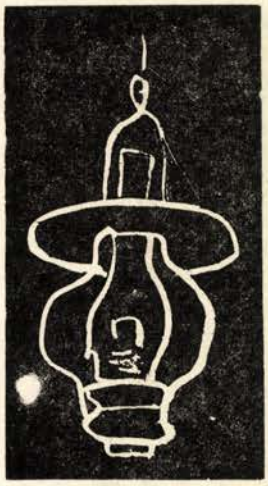
潰瘍の創面に直接働いてニッシェに肉芽を盛り新しい粘膜を新生させ且つ副作用は全然なく胃痛を迅速に和らげます。一回四錠ずつ一日三ー六回使用致します。

メサフィリン

錠　一〇〇錠　七〇〇円　五〇錠　三八〇円

エーザイ株式會社

句評リレー



今治市　長野文庫
鳥取市　大西八歩
石川県　野村味平
東京都　宮田不二
大阪市　正本水客

長野文庫氏提出（川柳塔から）

プラカード腹の減らないよう歩き　豆秋

一見泥臭そうだがよく噛みしめて見ると底光りがしている句であります。これをユーモア句と見ればユーモア味にあふれており、哀調を帯びた句と見ればひとしおものの哀れを感じます。つまり七光りする句だと思います。

特に「歩きよう」でなく「……よう歩き」が、実によく効いております。

八歩＝食わんが為には見栄も捨てて、雑踏の街をプラカード捧げて今日も行く。その表情を忘れた顔は、人間と云うよりも移動する機械と云った方がいいかも知れぬ。然しこの人間機械腹を減らさぬコツは心得ている。プラカードに記された主義主張には否定も肯定もなく、彼に取って大切な事は朝が早く晩になって呉れる事である。この句、人間生活の裏面をついて作者の川柳眼の鋭さがうかがわれます。

味平＝不承不精で、日当になるから、お祭行列に参加させられている程度で、イデオロギーも持ち合さない、おっさんのたよりない姿が目に見えるようで、皮肉な句であると思う。

不二＝客観的な立場から作句出来たことに対する感謝の気持さえ感じさせられる句です。豆秋さんの作としてはホームランと迄はいきませんが、例によってうまくライト方面へ軽く流し打ち一塁セーフと云った程度の作品と申上げたら叱られますかな。

水客＝サンドイッチマンの経済運転的な動作を「中七」でよく捕らえている、一応成功していると言えよう。

文庫＝さすがに皆さんよく観ておられますね、結局八歩さんの仰言る通り作者の川柳眼の鋭どさがハッキリ目立つ句ですね。

八歩＝この句に接したとたん、某月某日、大阪阿倍野橋近鉄の近くで会ったニコヨンの姿を想い出した。そのプラカードをかついで舗道をゆっくりと歩む後姿は、人生を達観した聖者の姿にも似ていた。プラカードの蔭から見る世相も亦楽しからずや。

味平＝あそこのとこに、うちの兄ちゃんがいると見るべき情景を、ユーモアの溢れている、句として甄味すると、気分はすっかり、プチ毀しで、素通りの出来ない深刻味のある句として、解釈したいと思います。

水客＝プラカードをかついだ人物のペーソスを〃腹の減らないよう〃でキャッチして成功していると言うことに一致したようである。

○

大西八歩氏提出（川柳塔八月号）

叱ってた親がのり出す子の花火　狂二

近頃は花火の種類も昔とちがって多種多様、親の目には随分あぶな気なものも出廻っている。所がいざ発火させるとその面白さは、線香花火の比ではなく、おもわず叱った後からのり出して来ると云う人間の現金さを巧く捉えている。

文庫＝最近よく「知ってた」「売ってた」「待ってた」と云う様な句を見かけますが、この省略法は不可ないと思います（この用法に就てくどくど書いていると長くなるから書かないが）この句も見つけどころはよいとして表現の点で一寸失敗している句だと思います。

味平＝子供の喧嘩を親達が、買って出た、ありふれた句ではあるけれども、親子の心理を、うまく捉えるのには成功している。

不二＝子煩悩な現れです「子供より貴方の方が夢中なんですからあきれてしまいますわ、少しは子供へやらせて上げたらどうお」まことに主客転倒の花火とはなりにけりです。叱ってただけに今となっては誠に何ともはやではある。

水客＝子供に凧を上げてやっているうちに、親の方が夢中になってしまうという様な漫画がよくあったが、そういった情景である。ねらいも表現にも新味がない。

文庫＝或はこれを世相諷刺と見て、親を大国と考え子を小国と考えて見ると面白い図ですね。

八歩＝句としては新味は無いかも知れない。然し人情の世界には古いも新しいもなく、いくら人工衛星の飛び交う現代でも、歌舞伎のチョボに涙を流すゆえんである。

味平＝おとっちゃんの方が、よっぽど阿呆かいなと、言われそうによく見かける笑わされる情景です。

水客＝八歩さんの言われるように、人情のまことに今も昔も変りはないが、その昔ながらの人情をそのまま取り上げるには、表現の新らしさがなければと思うのである。

○

野村味平氏提出（川柳塔四月号）

いらんことしいなと女郎がこぼしてる　豆秋

その筋のキツイお達しが、赤線地帯の禁止令で、封建制度の一部はたしかに崩れ去ったが、これに伴う従業婦達の転業はしたけれどと、極度に生活はあやぶまれて、寄ると論議の中心になっているが併し、モグリの商売は依然として跡を絶たない。随分おせっかい過ぎる防止法やと、皮肉な半面をズバリとありのままに諷刺して、暗示的なものさえしみじみと感じさせて、現代の血の浸む様な世相を、

心憎いまでに穿って余すところがないと思う。

文庫＝いらん、しいな、こぼし、てる何れも方言であり、又女郎も女蕊様から転化したものでこれも一種の方言だから、この句は方言の川柳として取り上げるには適当だが、それ以上の何ものも無いと思います。その解釈には反対しませんが、心憎いまでに穿っている句とはどうしても受取れません、すでに女郎と云う存在もない今日となって見れば尚更です。

八歩＝身も心も泥沼の中に深く落ちこんだ女に取って、売春禁止法も邪魔っ気なものに思われるかも知れない。感謝の念でこれを受容れる赤線の女がはたして何人あることか。下手をすれば反って犯罪を地下に追いやる危懼さえある。女達に取って更生の道が余りにも遠いように思われる。押しつけられた女性開放の門がその当人から迷惑がられる所に生きる世界の違いをはっきりと感じさせられる。

味平＝方言川柳であると言って、うっちゃれば、そうとも一応はうなずけるが、この句の場合は、この方面で使っていた方言で、あしらった方がふさわしいと思われ、やっぱり当局に対する強い批判と抗議であると思う。

不二＝この法津がいよいよ施行されようとする直前、二月頃の時事吟と解釈しますと句意はぴったりですが施行後の今日となっては「いらん事しいな」とこぼしとるのはお女郎さん「基本的人権を尊重してこう呼ばして頂きます」よりむしろ懐古主義のおのこかも知れません、これは失言。

水客＝売春禁止に対して、生きてゆかねばならぬものの切実な叫びを〃いらんことしいな〃と端的に言いきった川柳的表現を、やはり買いたい。それにしても「下五、こぼしとる」は豆秋さんにしては余りに句品のない言葉だと、四月号を引張り出してみたら、私の思い通り「こぼしてる」となっていたので、いささか安堵の胸を撫で下した次第。ちなみに「いらん事」の事は原句は「こと」である。もっと原句を大切に扱ってほしい。それから方言云々が問題になっているようだが、要は、その句の内容にぴったりした言葉を選び出せばいいのであって、方言であろうが外国語であろうが問うところではない。〃方言川柳〃などという妙な看板を、態々かかげる必要は無さそうに思う。

文庫＝皆さんのお説を承って見ると、なる程と思い、そうだなあとも思うのですが、併しやっぱり感服出来ません（と云うのはこの句からはあまり深味と云うものが汲み取れないからです。或はそれは「批評眼の貧弱」と云われるかも知れませんが）

八歩＝軽味の句である。いらんこととしいなと一気に詠んで、赤線の女の生態をクローズ・アップさしている。川柳的表現法の一例として、初心者に良き資料ともなろう。

味平＝文庫さんと不二さんとに、手痛く極めつけられることになりましたが、憲法改正、再軍備が左右言われている今日、この赤線問題も、女流代議士あたりからは、キック叱られるかも知れませんが、社会の犯罪防止面や衛生環境上からも、次ぎの世代には、またこの問題も見直される時期が、来るのではないかと疑惧させられます。押しつけの法規で、真実社会のユートピアーが、到来するかは、私は、いささか疑問といたします。

原句の正、誤につきましては、出句者として、まことに申訳がありませんが、これの訂正については、一瓢さんから、何とか、釈明があるものと思っております。

水客＝この句の生命は〃いらんことしいな〃という話し言葉に、生きてゆかねばならぬ人間の弱さを、ぶっつけた鋭さにあろう。

一瓢＝原句の誤記全く一瓢のエラーでした、申訳ございません、味平氏のやんわりとした御抗議、穴があったら這入りたいとはこんな時の事とつくづく感じさせられました。

○

宮田不二氏提出（川柳塔八月号）

電報へ庖丁もったまま出て来

葵丘

取るものも取らず、置くものも置かず出て来た人物の、電報に対するショックの有様がよく捉えられております。庖丁と云う小道具を用いての名演出には恐れ入りました。実に軽妙にして洒脱。川柳の持つ真実性を遺憾なく発揮した心憎き迄の佳吟と敬服致しました。

常にこうした川柳眼を養いたいものです。

文庫＝面白い句ですね、姿、形も整いすぎる程整っているし、内容も充分だし、申し分が無いんですが、強いて難癖をつけるとすれば「出て来」が一寸かび臭いようです。大体「居」とか「来」とか「見」とかの止め語は句を引き締める点で都合がよいが、どうも余情に乏しいと思います。この句なんか特に「出て来」と重ねている点に隙がないでもないと思います。

八歩＝不二、文庫両氏の批評の通りいかにも川柳らしい句である。「出て来」では余情に乏しいと文庫氏は云われますが、この句の場合これ以上まとめ様もなく、これでよいと思います。それにつけても日本語の持つ自由性と云うか、その融通無碍に対し有難いとさえ思っています。

味平＝言いつくしている句と云いたい、洗濯の泡立った手でなく、庖丁と表現したところに、川柳のもつ技巧の鋭さがあると思う。

水客＝電報へ濡れ手のままで出てくる等の句想は何としても古い、庖丁にヒントを合わしたことによってこの句は救われている。

文庫＝とに角庖丁を手にしたままとび出して来たその状景がハッキリ出ている点は上手いもんだと思います。

八歩＝電報であるが故に庖丁が生きている。これが手紙や来客であればそれこそ大変である。うますぎる句で、少し道具立が揃い過ぎている観が無いでも無い。

味平＝これでいいのでは、ないかと思います。

御贈答に
大丸の商品券
三百円～一万円
京、阪、神三店の他
高知、鳥取、下関、
別子、博多に共通！
一階 御堂筋側
大丸
大阪心斎橋

水客＝諸説につきているようである。

○

正本水客氏提出（川柳塔七月号）

水煙あげて神輿は洗うもの

栞

端的に云い切って一分のすきのない句。キラキラする夏の陽射が眼に見える様に思う。

文庫＝私等の地方では神輿のことを「御神輿（おみこし）」と云う位で大そう大切に取扱うので、どうもこの句がピンと来ません。尤も神輿を鉢合せさせて喧嘩するところは二三ありますが、水浴の礼をさせることを知らないので批評を差控えます。

八歩＝あばれ神輿と云う言葉にピッタリとした状況です。神輿をかつぐ若者達の活躍する肩の筋肉さえ目に見える様です。祭礼の写生句として生きていると思います。

味平＝「洗うもの」で、窺えばうかがえる気もいたしますが、私の町の神輿も、頻々と、街から街を練り歩いて、御渡させるのが、本番なんだそうで、水中には飛び込まない。在阪当時、アバレ神輿の御渡を見たいと思いそれきりになっておりますが、ネジ鉢巻の威勢のよい若衆の晴姿が、躍動している。

不二＝ある地方では海中へ突入して大いにあばれ廻るおみこしもあります。下帯一貫の若衆と水しぶき、誠によき清涼剤的風景を老練作家がこれ又実に気っ風のいい作品にまとめ上げました。「もの」止りの活用もすこぶる適切。

水客＝諸氏の評はみな的を外れていると思う。下五「洗うもの」に眼をそそいで欲しい、そしたら祭礼の最中に神輿を洗うというのは、おかしいと気がつかれると思う。従って水中に突き進むあばれ神輿の情景ではない。日本の三大祭の一つとして有名な京都の祇園祭の前と終った後、加茂川の四条橋の東で神輿に水をそそぐ儀式が行われる。この句は、その神輿洗いの景観をキャッチしたものとして私は提出した。若し間違っていたら、栞さん御教示下さい。

文庫＝水客さんのお話が大そう参考になりました。私は神輿の後御行事などに就て一向知らないので何とも云えなかった訳ですが、皆さんのお話を承って見ると作者の着眼が少し分る様な気がします。でも、この句には感心しません。

八歩＝京都の祇園さんの神輿と分っては、いよいよ夏祭らしい状景がよく出ている。日頃は万事控目な京の人達である。それが年に一度の祭ともなれば、江戸っ子の向うを張って勇み立つ青年の姿がよく出ていると思います。水煙あげての表現がこの場合よく利いている。

味平＝「水煙」と、あるので、句意をとり違えました。水客さんから、それは儀式やがと、説明せられて、初めて、なるほどと八州見学ではない自分を恥じております。

水客＝大体みなさんにも、この句のよさを認めていただけたようですので、御神輿を仕舞うことにします。

○

正本水客氏提出（川柳塔七月号）

泰然自若唇を受け

丁路

旧い題材を十四字詩にまとめて、いささかも古きを感じさせない。上四字「泰然自若」から複雑なフィクションを発散する技巧を、買いたい。

文庫＝センスが古いのでしょうか、理解が乏しいのでしょうか或は無知かも知れませんが、私はこの一行を川柳として受取れません。いいと思いませんから勿論はめられません。だと云って悪いとも断定出来ないので貶しも出来ません。つまり川柳句として論ずる資格が私に無いようです。

八歩＝この女性恋愛に関しては相当の古強者南欧の美人画を観る様で、熟れた果実の甘さを感じさせる句。十四字型もこの句の場合適当であると思う。

味平＝観念しているのか、すれっからしている男女仲かが、はっきりせない、「泰然自若」で十四字の字句の硬さが、ふっくらとしたまる味をどうも感じさせない。職業婦人の事務的なものさえ想像させて、あまり後味のよくない句と思える。

不二＝邦画の接吻シーンも今日では殆んど厭味が無くなりましたね。但し新非免疫型。以下この句に関する限り句評は経験者におまかせ致します。小生は未経験者と云う事に表面はなっておりますから（恐妻家）。

水客＝実は、私は楽しみにして、この句を提出した。皆さんどんな評をされるかと。

〃泰然自若〃という生硬な熟語を生かして重厚な女性の姿態を感じさせる技巧を私は買いたいのである。すぐれた美しい句とは言えないが、もう一度見直してみても、文庫さんよ、川柳を感じないでしょうか。

文庫＝何回も読み返して見、又色々考えて見ましたが、どうしても心の琴線にふれるものがありません、単に好き嫌いと云うことでなく、むしろ好意的に見て川柳味を感じません。大体私はこの場面を男の方が受身の形だと解釈したのですが、それがすでに間違っているようです。とに角私には分らない句です。

八歩＝この句の唇には、有名なモナ・リザのほほえみと同様、女性の持つ神秘な謎さえ感じられる。所詮それは、男性と女性の違いから来る自然的なものかも知れない。

味平＝この背後には、グレン隊でも、控えていそうで、いやな感じさえ抱かせるが、実際のところこんな場面に、ぶつかるまでは、私としては、極手がないので、これはこうだろうと言うはっきりした批評は、差控えさせて貰います。

水客＝諸説こんとんとしているようです、句から受けるイメージは各自御自由に。私はただ、この句の技巧を取り上げたいだけである。

○

正本水客氏提出（川柳塔八月号）

梅落す尼の襷のかいがいし

麦太楼

淡彩な絵を見ているような、すがすがしさを感じる。いわゆる川

柳味は稀薄であるが、じっと味わってみると、ほのぼのとしたユーモアを汲みとれないだろうか。下五の説明的なのは一考を要する。

文庫＝無技巧の技巧とでも云うのか、すっぱり云い切っていて作者の感情が読者にピンと来ます、坐五の甲斐々々しいと云う形容もこれでよいのではあるまいか、地蔵肩の物静かなおとなしい尼さんの襷がけの姿にきびきびした健気な甲斐々々しさを見つけたところは確かに老巧の表現だと思います。

味平＝川柳としての迫力には乏しいが、春泥尼ならぬ尼寺の或る日の生活の断面が汲みとれる。丸めた頭に、熟梅が落ちて来そうである。ほおえましくもなる。ありのままを川柳しようとした苦心は、大いに買ってよい。

不二＝清潔な画面を感じさせられる句です。こう云う場面は見る方も清潔な眼で眺めることに致しましょう。

水客＝この句、いわゆる水客好みの畑である。それだけに、皆さんが揃って、その良さを認めておられるのは、我がことのように嬉しい。前にも言ったように、〃悲しいこと〃を〃悲しい〃と言いきらず、〃かいがいしい〃のを〃かいがいし〃と表現しないことの方が望ましいと私は思う。

文庫＝癖のない素直な句だからあまり云うことが無いですね。

八歩＝味平さんの句評に同感。梅の実を払い落す竹竿の向うは、初夏の山々の緑がしたたるばかり。俳風川柳とでもいうべきか。

味平＝修業道場にも、こうした人間味のあふれた、ひと時があることを知らされる。やっぱりすっぱりとした、あと味の悪くない句です。

水客＝みな一致して後味よろし。

（本稿　真鍋一瓢担当）

同舟近詠

松山市　前田伍健

宣言は拍手で天へ訴える
首相云う雨のふる日は天気がわるい

須坂市　高峰柳児

普請場が監督我鳴る声で暮れ
案山子コンクール惰農に占められる
焼芋へ女同志が見栄を捨て

和歌山市　秋月宏方

設計図妻となる娘の意志も入れ
終点へ送る役です霊柩車
カメラ持って古稀もう近いとは見えず

敦賀市　船木夢考

屋上へ来た団体へ塔が見え
ゴルフから帰るのを待つ応接間

大阪市　石田沐天

前身にものを云わせて御開店

今治市　長野文庫

本を持ち歩かずラジオ持ち歩き
土曜日の午後小切手が疑われ
酒が酒のみだした頃課長去に
銅像の背中の方で人を待ち

大洲市　米沢暁明

サックドレス何処を褒めようかと思い
自家用車お医者と判る程田舎
邪推まで一人前の娘に育ち

今治市　月原宵明

真実の恋はうどんをすすりあい
テキパキと娘メニューを注文し

一路集（十二月号）

「短気」短評

清水白柳子

魚釣りをしたらと短気すすめられ　（参無子）

釣りと短気の句が無数にあったが、釣りと短気を並べただけでは句にならない。その点この句は、すすめられの下五に批判があるので頂いた。

気短かの拳　結論まで聞かず　（昌男）

手が早いことの句も一人に一句はあったが、結論まで聞かずという句の焦点によって頂いた。

竹割ったような短気を好かれてい　（初甫）

こうした句も多かったが、下五がよかった。

その訳を吃って言えぬ短気者　（牧人）

この句も同想が多かったが、上五が特によく言い取ってある。

短気さえ出さねば申分ない養子　（藤波）

ここにままならぬ浮世がある。短気な養子を見つけた非凡な着想が入位に入った。

遮断機へ短気な男道を変え　（夢路）

短気な男の心境を描いて余すところがない。具体的な表現に教えられるものがある。地位に頂いた。

金のある間は短気でも通り　（淀月）

句の批判性を高く評価したい。集句中の白眉である。「短気」の天位となった。

姉妹品　ワダカル・ビタM　ビタミンB1入小粒　五〇〇錠　二〇〇円
ビタミンB1・B2・A・D・燐・鉄　配合　二〇〇錠　三〇〇円

繪島・生島（上）

冨士野鞍馬

正徳三年（一七一三）大奥の老女絵島と山村座の俳優生島新五郎との恋愛は、大問題となり、絵島は信州高遠の内藤駿河守に永のお預け、山村座は断絶、新五郎は三宅島へ流罪となった。

島へ島忍んだ果が島の沙汰
（タル八八）

島と島ひそかによって事が出来
（万安八）

濡れ事をまことにしたで島へ行き
（タル七）

その原因は、今もよくある贈収賄で、

役人の骨っぽいのは猪牙に乗せ
（タル二）

を裏でいったのであった。つまり女公務員の収賄ということになり、空前絶後ともいえる。その頃の大奥は、全般に風儀がみだれていたようである。

浅草諏訪町に、栂屋善六という用達があって、その出入の出羽屋源七と相談して、江戸城内へ薪や炭を一手に納入する特権を得ようと計画したが、なかなか許可がないので、その筋へ特別運動をすることにし、当時大奥で一番権威を持っていた絵島に渡りをつけることにした。

善六は、先ず源七の手から、小普請奉行小金井六右衛門へ、金百両を贈って、絵島へ連絡をたのみ、更に大奥の医者奥山交竹院へ、その家族にも莫大な贈物をして、口添えをたのんだ。

交竹院は、すぐ承諾して、絵島を紹介することにきめて、絵島に芝居見物をしきりにすすめたが、奢りを好み、姪奔的な絵島は、早速日をきめて承知した。

正徳三年（一七一三）四月二十五日に、山村座の桟敷八間を買切って、上四間は翠簾を釣り、後ろへ幕を張って、下四間は幕を張って金屏風を立て、美しく飾り立てて招待した。絵島はその日所用にかこつけてお城を出て、日頃親しくしていた女中数名と共に、鉄打駕でやって来た。

その時の狂言は、二代目団十郎が、始めて助六を演じた時で、新五郎は白酒売の役で、大入の盛況であったが、絵島は、つまらなそうな顔をしていたので、取持役の清五郎は、子供役者を残らず呼んで、酒の相手をさせたが、やっぱり絵島は浮かない顔をしていた。それでまた手を替えて、立役の団十郎と新五郎とを招いたが、舞台の都合で、桟敷へは来なかった。絵島はますます不興のようで、その日は帰ってしまった。

これでは、折角大枚の金を費って失敗ということになるので、次は、小普請奉行小金井六右衛門の催しとして、再び山村座へ招待して、前の失敗に鑑み、取持役清五郎は、予め団十郎と新五郎とを、酒の相手にたのんだが、さすが団十郎はきっぱり断った。そこで、座元の長太夫とも相談して、新五郎に旨をふくめて、狂言なかばに、絵島を忍び道から連れ出し、座元の二階で、初めて新五郎と密会させた。それがやみつきとなり、二人はその後、しげしげと会っていたのであった。

新五郎うわっく皆さ来てござり
（タル二四）

新五郎西の五六をじろり見る
（万明六）

その頃、江戸の各劇場へは、町奉行の下役、盗賊改役、徒士目付、御小人目付などが、見廻りに来て、役桟敷から見物人を見渡していたのである。

ところが、十一月、山村座顔見世狂言の時、徒士目付の松永と、御小人目付の岩崎とが、例により監視していると、西桟敷の翠簾の中から、なまめかしい手がのびて、舞台の団十郎の素袍の袖を引いた。見物人は驚きあきれて、口口に騒がしく、それをきいた役人の松永、岩崎はだまっておれず、調べてみると、そのなまめかしい手は、絵島の手とわかった。目付役の習慣として、三度までは見逃すことになっていたので、その日は沙汰なしにすませたが、絵島の乱行は、日に日に甚しくなった。

翌四年の春狂言に、絵島は、代参ということにしてお城を出て、また山村座へ乗物を向けた。その日の桟敷は、例により医者の交竹院、小金井六右衛門、善六、清五郎に、問題の新五郎も加えて、笑いさざめき、果ては翠簾を上げて、盃のやりとりするなど、傍若無人の狂態に、見物人は、舞台よりもその桟敷へ目をそそぎ、ののしり騒ぐのであった。

この日も、目付役の松永、岩崎が来ていて、この有様を見て、もう見逃し出来ないと、委細を調べて、月番町奉行坪内能登守へ逐一報告した。

ところが相手が、現将軍家継の生母月光院付の表年寄というので、能登守は老中へ伺いを立て、評議がひまどり、ようやく二月七日に、関係者

川雑不朽洞会員のシンボル!!
美しいバッジが出来ました
スマートなデザインは、キットお気に召すものと自負しております。
（1個200円・送料8円）
申込所　大阪市住吉区万代西五丁目二十五番地
川柳雑誌社
（振替口座大阪　75050番）

を呼出して、証拠書類をつきつけて実を吐かせ、それぞれ断罪した。

その結果は、交竹院、六右衛門、善六、源七、清五郎は遠島、山村座は即刻廃絶、座元長太夫と新五郎は、三宅島へ流罪となった。

絵島も「其罪重く候といへども御慈悲を以て命助おかれ永々遠流に行われ候者也」という申渡しで、俵島へ流罪ということになったが、月光院の請いによって、配地を信州高遠に改め、領主内藤駿河守に預けられた。

美しい流人大飯食いになり
（タル四・拾六）

――信濃者は大飯食――

この取調べに、山村座の俳優全部、その他関係者も呼ばれ、団十郎も調べられた。絵島から貰った杏葉牡丹の紋の蒔絵のついた手箱があったが、役人は「これはその方の替紋であろうな」と粋に気を利かせてお構いなしになった。それから団十郎は、杏葉牡丹を替紋として、代々使うようになったのである。また森田座も調べられ、市村座も中村座もビクビクものであった。

この事件に連座した者、遠島、追放、改易閉門、親類預け等処罰百人以上もあったということである。

第十回大阪市民文化祭 川柳大会

思うこと

戸田古方

昭和廿四年秋、心斎橋の大丸百貨店の木曜会の部屋で、第一回大会が催されてから回を重ねること十たび、順調といえば順調に、成長したといえないこともありませんが、いささかの物足りなさはおおうべくもありません。

十才といえばやんちゃ盛り、ぐんぐん伸びるはずなのに、まだ着物がつんつるてんになっていませんねと西尾栞さんは開会のことばに述べ、さらに巾広い市民の参加を望まれたのは社会教育課長さんでありました。武田北州さんは集った会衆二百を見渡して閉会のことばの中で「おじょうず抜きで盛会とはいえません」と痛いところをついていられました。会後の懇親会での反省も、もっぱらこの点に集中されていました。猫の首に鈴をつけるが如く、これは実にむつかしい仕事なのです。

本年は主催者の中へ川柳連盟が復して、在阪柳社の顔が全部揃って賑かになりました。その上、昨年あたりから、大阪市当局の力のいれ方が以前とくらべて一段と強化されました。しかも本年は句報希望者の予約券の前売とせず、まことに何もかもが常道に進んで来たことは喜ばしいことですが、真の市民のために開かれた川柳大会でなく、まだ柳人の川柳大会といった感じが強いのです。柳人も市民だからといっても、やはり市民大会はもっと拡大されたものになってゆかねばなりますまい。

順調に、型通り、静かに催されたから余計にそう思われたのかもしれません。本年は兼席題の披講以外には水府、路郎両先生の講演だけしか用意されてはいませんでした。アトラクションや各界の有名人を引張って来るのは本筋とはいえません。出来ればそんなことをしないで市民を大ぜい集めたいのが念願なのです。そういう意味で今年の大会はよい試金石でした。又反省もさせられました。

路郎先生の御話はその結びに「イギリスであなたの句が訳されていたり」、「ソ連で川柳家であるあなたが歓迎されたり」といわれ、いつもながら気魄に富んだものでありました。ことに「川柳学未だ出来ず」とは川柳一筋の先生の面目躍如たるものが感じられました。かかげた表題「大阪と川柳」はいささか大きすぎたと断りながら、「大阪は樣かれかけてもよいところ」と高橋かはる氏ともに大阪をほめ、「食べものは大阪だっせそうだっせ」と長崎柳秀氏とともに大阪を愛し、「大阪でだまされたのも修養や」と福田山雨楼氏とともに大阪を考えられるのでした。故人となったこの三人の愛弟子を通してウエットの大阪をながめ、「あれ君の恋人か」とあからみもせず語り合う現代小学生気質を通してドライな大阪と比べつつ、威気愈々あがる万年青年路郎先生は病後の疲れをけっとばして「川柳の社会化」からさらに「川柳の世界化」にまで伸び展がってゆかれるのでした。

文化とは何か、文化の定義は一言では尽せないでしょうが、路郎先生はその理想を、各々人類の幸福という型でしっかりとつかまえて示していただけたのでした。

文化運動のありようは、具体的に申して、他のPR運動の如く、一人が一人をふやしてゆく方法、パッと派手に引きつけるアトラクションの利用法、又地味に細胞を作って組織立てて行く方法などさまざまありますが、いずれにしても、長あれば短ありで、実にむつかしいのでありましょう。結局求めずしてはあたえ得ないものであり、市民の負担に於いて催される市民川柳大会を市民のものにしなければなりません。文化への願いは誰でもが持っているはずであり、又持つべきでありましょう。川柳が全ての人の口に合うものとはいえないにしても、縁なくしては、所謂、縁なき衆生と残されてしまうでしょう。大衆の流れとマッチさせる、そこに市民川柳大会の意味があるのではないでしょうか。十年やってもむつかしい。巨費を投じて広告戦は永遠の流れの如く聴われています。金もいりますが努力です。この辺で柳社、とその傘下の全柳人は市当局とともに人智を尽して努力を惜んではなりますまい。来るべき第十一回又第十二回と堂にあふれる盛会をかちとりたいと念ずるものであります。

食堂とホテルと集会場
北極星
•ご休憩お一人様200円 •お宿りお一人様400円
大阪•戎橋 TEL 戎(64)1275～7

近作柳樽

麻生路郎選
北川春巣選

通風筒からから音も秋深し　堺市　吉本　菁風
修理工年がわからぬほど汚れ　同
臨月の妻へ歩調をおくらせる　同
自転車に股いだままの立話し　同
手洗いのタオル家風のはしを見せ　同
かど取れて来て関取は弱くなり　同
中年の鼻毛動物的に見え　同
妻も老けたりベタ靴でよいと云う　大阪市　平沢　保美
手八丁で支え口八丁で敷き　同
ドラマ皆のがさず家事を忙わしがり　同
定年の如く鶏締められる　同
金と暇出来たに遊ぶ術を知らず　同
頂いた菊の手入れにまで来られ　同
使っても減らん頭が薄うなり　同
お祭りを派手に酔わせる選挙前　兵庫県　永尾　永断
公園のベンチが冷えたから別れ　同
スクラムを組むと音痴の唄になり　同
発禁の書を取出して読む夜長　同
階前の梧葉詩もなく机拭く　同
出戻りの姉の晴着で出る仮装　同
電柱のような息子に手をひかれ　石川県　同村　虹要
ひざ枕させて欠伸をかみころし　同
ラジオでも鳴らさにゃ宿題おちつけず　同
悪友にしかとアリバイ頼んどき　同
未亡人必死自転車のけい古　同
飲むまねをして健康を尋ねられ　玉野市　伊原　明林
肩書がとれて白髪がよく目立ち　同
貧乏の幸福ばかり説く牧師　同
祭り酒飲んで鳴子を引きに行き　同
望遠鏡のぞく名月詩にならず　同
ぐれた子よ戻って欲しい盆の月　宇部市　上林　粗影
宝石の魅惑をけって鍬を持ち　同
秋一人耳鳴りを気にして詩を創り　同
儲話にお茶を淹れこぼし　同
秋はよし我家の庭の虫しぐれ　同
アンテナの高さにまでも意地を張り　小松市　関戸宗太郎
まにあわぬ順で日曜起きて来る　同
あっさりとミルクに変えて共稼ぎ　同
税務署が見付けてくれた使い込み　同
銀行が税務署程に見てくれず　同
横笛へ秋は静かにじり寄り　大阪市　板東千代美
ふと胸に響く詩吟へ向きをかえ　同
野を行けば野菊も泣いていた夜露　同
袖口で古い涙を拭いて恋　同
カナリヤの夢たそがれの灯がとり　同

雑筆春秋

秘湯・籠坊温泉

福田　丁路

籠坊温泉――、大阪からは福知山線三田駅下車、バスで一時間半の、山深い兵庫県多紀郡後川村籠坊にあって、秘められた閑寂境と聞いたので、いつもの五人連れで、紅葉にはまだ早いが、ある土曜日の午後大阪駅を発つ。

宝塚から三田までは、トンネルが多くて悩まされたが、景色は素晴らしい。

車中からカメラを向ける良い景色　丁路

三田からはタクシーを奮発する。谷川に添うて、断崖はないが険阻な道である。所々に見受ける田畑には、猪による被害を防ぐ、木柵が施されている。熊も時折出るらしい。

夕暮近くなって、タクシーは肝の冷える程飛ばす。

熊の出る山路へ夜の幕が降り　丁路

一時間程で渓流に望んだ、山ふところの穏かで美しい温泉場に着く。

建増しへ息子のせいがない返事　岡山県　太田　蓑流
参考になったと署長飲んで去に　同
アンケート夫婦仲はと失礼な　同
脛ぬけたズボン上座へ坐らされ　同
誓詞もう忘れ仲人呼出され　同
女子大にやれば男がもの足らず　宇部市　岩原　箔川
どん底へ来て毒薬も入手する　同
小走りにサンマが帰るお午前　同
道徳がどおのこおのと親を捨て　同
運動会いっちオマセなのがころび　同
かさかさと落葉を踏んで恋が来る　大阪市　国府　玉枝
重ね着をすればだるまのようになり　同
思い切り厚化粧して見るも秋　同
秋祭りおもやの柿の艶といる　同
お隣りのテレビへ涙ながして来　同
子が出来て目刺しでいいと云ってくれ　氷見市　関　す頭女
スターには趣味ですと云う台所　同
式すんだとかで産着を縫い初め　同
テレかくしにベビーほめたら喜ばれ　同
手間取った診察室で風邪を引き　岸和田市　中野三四郎
孫の手の艶先代の背も掻き　同
世話好きの妻に留守番させられる　同
ラジオ聴き口笛吹いて本を読み　同
腹八分成る程と識る年令となり　鳥取市　高田穂波子
老骨の哀れサロンパスへ期待　同
スケジュール組めば遊びも忙がしく　美祢市　同

老人へ嫁く縁談の打算めき　同
逆夢か知らぬが妻によろめかれ　滋賀県　土守　蜻蛉
すぐに子が出来て仲人気が安み　同
婦人会の中でも妻はよく目立ち　同
新しいワイシャツへ子を預けられ　同
十八の虚栄満足さす模造　宇部市　平田　実男
平熱にかえれば元の夫なり　同
倦怠期予報通りに傘を持ち　同
里帰りハンドバッグに愚痴も入れ　同
頼まれて恋の軍師を相つとめ　大阪市　竹内花代子
嘘ついて帰れば嘘が届いてた　同
同伴で行けば迷惑そうな顔　同
番傘を借りて道頓堀を抜け　同
ハネムーン三日三晩を降り続き　岸和田市　内藤ささ子
オートバイが止りさかな屋の出前　同
一級で別れ二級で酔うみなみ　同
松茸のはしり尊く汁に浮き　同
秀才の子にはなかった契約金　若松市　三上　春雄
実印を押させて他人の顔になり　同
よろめいて位牌に遠い部屋で寝る　同
善処することでどうやら酒になり　同
喪服着ていても器量を比べられ　岡山市　宗高矢寸志
綴り方怒らせぬほど面白く　同
教育映画予告篇ではキスを見せ　同
どぶ板の音が嬉しい祭下駄　同
金利で食えるに投資してなくし　美祢市　安平次弘道

温泉が薫り皆んなの鼻が
向きをかえ　丁　路

飛々に、古朴な旅館と民家が数軒あって、それに猫の額程の田畑が附随している。
温泉といっても、濁った沸し湯で感じは良くないが、効能はあらたかな由。

里帰り気分で山の温泉に
つかり　丁　路

食事は堅いかしわのすき焼に、附近で獲れた川魚の干物と酢蛸が出る。こうした山深いところで、ぜい沢をしようという考えは毛頭ないが、都会では味う事の出来ぬ、山には山の幸がある筈であるから、そうしたものに心を配ってほしかった。
娯楽設備は、碁・将棋以外は何もなく、それに飽きると布団にもぐるより術がない。

ヒゲソリ後に
アストリンゼンは世界的常識！
1 生々した男性美をつくる
2 爽快でヒゲソリがたのしい
3 新強力殺菌剤G11配合で一層強力！
明色アストリンゼン
桃谷順天館

終電を気にして女につねられる　同
不渡りと決ってぐっすり眠り　同
勉強部屋親に聞かせる声を立て　石川県　林　古意知
お静かに願って勝手な意見はき　同
勉強の出来る長男家を捨て　同
群衆の中の私が小さ過ぎ　玉野市　則田水鏡子
秘書或日社長夫人とくらべてみ　同
赤帽に重いですよと妻やさし　同
焼鰯の匂いに秋が忍び寄り　笠岡市　佐内　隆文
仲裁の巧さ苦労を積んだ人　同
謝恩会ビリで出たのが発起人　同
松林に波の音をも添えて撮り　大阪市　西本　保夫
出発をクーポン券がせき立てる　同
小走りに歩いて未亡人強く生き　同
婚礼が決ってからの日の早さ　兵庫県　河原みのる
山伐って皆んな紙屑にしてしまい　同
家こわす音は淋みしくひびくなり　同
葬式で花輪の数をかぞえて来　西宮市　山本　一傘
定年の椅子へどっこいしょと坐り　同
分別がパンにつながる五十過ぎ　同
やけ酒の途中で損だなと思い　笠岡市　高木　桃里
町工場でもピッチャーを求めとり　同
孝行をほめて八百屋はまけてやり　同　沢田　美喜
お見合は菊の花咲く秋の下　堺市　同
容姿端麗いよいよ狭き門になり　同
おさつ食べ食べスタイルブックで囲み　同

農繁へ妻の口紅あせたまま　岡山県　杉本たつよ
看護婦の和服奥さまかと思い　同
稲の出来見越して作る娘の晴着　同　石川ひさみ
物干しは子の無い色を干して派手　豊中市
向きあえば女のしょさで炭をつぎ　同
秋の雨蛇の目の粋を見せて逢い　同
秋ほめていたら寝ていて風邪を　大阪市　坂東　若芽
雨の音心の垢が流れそう　同
若いのをお持ちなさいと元気づけ　同　岡田花奈女
十代の恋をうらやむ日が続き　天理市　同
孫にまでもう叱られる歳になり　同
落第をした子に親が養われ　同　須藤　俊江
秋の夜の隣りの欠伸きこえて来　高知市　同
カニの足に似てサンダルの赤い爪　同　出原　真奇
四十にして惑い六十才でよろめき　同
役得へ酒を飲まして礼を云い　笠岡市　同
よく聞けば猫に小言を云うて居り　同
日日好日早死の父をふと想い　同　藤冨　淀月
児の機嫌なおして帰るロバのパン　大阪市　同
現金の入る商売すすめられ　同
中味よりプラスチックの容器ほめ　同　林（図男改め）参無子
木犀の匂いの中の君とぼく　豊中市　同
雷の落ちぬも淋し一周忌　同
直すのを見てたら払うの惜しう　同　遠山　一雨
東大を受けると云えば見直され　兵庫県　同
国家公務員のうちに盲腸すませ　同

川柳雑誌社特製
投句用　柳箋
一冊（五〇枚綴）三〇円
送料（一冊分）八円

鬼に角、山は深く、流れは清く、そして人情の厚い、脂粉の香のない、野暮なところが実によく、独特の旅情が味わえる。

からかいに乗らず女中は頬を染め　丁路

他に客は、何か書きものをしている老人と、隣村――といっても大阪府であるが――農業協同組合（以下農協と略す）の女を交えた一行五人である。

翌日、往路に依らず大阪の北海道といわれる、天王部落を経て帰る事にして、その道順を農協の人に聞くと、その人達も同じコースで、途中までオート三輪車が迎えに来るからと、親切に同乗をすすめられる。厚意に甘えて便乗をお願いする。

附近を探勝する積りで、宿の人々の心からなる笑顔に送られ、農協の人より先に出発する。

真心をこめた別れの最敬礼　丁路

名勝や旧蹟は見当らず、無駄口を叩きながら、谷川に添うてブラブラと歩く。二粁ばかりで、熊笹に覆われた心細い小径となり、ここを又二粁程行くと、谷間に田圃が見えて、道らしい道に出

突撃のラッパ応援団に活き　同　鈴木村諷子
秋晴れの村へ繰り込む稲車（鳥取県）　同　鈴木村諷子
鶏小屋は煌煌母屋うす暗く　同　米浪進之助
後妻のために稼いでやったこと（になり）　同　米浪進之助
不発弾抱いてるような倦怠期（大阪市）　同　米浪進之助
ドック入りまだまだ未練のある命　同　米浪進之助
ソフトクリームで別れた恋のたかが知れ　同　米浪進之助
何願をかけたか口髭とっており（貝塚市）　同　護川　梢月
本ラジオ孤独も自由で又愉し　同　護川　梢月
こけたまま咲いたダリヤのなまめかし　同　護川　梢月
逢うて来た余韻アイロンかけている（熊本市）　同　田口　麦彦
日曜の朝寝サラリーマン一家　同　田口　麦彦
ビタミンの粒を数えて倦怠期　同　田口　麦彦
小商泣かす祭の雨がふり（広島県）　同　杉原　愛鳩
料理屋の増築僕も義憤組　同　杉原　愛鳩
赤い爪してコスモスの花を剪り　同　杉原　愛鳩
親馬鹿もいいな晴着の子と歩き（出雲市）　同　山本　朱紅
大声が地声と喧嘩派手になり　同　山本　朱紅
器用さを買われて未だ現場に居　同　山本　朱紅
更生をして青空へ背伸びをし（鳥取県）　同　土江　洋々
入墨の肌を更生の汗流れ　同　土江　洋々
吊革がきれいにゆれる終電車　同　土江　洋々
どれを着る思案女は坐り込み（神戸市）　同　小池　鯉一
やつれたと他人が云うたのが口惜し　同　小池　鯉一
五千円札一寸おがんでくずして来（松江市）　同　岡崎　祥月
神経質な男と云われ眼鏡拭く　同　岡崎　祥月
チャルメラに碁客おしい腰を上げ（貝塚市）　同　紙田　山水
トンボ群集して災害地見舞い　同　紙田　山水
月並な意見へ老いたなと思い（笠岡市）　同　木山　二路
知り顔を茸番咳で追い返し　同　木山　二路
崑えがく河童も冬と云う寒さ（奈良県）　同　吉田　凡茶
貸した方が悪いと貸した味方なり　同　吉田　凡茶
老夫婦おんなじ薬服み合って（山形県）　同　菊地　白葩
にぎやかに家なき道を宣伝カー　同　菊地　白葩
説教よりしびれの方がよくこたえ（西宮市）　同　渡辺　勝子
夫婦げんかしながら糸は無事に巻け　同　渡辺　勝子
天高く総評鉢巻しめ直し（貝塚市）　同　杉本　一鶴
アルバムへはるよな愛情物足らず　同　杉本　一鶴
食う事に追われてテレビあきらめず（児島市）　同　伊丹柳瓢子
温室の隙間気になるノイローゼ　同　伊丹柳瓢子
夕焼へ紳士はブラインドを開けず（京都市）　同　都倉　求女
やせた同士風呂につかって胃の話　同　都倉　求女
空青く校長訓話まだ続く（西宮市）　同　青山　町子
心に灯をともす如くに紅をさす　同　青山　町子
人悲し時計如きに支配され（枚方市）　同　宮川　珠笑
すばらしいアングル風水害写真　同　宮川　珠笑
暇つぶしの釣りで退屈して帰り（宇部市）　同　鎮浪　翠月
失業へ弁当箱にも見放され　同　鎮浪　翠月
諸準備が雨の運動会をさせ（大阪府）　同　谷沢　好祐
スラックスにモンペの悪夢まだ残り　同　谷沢　好祐
修養が足りぬかまたも腹を立て（西宮市）　同　中橋川太郎
残念賞水引だけが豪勢な　同　中橋川太郎

ここから大阪府であり、オート三輪車を待ち合わす場所である。

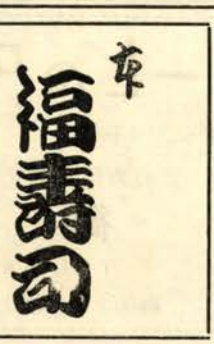
道端の草に腰を降して雑談をしていると、三十分程で農協の一行が見える。

その入達が提げて来られ、自分達の側に置かれた籠が、突然に大きく揺れて転り出した。こちらの驚く顔を見て農協の人々は大笑いである。訳を聞くと、この一行も籠坊温泉は初めてであり、食糧が不自由と聞いたので、すき焼用のかしわを持参したところ、自分達と同様にかしわのすき焼が用意されていたので、又重い目をして持って帰るとの事。それが暴れ出したのである。

この都会離れのした、ユーモラスな一駒に、自分達は腹の底から声を出して笑った。

都塵から逃れて笑い取り戻し　丁路

予定より三十分程遅れて、迎え



心斉橋筋大丸前
電話㉗三三四四番

口紅の昼寝を蠅につつかれる（和歌山県）　木下　一休
螢光灯つけて冷たい人と会い　同
三十に成って後妻の口に替え（大阪市）　宮原　敏子
ホームラン（やっぱり）テレビを買（うと）決め　同
御機嫌の音痴深夜へ憚らず（西宮市）　安田　義子
出世して自由になれぬ世を悟り　同
校長先生も鉛筆なめて書き（田辺市）　室井八九寸
野菊など活けて斜陽は家風見（せ）　同

お彼岸　二句

四天王寺銭がなるなる引導鐘（大阪市）　井石　悟朗
お彼岸会お猿ものり附着おろして　同
蛇蜥蜴まで食べたのがまだ自慢（伊丹市）　小川静観堂
食べられるものとして観る鬼薊　同
水打ってホテルは夜の化粧する（玉野市）　小谷　仙山
人前は「お」の字を付けて子を叱り　同
御祝儀へだんじり二度もお辞儀（する）（布施市）　久米奈良子
もくせいへ二十の恋がよみがえり　同
日蓮の映画へ珠数を携げる母（豊中市）　寺田千代子
渋い柄選んで肩の凝りが取れ　同
子の十円取立て余りに厳しすぎ（小松市）　筒井　吉枝
理想論結婚までの夢でした　同
念仏の鐘が仏の目をさまし（宮崎市）　野口卯之助
飲むときの機嫌でいつもいてほしい　同
返金もせず贅沢な暮し向き（倉敷市）　小倉美音子
お土産の礼云い忘れてしゃべりなて　同
浪曲の出世美談は寝間で聞き（西宮市）　酒井　丹謡
会葬に代理名刺を三四枚　同
就職をしている筈が金送れ（鳥取市）　岩田八文銭
勘ですする家業古いと子は嫌い　同
借金をみんな返した日の浴衣（西宮市）　富永　夢路
友として心当りがある家出　同
緊張が弛んでドット老けて見え（玉島市）　井上　旭峯
憎らしい霧笛の中に飛ぶかもめ　同
正義派も若いからだと丸められ（鳥取県）　一生　無名
酔った目は親友の肩信じきり　同
運動会走らぬ母が疲れて来（宇部市）　神田　豊年
職につけばついたで腰の痛い愚痴　同
まあまあと云う新人の仕事ぶり（西宮市）　村上　球絵
目の明かぬうちにと子猫すてら（れる）　同
フィアンセが去んで母親呼ぶ地声（小松市）　万仲　一進
シネスコから帰り我家のせまくる（し）　同
口先でばかり働く亭主にて（青森市）　工藤　甲吉
だがヒモがつ（いてかなしい）アドバルーン　同
遠慮なく家内が肥える秋佗し（平田市）　石橋万古人
委員長時代と変る課長ぶり　同
人生論巡査に説いて酔うている（西宮市）　網元　彗星
ニコヨンのあぶれ我家の道遠し　同
ムチ打てど老骨ガタガタするばかり（大阪市）　島田　雄峯
座布団を二つに折ってまだ喋り　同
恋もせずさからいもせず娘は嫁ぎ（加賀市）　斎藤　巌
団交が縮めたように専務逝く　同
勝って尚お悔ある膳ののり茶漬（下関市）　宮藤　慈雨

コーヒの味
モダン川柳
心斎橋大丸北の辻東へ
御門
TEL ㉗ 6684
御集会には階上御利用下さい

急停車まにあい命拾いする　丁路

今度は天井がないので、うっかりしていると、放り出される虞れがある。お互い完全にヨロメイて、悲愴な顔で抱き合う。こうした苦闘の中にも、可愛い農協の娘さんにタックルされて、悦にいっている倖せ者もある。

二十分位で、大阪の最北端天王部落に着く。四辺山に囲まれた、裕福な平和郷である。道路は完備され、日に数回ではあるが、兵庫県の篠山から国鉄バスが通っている。

伝え聞いて、二十数年間胸に画の車が着く。往路と同じ様な激流に添うて、曲りくねった悪路を猛烈に突っ走る。危機一発の急停車に色を失う。

養老院華やかな過去語り合い　同

しゃっくりをしながらお酒まっぱらず　岡山県　横山一声

よろめきの口に乗らねば酒でつり　ハワイ　宮政周防

六度台ナースちやほやしてくれず　大阪市　堤勝三

金魚みなすくう野望を子供持ち　西宮市　藤田一本歯

朝顔の数読むことも日課なり　笠岡市　谷一山

大臣の過去をみんなは云いたがり　奈良市　内海敬太

栄転へライバル車窓へ送りに来　大阪市　河井庸佑

若い手が揃い復職落着けず　西宮市　樋口寿栄

社宅みな月給日と云う灯がともり　今治市　越智義夫

職場を替えて定年やり直し　京都府　塚脇笑太

親しさはまだ旧姓を呼びつづけ　兵庫県　藤本ゆたか

よくしゃべりよく食べる娘も月を待ち　西宮市　三上芙路

酒あって議事はすらすらほっとかれ　笠岡市　高木渋柿

日曜を出勤も居て母せわし　広島県　平田越舟

口紅を選ぶ女の真剣さ　西宮市　鵜飼鮎子

結局は金の話となりにけり　石川県　中町三平

おとなしい主人でわたしが派手に見え　大阪市　吉川悦子

お見合へ貧弱な髭剃って出る　松山市　河本南牛子

ともし灯も電化となりて彌陀の顔　西宮市　鈴木窓星

二次会を屋台ですます年となり　鳥取県　谷無閑

指ぼきりならし十代の反抗し　七尾市　松高秀三

簡単な式が不服な故郷の親　宇部市　籔下一喝

親のすねかじり息子のトヨペット　熊本県　淵川秀敏

白バイにだけは効めのないおふだ　大阪市　松谷政俊

金詰り隠れ部屋とも書窟とも　須崎市　高橋蟠蛇

就職が決ったあとの大欠伸　西宮市　末沢友子

氷平寺参拝

俗界の口臭を清水流しとり　西脇市　保西岳詩

作業服かえてたのもし工場街　大阪市　石原球太

脛噛り勤評阻止に大童わ　茨木市　高木繁太郎

歩くのはよせと云うようバス走り　石川県　高瀬幸路

観光バス揃いの団扇持たされる　大阪市　保田華甫

立ったままボタンを妻は付けてくれ　西宮市　山岡半歩

云いにくい所は頭をかくだけで　大阪市　安並十七

機械場の声で職長子を叱り　玉島市　秀川承平

仏心を路傍へ分けるお中日　堺市　武田軍治郎

参詣へ寄付のマイクの天王寺　大阪市　半田夏生

通勤の背広程にもサラリー出ず　奈良県　木村よしを

セパートに引ずられつつ曼珠沙華　愛媛県　柳原三多楼

画家の妻作家志望の夢捨てず　岡山県　楢原万女

ろうそくを点せば亡母に会えそうな　大阪市　石井伸生

茸とりの籠に夕陽が明かる過ぎ　金沢市　桐谷紋六

解説者逆転のたび理論づけ　西宮市　大石甘美

トランジスター離さず孤独愛して居　倉敷市　藤岡萌芽

千羽鶴癒ってからの置き所　愛媛県　鳥井川鳥

エプロンを掛けて産婆の顔になり　広島県　山内俊見

霧の中列車太陽とかけっくら　八代市　永松道雄

肥壺のとこで観光立ちんぼう　笠岡市　谷本鈍愚坊

十代は親の枕を足蹴にし　大阪市　万代句念坊

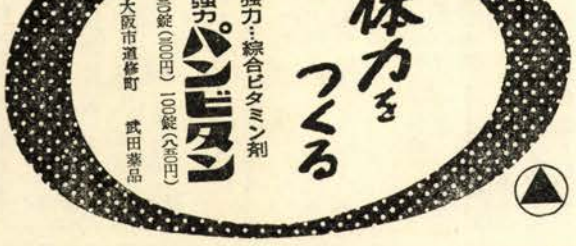
内職の肩に淋しい虫の声　大阪府　石田新石

娘は二十才父の知らないものを持ち　大阪市　中西兼治郎

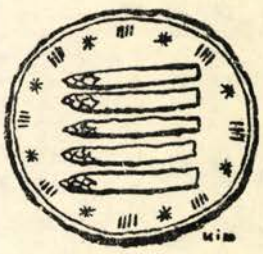
かれていた、僻地天王の姿はなく、只一つ民家と同じく茅葺で、今は公会堂になっている、元の小学校がその面影をとどめているだけである。

そこから快適な国鉄バスで、スリル満点の九十九折の急坂を西能勢に向う。峙からは山又山の彼方に、思いがけない大阪の煙が望まれ、遠く信州の山を行く感じである。

西能勢で阪急バスに乗りかえ、能勢電山下駅へ、そして又能勢口で阪急に乗りかえて、夕刻人波に揉まれながら梅田の改札口を出た。



胃袋拝見



十月のある日の夕食をご披露ねがうことにした。こちらの住文はハガキが着いた日の夕食であり、愚様方の虚をついたカッコウになつたが、それでもベンの珍味は上々であつた。（順不同）

Enquete

大鶴喜由

妻やまたむ靴音を高めんか

路郎

それが光陰矢の如く過ぎてやがて、妻と子と孫にぎやかな夜の膳、ともなりそれだけに夕飯の意義が深い、しかし僕は若い頃から其の日の仕事のしめくくり、囲碁・麻雀・川柳等で帰りが定まらず積って喜ばしくない家風みたいなものが出来てしまった。したがって早かろうが遅かろうが罷り通ることが出来る、それと献立以外に欲しい時は自分のお小使いですることにしている。

十月十五日雨、今日一日平凡だったことが喜ばしい、これは過去に精神的打撃又は病的苦痛をした人に於て初めて得る気持ちであろう。六時半家の畳を踏む、妻と子は食事がすんだ後だ、マグロのお造りとカレーウドン（カレーライスのライスをウドンに換えたもの）高菜の葉漬けだ、カロリーは充分だ、ツマミがあって酒がない、早速買いにやって小さい盃でチビチビ約三十分妻も二杯程つきあってくれ一合五勺位干したと思う、酔うたようなでないような気持ちが好きだ。胃が悪くても呑む風邪を引いても呑む、仮に病気であるとしたら呑みつつ癒ることを願っている、その代り薬は飛び切り効くものを撰ぶ、今日は風邪気味だ、酒がすむとウドンだ、毎日続いても苦しくない、第一胃の負担が軽くなる、第二噛むことがいい加減でもいい、第三やみ米のシマツになる。

食事がすむ頃例によって中学三年の子供と妻の軽い衝突が始った、理窟を云うことはそれだけ大人になりつつある証拠で喜ばねばならぬと保護者会で先生がおっしゃった、僕は子供に味方したり、妻の肩を持ったり、またとぼけたり、飴ん坊の川柳を引張り出して、二と二とは四だが世間は左様でない、術も使う。

◎中島小石

松茸土瓶むし　焼松茸
松茸御飯　鰺塩焼
ほうれん草浸し

毎日主人と一緒に大阪の診療所へ共稼ぎに出かける私。毎日のお献立は嫁と女中に任せきりの準男性暮し。毎晩帰って今夜は何が出るかと食卓をみるのが楽しみの一つ。一年中で今だけしか頂けない松茸とあれば、三度が三度でも頂きたい私と長男の望みかなった今日の夕食。主人は何んだ松茸ぜめじゃないかと大分不足そうな顔。私達が喜んで頂いているので今日ばかりは婦唱夫随とあきらめた様子。今夜は私の胃袋も大いに満足しておりましょう。

主人にはこの他に「ハマチ」のお造りとお銚子二本の特配がついておりますから、その点主人の胃袋の方もさして不足顔ではない筈だと思っております。

末ッ娘に負ける

伊藤茶仏

午後から金沢に出かけ帰宅したのは六時をすぎていた。

「あなた、今晩のことは書かないで欲しいッ」

「なんだ藪から棒に、」

「こんなアンケートが来ているのよ、」

「フン、フン、なる程」

ところが、中学三年の末ッ娘から横槍が出た、卑怯よそれでは回答にならないじゃないかと言う。

「それもそうだ」と両親が折れてお粗末な胃袋の御披露と言った訳である。

今晩（十五日）の献立表

お汁（ホーレン草に卵）
煮付（蓮根・揚げ・芋の子）
大根オロシに奈良漬　以上

私は二回も胃潰腸で吐血をしているので好きなテキもやらない、今晩は冷えるのでジュジュすき鍋が音を立てているが、私だけは箸をつけない、八十七の母も次男も末ッ娘も盛んに食慾を満たしている、妻は血圧を気にして肉はあまりやらない、毎日晩酌を五勺程度やっているが、今日は金沢で友人と一杯きこし召しているので、お預けという淋しい食卓である。

次男は会計事務所に勤めているので毎土曜は二人で晩酌をやることにしている、今春から三男が東京に遊学しているし、長男は今春結婚して引続き京都住い、正月かお盆でないと親子四人水入らずの酒盃を重ねる楽しみがない、今年も正月は四人で五升を軽くあけ、お盆はビールを四人で四ダースである。（但し正月もお盆も三日間である）

疲れた膳

尼絲之助

西鉄が三連勝を遂げた頃から商売に出かける。お茶をよばれるから長談議に及ぶこと五軒、どこの家でも煎茶を多量に頂戴するのが地方の習性だから、七時半頃帰宅した時にはチャポチャポ音がするほどの茶腹である。

もう家族は食事を終っていたので私の一人の膳、風邪気味、疲れ気味、おまけに茶腹と来ているので食慾も不足している。

さて、食卓は小鰺の塩焼、子供が獲って来たという何とか言う茸の煮込み、白菜のひたし、のりの佃煮、赤蕪のつけもの以上である。

私は味噌汁が好物である。それも塩あまいのをお茶代りにグイグイやるのが好きである。然るに今宵はお汁気なものがないからがっかりする。不平が口から出そうになったが大人気ないので押えた。

そこで一本を請求する。大体私は晩酌はあまりやらず、就寝が遅いので寝酒主義である。ともかく一本の効果はやはり争えず、気分も引き立って来たのでもう一本を追加、御飯は一ぱい、漬物が一番美味しかったというところ。

食後本誌のアンケートを示すと老妻大いに笑い「明日の夕食に延期せよ」との御託宣。

◎武部香林

僕の青春華やかなりし頃、夜食にぜんざいを丼で二杯も平らげていたものだから遂に胃袋が争議を起した。爾来一念発起、摂生よろしきを得て、今日迄胃病とは何ぞやと云いたい程である。ところで、あの未曽有の食料難時代に

は、恥かし乍ら男の意地も面目も台無しにしたが、今にして思えば、あの食慾がなつかしい。

さてその夜の献立と申す程ぜいたくをする境遇では無いし淡々とした差向いの膳には、ドイツ豆、人参、フランス菜など、バターでいためミンチを加えて味付してある。

胡椒、ソースはメ出しの、僕に適したわが家の味で、ビタミンを考慮した安上りがミソ、これを洋皿に盛って。酢のものの小鉢は、山の芋の細切りに、チリメンジャコを加えたさっぱりとしたものそれと漬物好きの僕に、小蕪の一夜漬がとても有難かった。新鮮そのものの風味は一箸毎に頭が晴れてゆく様で、これは漬物屋のものでは味わえない。食後土佐のお土産である闘犬餅を一つ、中々美味いのであるが、甘くて二個は食べられない、夕食は水分を抑制している、少々の地震には醒めなかった僕もこの一年目ざとくなった。夜中に生理でも催してはことなので、お茶は控え目にしている、胃が悪いと云いながら、胃袋を虐待している者が多いが、淋しい事ではある。

三合になれば胃病をかこつらん　路郎

この名薬を服用する僕の胃袋は健在である。

◎

太田良子

そうですね、今夜は森永のポタージュのスープと、オムレツ。それに小芋の煮物。

ポタージュのスープは、これに食パンを焼いて、バターを塗ったものを約二センチ角位に切ったものと、パセリか三ッ葉のみじん切りを浮かします。スープとしては既製品の味で、もう一つという感じもしないではありませんが、家庭では簡単で、安価で、私や子供達にとっては結構いただけますのでよく作ります。

又、オムレツも子供達の好物の一つでして、一方、野菜類が同時にとれて偏食をさける意味からも、主人が夕食をとらぬと解った日などは、好んで作ります。（主人は余り好みませんので）と云えば今夜は留守なんやなと思われますが、実はそうなんです。平均週一回、多い時で二回位は夕食をとりません。職業上止むを得ない人もありましても、大体一週間キッチリ家庭の夕食を楽しむ人は、ほんとうに忠実な御主人であり、お父ちゃんであろうと思います。そういう観点からみますとうちの主人などは、云わばサラリーマンという所ですから、往診その他止むを得ない時を抜きにしても週一回、ないし二回位は夕食をとらないややこしい日があるという事は感心出来ませんね。ですから主人の好きなお膳で待ち呆けに会って腹を立てるよりは、出来得る限り子供達の好物で楽しく夕食をとる事にしています。但し帰宅が明瞭な時は、この限りにありませんから御心配なく。そうそう夫婦げんかも忙しくてして居られませんから。変なとり合せですが小芋は母が好きですからよく煮ます。

味けない胃袋

若本多久志

関係の両会社とも決算期で、ハガキの着いた当夜は九時頃まで、社員と一処に残業していました。

従って、楽しいアットホームの晩餐は戴けなく、味けないお仕着せの弁当で事務的に胃袋を満たした次第。内容は——

うなぎの蒲焼
きもすい
お漬物一少々

以上、アンケート主題のお答えとしてはもの足りないことが残念ですがあしからず。

呪

須崎豆秋

うそとおべんちゃらの多い、キザな連中と呑むのが、いやでたまらんという先輩と、会社がひけてから、いつもの通り公園の入口で待ち合せて、行きつけのジャンジャン横町のどんどん屋という関東煮屋へ飲みに行った。

ここのお客さんは、赤裸々な人間ばかりなので、その虚飾とウソのない面白いはなしを聞きながら、ほのぼのとしたフンイ気に浸たって呑んでいると実に愉快だ。この店は大きい太鼓を釣ってあって、お客さんが一人這入ると、ドーン「いらっしゃい」、三人這入るとドンドンドーン「いらっしゃい」と三つ叩く、例外として一日働いて来た日傭労働者などへは、ドーン「お帰り」で迎える、という温情味がある。

林芙美子の小説「めし」のモデル店もこの近くにある。

私の胃袋はヒロズ、ガンモドキ、ホルモンの類で一杯になったので、又家内に「夕飯の用意がフイになった」と云って怒られないように、先輩とわかれてから大万へ寄って、マジナイにすしを一折買って帰った。

胃袋も多忙

市場沒貪子

十月十四日着便、この日府立体育会館は大相撲大阪準場所三日目で若乃花に土がついた日である、午后三時過ぎ入場間もなく喜由氏がやって来た。二人で喋っていると後から僕を呼ぶ声がするので振り返ると小松園氏であった。変った所で久しぶりの顔に会いなつかしい、お互に路郎先生の健康回復を喜び合って別れた、勿論見物中はチビチビとやっていた事は言うまでもない。太田山の弓取式がすんでからさる所で喜由氏外二人と呑むことになり、本町の所定の料亭にゆく、お風呂から出て膳に向ったのが六時三十分頃、鳥賊の辛し味噌その外の付出しにつづいて伊勢エビの作りが出る、それが又珍味で外皮は真赤であるが中味は白くて仲々美味、ビール一本位は呑んだここまでの胃袋は喜由氏と同じである、所が僕は義兄が京大病院で逝くなって今日が三十五日、その法要に家内が昼から京都へ行っている。是非行かねばならんので七時十分発の特急に遅れじとタクシーを京阪天満へ飛ばす、伊勢エビのおつくりの味に未練を残しながら、義兄宅では法要のすんだのが九時、それから会席膳が出る、ここでは、日本酒である、すすきの焼物、まぐろの刺身、玉子巻、高野豆腐、椎茸、油揚の煮たも

新児童音楽サークル

募集

バイオリン科・アコーデイオン科・チエロ科・ギター科・ピアノ科・楽典科・声楽科・音感教育科

講師

大阪放送管弦楽団奏者　麻生アート
大阪放送管弦楽団専属　徳永徳子
大阪音楽大学出身　渡辺貞行
大阪放送管弦楽団専属　坂田弘
毎日放送専属　市田

成人科（夜間）も設けています。詳細は当教室で規則書をお求め下さい。

奈良県生駒町本町2丁目103番地（若月）

申込所　**新児童音楽サークル**

電話生駒27番

の、それにおすまし、とうとう酔が廻って来たのかバラ寿司は折に入れてもらった。大阪へ帰宅したのは十二時前で、それからバラ寿司を戴いた。

身体も多忙だったが胃袋も相撲からの引つづきで負担が重かったろう。

なまけている胃袋

野村味平

今日は、いつもの得意先の行きつけのおでん屋で、うまいおでんをつつきながら、コップの冷やで、一パイ引っかけて、それから終業するつもりでいたのに、折悪く横なぐりの雨が、何時か止みそうにもなく、雨装束でないので、あたふたと、十七時に帰宅したので、胃袋は、とても寂しがっています。最後に廻った小料理屋でも格別に出前をする料理を見せつけられて、帰ったのですけれど、私の食卓は、何時ものことで、馴れてはいますが、淋しいかぎりです。自炊生活をつづけているので、一人のことかとも思われます。昨晩の炊きのこしの冷やめしが二ぜんに、ニシンの粕漬が二本、奈良漬と、味噌漬の二種類の漬物それだけです。ニシンは、甘渋味なので、漬物の方がうまかったようです。あとは番茶で、（これは煎茶で、軸の部分だけの製茶を使って居ります、この番茶なら有名な外科の胃腸病院で、患者に飲ましていると、おしえられてからは、こればかりにしています。）二杯、それに昨日職場で、茶話会のときに貰った、蒸菓子（白峯の雪）が持ち帰ってあったので、一つ戴いて、いこいを一本、私には、病的のように朝、昼、晩ともに、箸を放した刹那、甘い物と、たばこ一本が、無性に欲しくなるのです。果物は、あまり摂りません。直ぐに、アリナミン・ビタミンB1糖衣錠を二粒のみました。これが、今、机に向っている、私の、胃袋にある一切の物なのであります。

月給日の食卓

佐野白水

今晩の御馳走ですが実は会社の月給日（毎月十五日）であり、その上氏神さんの秋祭の日とて妻としては大いに奮発したのでしょうが、何分月給日と云うのは家庭に一番現金のない日で、主人が月給を持って帰ってからでは夕餉の間に合わず、家族には月給日として御馳走を食べさせたくと云う事で、この日の御馳走は貴重なヘソクリの一部を出してあれこれ考えた末、マアぼちぼちこれも良いだろうと云うので「すき焼」で玉子一コ付きと云う御馳走になったのでしょう。しかし昔から「芸題につまったら忠臣蔵」「おかずにつまったらすき焼」と云われており、どなたの御家庭でも珍らしくないものです。何分一家全員（と云っても子供二人と四人暮し）魚類をあまり好まず、拙宅で魚類の御馳走と云えば刺身程度で、肉類の料理を皆が好みますので妻としては芸題につまったと云うよりシーズンのトップでも切ったつもりの御馳走であったのでしょう。

マアこんな事で小生も一ヵ月の労働の代価をもらって帰った事であり、氏神さんの秋祭に事よせて一寸一パイと云う事で、いつもの一本が一本半程になり、妻や子供をまるで酒の肴のようにしてシャベリながら気嫌良く夕飯をすませ夕刊に目を通し、テレビを見ながら一寸一筆と云う次第……すき焼きの内容はどうって……いや、どこの家庭とも変ったものではありません。只ぼちぼち一パイやっていると高校の長男が牛肉をかたっぱしから引き上げ、中学生の長女が豆腐と鮫を引き上げ、食事をする時には百匁の牛肉も其の他の野菜も残り少なく、結局小生が残品整理と云う事になりました。

◎

友淵貴山

枝豆が大鉢に、山盛り出されてある。酒のあてに、これさえあればそれでよいと言う妻の安易な考えが、膳の幅を占めているのであるが、事実、これさえあれば私にとって、これが世にいう山海の珍味なのである。（何もかも安物に出来てるという声あり。）此頃でこそ大量に出廻っているので大鉢だが、出はじめの頃は、小鉢に僅かに盛られて、私を楽しませてくれたものである。

今晩も御代りをして二鉢平げた。チョビリ、チョビリで無く、グイグイと二級酒がコップで二杯、胃袋へ泌みこんだのは勿論である。真心込めてこしらえたのであろう？　香り高い松茸飯は、オンリー一杯、鶏肉の吸物も一杯、歳のせいで歯が悪くなったのか、特売デーのかしわだったのか、吸物の肉が堅かったので私の胃袋へは入らず、いつも尾を振って迎えてくれるスピッツの胃袋を、驚かしたのである。

胃袋の中

直原七面山

鯛の刺身と言いたいところですが、いつもに変らぬお新香の切り身。鯛にしてはちょっと肌色が違い過ぎます。それも樽底の加減か、酸味が強く歯の根に浸みます。松茸ならとにもかく、あみ茸に豆腐とネギをあしらった汁なので、秋の味覚にしては少し物足りない感じが致します。余り新鮮とは申せぬ鯖の煮付けにコンニャクの味噌あえ。これではどう慾目に見ても、肉体川柳の大家として、その艶名を天下にうたわれた直原七面山先生の御夕食にしては、ちと淋し過ぎるような気が致します。皿にはパンが二個あって、一つはジャムで一つはコッペパンのそれも半切れ。ジャムの方は妻湖月君が、勤務先の保育園から、幼女に配って余ったものを買取って来たものであり、半切れの方は、小学校四年生の娘の子が、学校の給食パンが美味しくないので、先生に見付からぬよう素早くその半分をハンカチに包んで、持って帰ったものです。茶碗には米麦混合の御飯が山盛り。別の小皿に食後の果物の積りであろう、裏の畑のいちじくの実が三つのっけてあります。こういった品々が、これから十数分間のあいだに、矢つぎ早やにどんどん詰めこまれてゆくわけです。余り強くもない可愛らしい胃袋の中へ。さっき汽車の中で、女の子におごってもらったアイスクリームが、まだ胃袋の中で泳いでいるかも知れません。はて、これで国民の皆様の公僕としての務めが、果して明日一杯充分に果せるだけのカロリーがあるのかということになりますと心配です。

株式会社 ㊐ 丸越

瓦斯器具 電気器具
雑貨 洋装品
靴鞄
家具
呉服
婦人服 紳士服
良い安い買よい 月賦 のデパート

大阪市阿倍野区阿倍野筋三丁目六〇
電話 天㊀ 3957・3978
大阪市住吉区長居町三五
電話住吉㊇ 4985
大阪市東住吉区平野新町三丁目一
電話東住吉㊇ 2110
大阪市都島区都島本通三丁目三一
電話堀川㊇ 7479
堺市熊野町東一丁一
電話堺 3587

アベノ 住吉 平野 都島 堺 店 店 店 店 店
十カ月払

天高く馬も肥え、人の子も燈下に文を播く今日この頃、恋の斗志も湧かねば作句意欲も燃え上って来ないところをみると、どうも日頃のカロリーの吸収不足であるらしいのですが、といって、今の私の給料からいえば、そう毎日毎日、それすき焼だ、それマグロの刺身だ、やれテキだカツレツだというわけにもまいりませず、まあこれ位のところが分相応の夕食というところであろう。

◎

山川阿茶

支那製の柴檀の食卓に九谷や清水の上等を並べたのは昔の事、三帖の茶の間に罹災当時親戚からわけて貰った当時金二十円也の食卓に綱太夫さんの処から貰ったふきんがかけてある。扨今夜のおかずは何んでしょう。

海老のオムレツと細胡瓜と茄子のあさづけ。御飯は軽く二杯しか頂きませんので一杯でオムレツを一杯はお茶づけであさづけをという寸法、いつもおかずの方が多いのが特徴、オムレツとはっきり云えぬ頃から黒い紙のぶぶづけ（海苔の茶漬）と共に好物の一つです。此の頃は牛肉やかしわよりも海老の入ったのが口に合うようになっておかずにつまるとこれにします。椎茸（松茸の時もあり）や、にんじん、玉ねぎ、きゃべつ、ニンニクも沢山入れます。白いお皿にみどりのパセリをそえると黄色いオムレツが引立って来ます。茄子の紫細胡瓜の新鮮な青と色彩的にも美しく食慾をそそります。夜はなるべく精進物と野菜にしようと云いながらいつも実行がむつかしい。晩酌する人があるわけでなく女中さんと二人殊に夕方は仕事の方が忙しくつい子供の副食物の様な簡単なものですましてしまう。口ぜいたくの方なんで私の口を満足させる献立にすると鉄砲玉がつづきませんのでレベルをずっと下げて若い人のカロリーを考えますそれで私には少し脂肪も蛋白も過剰になりがちです。安物ながらも皿小皿小鉢類の色彩や形をやかましく云うので女中さんもなれるまでは一寸辛いらしいです。

胃鏡で胃袋を一寸のぞいてみましょう。

ニンニクの隣へ卵坐らされ可愛いそうになァ。　阿茶

◎

河村日滿

松露川柳会（米子）へ鳥取から七人ほどでお邪魔をしたが、肝心の美笑さんが叔母（九十六才）さんの計で欠席されたので、戻りに立寄ったら商売柄でまあまあと一杯振舞われた。いい気分になって十七時三十七分の上り列車に乗り込んだが、調子が出たところなので、一升瓶を買いに走って貰ってウイスキーとのチャンポン。鳥取駅前でいよいよお別れというので又一杯と、連続の乾杯で帰宅が二十二時を一寸まわってしまった。お蔭で夕食にはありつけず（二十二時以後に帰宅の場合は夕食抜きの鉄則があり）特権の二合もオジャン（実際はもう飲めませんが）で寝床へ辷り込み、「胃袋へいま届きけり」の水をキューとコップに二杯戴きました。

◎

西いわを

わさび漬。菜葉のしたし。焼魚（あんかけ）赤だし（蛤貝）白麦混合めし二杯

定刻に食事の出来ない身上なので家では夕食を一緒にするのは休日位が関の山。その上昼食は外で喫するのが多いので出来るだけ夕食は菜食をとりたいので発育盛りの子供とは別な場合もある。随而台所は献立が違う上にまちまちな時間でこぼされることもある。

今晩は偶々出張から帰った長男の土産に「わさび漬」が出ている。これはいける、ゴマの菜葉が控えている、焼魚はとろりとしている。一ッパイ飲んで来た揚句は赤だしで恰度よし。めし二杯は深酒の印しでない証コ、うまいうまいと云うでなく、うまかったらお菜はすっからかんにしてしまう。大体何んでも胃袋へ入れてしまうのに太らない。「お宅の御主人奥さんと同じもの喰べていなはるのに何んで奥さんは肥えて御主人は細いのやろ」とは近処の蔭口らしい。でも喰べるもの飲むもの美味く頂けるのは健康のシンボル。せっせと作句に精進してまっせ。

◎

椙原一善

十月十五日久しぶりの残業で帰りアンケートの葉書を見る。

着便当夜のお膳拝見とある。

さて吾が家の献立は、これはいけない今夜は乙だなー。

だいたい我れ我れ給料生活者の食生活も月の内甲乙丙と分類されるのではなかろうか。

給料日当座は甲、給料日前は財布と相談の上で丙、中間は乙と云う事になる。

酒二合（残業日は丸公）

魚少々（前夜々釣の収穫品）

焼　飯

焼飯になった理由は、

今私の家は妻の病気で炊事担当は母私娘と気分の良い時は妻とその時々で変る。

その前夜は米を仕掛たのが私で、水を少々けちったのでコワイ御飯が出来ちゃって喰いてが無く夕食の焼飯となったしだい。

恥かしい吾が家の台所である。

◎

小西雄々

胃袋拝見のハガキを受取った日はちょうど年に一度の秋祭りでしたが、共稼の関係上、生憎くこの日は私も妻も残業で帰宅がおそくなり、夕食のお膳には特に変ったご馳走はなく、蛋白質を補給するための焼魚と、煮豆、佃煮、漬物の程度で、妻と苦笑していると母が寿司を持って来てくれました。

母が作る寿司は寿司屋が顔負けするほど美味いのですが、小学一年生の一人坊主は特にこれが大好物で「万才」をさけんで喜びました。あまり食べすぎて腹痛を起さねばよいがと心配したほどでした。

嬉こんで食べる顔みて母は去に

◎

津秋六花

鶏肉の味噌漬の焼きもの、鶏卵の目玉焼き、ナスの浅漬です。これが決まったように毎晩の膳に乗り時に目玉焼が魚の煮付けに変る事もありますが、肉の味噌漬は変りません。商売柄月に二十羽位の廢鶏が出ますが其の大部分を一人で平げますが家内の者はあまり食べないので漬ける事にします。

卵は一日三十個位の破卵が出ますので一日平均五個以上食べる事になり勢い明けても暮れても肉と卵ですが、ご飯は軽く一日四杯で

事務用品専門店
事務用・文具・器機・什器
株式会社 心斉橋クニヤ
本店 心斉橋北詰
電 (25) 4740—1
阪神店 阪神百貨店五階
電 (36) 1201

済みます。野菜の浅漬は普通の倍も食べます。晩酌はやりませんが決して呑めないのでなく必要とあれば？　五合位でほろりとなる位ですが、進んで呑みたくありませんから我ながら不思議でたまりません。

◎ 大西迷窓

日本シリーズ巨人対西鉄の第五戦を長島がどうの中西がどうのと家内と談笑し乍ら聞いていますと、突然柳友高橋蟠蛇氏が来訪されました。ラジオを聞き乍ら川柳の話に早替りです、蟠蛇氏は毎度の事乍ら路郎先生の其の後の御容体を訪ねられ先生の多忙の身を案じられ、先生の川柳を語り合うう先程川柳雑誌社から着いたばかりの「胃袋拝見」の葉書をお見せして夕食の膳となりました。家内のサービスしてくれる酒で色気や冗談は少ないですが、快よい夕食の膳です。蟠蛇氏とこの道の付き合いは家内も馴れています。蟠蛇氏に時折り飲まされるので最近は大分いける口になりました。胃袋の中味は蟠蛇氏がさわちを並べても箸をつけない位いの飲み方なのでほとんど酒ばかりです。肴は私が子供本位であるので、特別お菜の注文をつけることはありません。子供の好む物が多いのです。今夕は焼き豚と松茸がのっています。川柳の話からぼつぼつ良い機嫌になり始めた頃、蟠蛇氏の世馴れた声が聞えます。

『秋の夜は長いものとはまん丸な月見る人の心かも更けて待てども来ぬ人の訪ずるものは金ばかりッンツンと』子供も家内も楽しそうです。こうして柳友と家族的に「胃袋拝見」の膳を共に出来る楽しさは私の人生の一頁に託されてゆきます。そのひととなりから発散して私の胸に迫る蟠蛇氏の話を人生勉強と思い拝聴しています。本当に楽しい胃袋拝見の膳です。胃袋の中味は焼き豚と松茸の小量となりましたが信頼する柳人と楽しく飲んで人生社会の有益なる話を我が身に吸収して行くことは焼き豚の栄養価に勝るものと信じます。

◎ 小西無鬼

私の胃袋は酒には相当大きくふくれるんだが、と云って肴も大抵はペロリと平げる方で嵩は低いものがいい。「アンケートの着いた晩のお膳の上」と云う命令、恰も当地春日神社の宵祭当日着便したのでこれでもお祭の御馳走かと思われるだろうが御披露に及べば、かしわのすき焼を一家で囲む準備が出来ている、松茸とかしわのスキは田舎では秋の味覚の王者である。そこへ鯖のバッテラ寿司、午蒡、こんにゃく蒲鉾小豆等の煮〆等が風習になっている。今年はシメジのいいのを入手吸物と云った所。其他は酒のつまのうで豆、わさび漬、山椒味噌漬、僕の胃の腑は何でも来いと云う、だからお菜の小言はない訳で女房としては一生大きい得をしてる訳。

◎ 菊田いさむ

葉書到着十月十五日。

この日は氏神の秋祭り、私は今日一日会社は休暇を貰いました。午前中は雲が低くたれて今にも雨が降りそうな空、午后になってやっぱり雨、しかも大変な大雨、お祭りどころではない。しかし台所の献立予定では今晩はすき焼となっている、家内がづぶ濡れになって市場から買物籠を提げて帰って来る。

好き焼の中味は世間一般並みで、季節的に松茸が加えられる。今年は松茸の値が高いのでほんの一、二本で香りを臭わせて呉れる程度家族は大人六人、子供一人と云う大世帯、これだけで皆さんにはすき焼の分量がおわかりの事と思います、お酒、我家は晩酌をやりません。しかしテレビを見ながら……

今夜は雨で子供を連れてと思っていたお祭りは駄目だったが、腹は満足したので諦めて一と風呂浴びて寝ることにした。

宵祭

永松東岸

アンケートが到着した日の夕方の膳となると、ちょうど宵祭りである。まさか知っていてアンケートを出した訳でもあるまい。而し祭と言っても次第に祭日が統一されつつあって昔のように大げさな御馳走をして多数の御客を呼び夜通し飲むといったようなことも少なくなって来つつあり、従って平素と大して変らない御馳走になりつつありますが、やはり祭といえば「寿司」は作られます。いつか天皇陛下が岡山の厚子夫人の所においでになられた際に岡山の五目寿司が話題になったこともあると思います。それ程岡山の寿司は一般家庭で作られるものとしては材料が豊富であるし米は酒米として有名な備前雄町米が使われたりすれば全く美味しい。今晩作られている寿司のグには松茸、しいたけ、かんぴう、にんじん、ごぼう、卵、これ等は自給品、高野豆腐、竹輪、あなご、は買って来たもの数年前までは「黒ばかま」と称する蝦をちさく切って入れて居りましたが、最近あまり店先でも見かけられなくなりました。不景気で買い手が少ない為か余り獲れなくなったのかは判りませんがどうもこの「黒ばかま」が見えないと祭寿司らしく見えません。しかし寿司も同じ材料を使っていても上手、下手があり、私は母の作った寿司が一番上手で美味しいといつも思って居ります。他処で食べた寿司の味はどうも砂糖が使われ過ぎているようで、お菓子を食べているのではないかと思われたりして本当に美味しいと思ったことがないのです。その他宵祭ですから膳の上には色々ありますが、胃袋へ送り込まれた主なるものは「やぶ茸の三杯酢」に「栗きんとん」これは大好物、兵隊であった頃、秋になるとこれを思い出して、そぞろ郷愁を誘われたものです。子供達にもこれが一番の御馳走であり、いつかまた子供達の思い出につながることでしょう。ともかく今夜の胃袋は過重なノルマにあえぐことでしょう。

◎ 水谷竹荘

僕は、商売柄、夕食のおかずは自分で作る事にしている、たべたいと思うものが自分のたべたい時にたべられる特典がある。

そのかわり、じゃまくさい時もある。献立はカロリーを計算して肉類を主とした翌日は野菜色、次は魚類本位という工合に、毎日かえる、ハガキ到着の日の夕食は肉の日である、松茸とハムを小さく切ってバタでいためて、トマトケチャップを使って、焼めし風のハムライス、酒は盃に四五杯のむ事にしている、酒の肴は、生うにを、チビリチビリ、すぐ顔が赤くなるから、これ以上は飲まない。これだけでは一寸足らないのでロースハムにアスパラカス、マヨネーズをかけてたべる。

日本料理は自分で作るので、洋食が好き。

まだ何かないかと晩酌酔うていず　竹荘

お知らせ

バックナンバー御入用の方は、往復ハガキでお問合せ下さい。

川柳雑誌社

川柳歳時記（5）

水谷竹荘

冬の巻（一）

古川柳と忠臣蔵

演劇に映画に、講談に小説に、忠臣蔵を主題にしたものは、歳とともにいよいよ多くなった。歳時記も十二月にちなんで忠臣蔵と川柳について書く事にした。

それでその遺蹟巡りをかねて、赤穂の町をたずねて、色々と面白い話や、伝説を聞いてきたのを思いつくままにペンを走らす事にした。赤穂へ着いて、花岳寺や、赤穂城跡などを見て刈谷町（カリヤマチ）へ行くと古びた古井戸がある、石の標に息つぎの井戸とはってある。

早打といえば城中で刃傷ありたりとの飛報は大手下馬先、桜田下馬先の諸大名の供侍の間に喧伝されて、いずれも自分の主人の身を案じ一方ならぬ騒動をしたが、やがて浅野、吉良刃傷の儀につき諸供方、騒動致すまじき旨、目付衆より告示されて静まった。

直ちに急使が赤穂へ馳せつけることになった。第一の早打は、早木藤左衛門、萱野三平実之、第二の早打は原惣右衛門元辰、大石瀬左衛門信清、この早打が国家老大石内蔵助良雄に知らされ直ちに諸士赤穂城に集り大評定が開かれた。これからいよいよ忠臣蔵が始まる事になるが筋書を書いては長くてキリがないし芝居や小説で知られているので略す事にして川柳から見た忠臣蔵について書いて見ましょう。

五段目で運のよいのは猪ばかり

古川柳にある通り勘平とおかるを中心に描き出される山崎街道の場も運命の皮肉と、親を思い恋人をかばう人情のこまやかさが裏付けされているので、何んべん見ても人気があるのである、「縞（シマ）の財布に五十両」この名せりふも、現在なら五十万円と考えて見るだけでも面白いと思う。

軽石も一つ交つて義を立てる

大石内蔵之助に対して足軽の平右衛門を軽石にしたのはうまいものです。

錠まへの無いが一棹由良之助

天川屋へ持ち込んだ長持の中に錠の下ろしてないのは大石由良之助がかくれているのだとうがった句です。

大きな石で椎の実をぶっつぶし

四位の吉良上野を大石がつぶしたと言う洒落です。

泉岳寺他宗もみんな引受ける

四十七人の義士が皆一つの宗旨ではない、浄土宗、真言宗、日蓮宗と色々あるのを、みんな引受けたと言ううまい句である。

杉部屋へかくれると手におへぬなり

炭小屋へかくれたのを、上杉にかくれたらと洒落れたのである。

寝ぼけたで四百七人程に見え

四十七人を十倍に見た吉良家の家来のうろたえかたをよんだ句

泉岳寺客を墓所へつれて行き

石塔を客へ振舞う泉岳寺

昔は振舞いと言う今はもてなし泉岳寺が客へのサービスで墓へ案内する。

あくる日は夜打も知らず煤を取り

翌日の晩に義士の来るのも知らずにそうじをしていたと言う句

知れて居るものを数へる泉岳寺

四十七人と言う事は知っていても、義士の墓参りをして石を数える人が沢山あるというのをよんだ句

この外に詩歌、俳句、雑俳、等に忠臣蔵を題材にしたものは、集めると大した数になる。

赤穂市へ来て面白いニュースを聞いた。それは今年の五月三日、吉良、赤穂の手打式があった事である。国鉄赤穂駅前に「歓迎吉良町青年の皆さま」と書いたプラカードをたてて吉良方二十七名の到着を待ったそうだ。

そして吉良と赤穂の青年団は四十七士の墓前に香華をささげ二代目大石名残りの松で両者仲よく記念撮影、地元新聞は恩讐をこえてめでたく手打ちと昭和の快挙とデカデカと書きたてたそうである。

今、秋の行楽シーズンで毎土曜日赤穂へ国鉄の義士号が走っている。赤穂市からバスで国立公園赤穂御崎へ行って舟遊び、たこつりなどをして義士の史蹟巡りをする人が多くなった。名物は塩、塩味饅頭、あさり貝等。

赤垣はこけしにまでも徳利さげ

土産みな義士の名前をつけて売り

於・御崎にて　竹荘

麻生路郎先生著
川柳とは何か
—川柳の作り方と味い方—
送仙 二五〇円 三二円
川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたもろもろが十七音に圧搾された諷刺と諧謔の短詩型、それは伝統的であると共に常に革新的であるその川柳がいかにして発生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、しかもその作り方は、味わい方は——以上を最も明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる著者が答えているのが本書である。
取次所 川柳雑誌社
至文堂
東京都新宿区払方町27 振替東京29507

啼かぬ法師蟬

――亡き蛭子省二先生に寄せて

東野大八

さる八月十六日、蛭子省二先生が亡くなられた。この訃は、伊予の大洲の木郷川柳社が出している「木郷」八月号で知ったわけだが、その辞世の句は

――死生関頭、法師蟬音痴らし

というのである。

私が先生にはじめてお会いしたのは七年程前、逝かれた内子町の芳我邸の一室であった。当時、私は大洲に住んでいたので一日、先生のお招きもありして参上したわけである。

朝鮮で、有名な醸造家として恵まれた生活に在った先生ご夫妻が、たったお二人きりでリュックを背にこの内子町に来住されたのも、当時よくみられた在籍無関の、いうなれば出身地がこうだから、という単なるそれだけの理由で、海外生活半世紀以上の先生たちにとっては、それは旅中の一宿にも似た孤独寂寞の土地であったにちがいない。このお二人を親身になって世話をしたのが、木郷川柳社の御大今川椋影氏である。彼は、川柳に連なる因縁に加えて、拠りどころなき老夫婦の行きくれた姿に心からなる同情を禁じ得なかったらしい。早速旧知の内子町長芳我氏に懇請して、その内庭の離れにご夫婦を落ちつかせた。内子町といえば、今流行の芥川賞作家大江健三郎君の住む町で、ここでの芳我家は名門中の名門で、古い素封家で知られている。それだけに、その別邸の離れは結構なものであった。総ヒノキ作りの数寄を凝らした茶室風の一間からは、牡丹や木蓮の花やいだ花や木立が雅やかに押し並んで、清風尽くるところがない。

「こんな結構なところに住まわして頂いて……」

と蛭子先生は、私に会うなりそういってはや涙ぐんでいられたことを、今も昨日のように思い出す。部屋中の障子に、各柳人のハガキ、手紙の封筒、中味がすき間なく張りつけられ、一種の川柳的ムードを醸し出しているのに、私は愕きもし、感心もした。

「こうして余生を川柳人の温かい息吹きの中に自分を置くことだけが、何よりもの私の慰めであり楽しみですよ」と椋影氏の親身も及ばぬ心づくしをくり返し、私に語られるのである。その日は、二時間ばかり柳談ですごし、改めてまた近くへ仕事の戻りに立寄ったことがあるが、気候がよかったのか、持病のぜん息もなく顔色も艶があり、明るい談笑にあけくれた。達観の柳人にふさわしい、淡々として洒脱、蘊蓄な中にも礼を失しないこの先生の態度に、私は、先生が近所の人々はもとより、町のすべての人々から、敬愛され、親しまれていることを身近に感じた。これは奥様もまた先生に劣らぬ立派なお人柄によるところにも原因があるだろうが……。

先生の句会姿は粟津での県下川柳大会でのことだった。この日、先生は、先代羽左にどこかよく似た気品のある顔に、黒の十徳頭巾をのせてみえられた。その際、兼題「混雑」というのを受持たれたが、なんと天位は私の句がへき頭に読まれた。

――混雑に幹事そこらの下駄をはき

というのだったが、それはとにかく、天からだんだん下ってついに一句残らず読みあげられてそれぞれに簡単な句評をそえられたが、数百句の句に対するそれなので、エンエンとそれがつづくのには、座中大いにうんざりしたことであった。しかし先生は、混雑が混雑を読んだとも覚えず、丹念にかつ熱心に押し通されたのには私もこころから頭の下る思いであった。

「大八さん、川柳は人と人との心のふれあい、魂の交流なんです、この一句の有難さに徹するところに人間もまた別のものが胸の中にわき出でるのではないでしょうか」

柳論にふれられるたびに、先生の頬は青年のように若やぐのである。本当に、川柳道にぴったりと身をつけ、その心を柳心にひたしつづけて亡くなられた先生は、音痴の法師蟬の啼けぬこころへ、わが心をこめて卦かれたような気がしてならない。

★

（おわび）「柳風三国志」は都合により一時休載といたします。また改めて後日草法を改めて仕上げにかかりたいと思います。ここにお詫び中上げる次第であります。

（作者より）

二人

正本水客
黒川紫香
丸尾潮花
著

川柳句集

定価二百円 送費二十四円
B列6号 二百余頁

句集刊行に就いて

路郎門の逸材、正本水客、黒川紫香、丸尾潮花の三氏が川柳精進三十年の収穫の中から特に優秀なる作品を選出し、恩師麻生路郎先生の校閲を経て弘く世におくり、その真価を問うため川柳句集「三人」を刊行することとなった。

★五百部限定出版につき御申込は早く★御送金は川柳雑誌社の振替口座大阪七五〇五〇番を御利用が便利です（切手代用可）

発行者 川柳句集『三人』刊行会

大阪市住吉区万代西五の二五

発行所 川柳雑誌社

電話住吉㊟六〇八一
振替口座 大阪七五〇五〇番

雅号私見

宮藤慈雨

由来、名前は符牒だからと言い馴らされて簡単に命名する人があり、又、名は体を顕わすと言うて、慎重に詮議立てする人がある。昔は武士は子が産れると韻鏡（韻鏡とは現代の姓名学の根源をなすもの）に依ってその名乗りの帰納を調べて、七夜に至りて、命名式を挙げしものである。

老生は、どちらかというと、後者を取るものである。

一体全体、親族或は他人の命名に依って付けられた、その名が充分気に入っているなれば兎も角、さもなくて、それだけを後生大事に墓場まで守って行かねばならぬ理由があるであろうか。——本人が成長するに従い、個性も具わり、社会的地位、見識、職業等、環境が命名当時の親族、他人等の予測と大分違うものとなったとしたならば、これは当然、名前を変えたいというような心境の変化の場合もあるだろうと思う。ましてや社会的には、変える便法として、雅号ないし通称名を変える事の存在があるのだ。

名前は普通類似的なるものが多く、同名のもの、或いは同姓同名のもさえあるのだ、これは一般に、符牒的な考え方の人が多いからなのである。慎重に考える人の中でも、結局、常識の城を出ない命名をされる関係上、同じような名前が多いような次第である。

その故に特異な慎重さを以て命名された極く少数の人達が類似類型の城を抜いていると言える事だ——以上の事は柳人の雅号に付いても言えると思われる事だ。日本人の一番身近な文芸だから、昔から柳人の数は非常に多く、勢い類似類型化され、雅号が同人柳人、又まぎらわしい柳人が現今でも、全国的に非常に多いようである事だ。

ところで元来、川柳は詩であり、作者は自己をその短かい詩型の中に凝めて打出し、主張するものであるから、自ずと特異性がなければならない。類似類型的なものは、月並宗匠川柳と排斥されるのだ。だから月並的川柳に満足するものいざ知らず、詩として自己の顕現としての作句態度を取る作者ならば、その名も特異なのを選び、自己の責任に於いて、発表するのが正しい事だと老生は思う。

同じ雅号、まぎらわしき雅号では、作者を間違われる可能性があるはずだ、特に川柳に於いては姓を略して雅号のみで発表される場合が多い関係上、見識ある作家がこれを避けたがるのは当然の事だと思う。

終りに当って一言申上げて筆を置くことにするが、老生の場合の私見は姓名学上よりのべるものである。但し世上ありふれたる、姓名判断屋先生と同一視せられんことを。老生のは皇道霊学上よりのもとに依っての私見であることに心せられたし。

ニセ者本モノ

不二田一三夫

雅号が同じだったら、あとの人が号を変えることは、エチケットであり、常識でもあるが、チョット話は古いがこんな場合もある。

長谷川一夫が林長二郎だったことは、今の若い人でも知っているが、その林長二郎の人気が水爆的であったころ、林長二郎の当り芸の題名をそのまま舞台にかけていたニセ者の林長二郎があった。

ポスターには、

日本一の美男スター林長二郎の実演——と、大きく売って、本モノと同じ顔の写真をデカデカとのっけている。題名もその出世作である〝稚児の剣法〟や〝鬼あざみ〟等で、扮装も型も本モノとまったく同じものである。

松竹では、無論その林長二郎というニセ名を告訴したらしいが、このニセ者、いつどこで改名したのか、それとも生れながらの本名なのか、とにかく林長二郎というのが本名なのである。これにはさすがの松竹さんもホトホト困ったようである。

ニセ者に言わせると、

「オレこそ本モノの林長二郎だ」という。事実、法律上林長二郎にちがいないのだから、これにはまったく手の打ちようがないわけである。それに顔までそっくりときては、死んでもらうよりほかに仕方がないことになる。聞くところによると、このニセ者の親分というのは、当時市会議員だった某劇場主だともいわれ、ちょっとやそっとのオドシぐらいに尻っ尾をまくような人種ではないらしいのである。

そこで、松竹の知恵者が鳩首して素晴しい名案をうみ出した。

——貴優ほどの人を田舎回りでおわらすのはもったいないから、この際、映画入りしてはどうか。

と、いう誘いをかけたものである。ここでニセ者氏は考えた。

「よし、うまくいけば、本モノを蹴落してノシ上がれるぜ」と。

松竹の姉妹会社である新興キネマへ、別の芸名で映画入りすることになったニセ者スターは、とにかく主演映画を一本撮ることになった。狙いは改名にあるのだが、うまく当れば、会社側としては一石二鳥と、甘いソロバンも忘れなかったが結局はダメだった。

しかし、筋書どおり改名をさせることには成功したのであるから、バッサリ伝家の宝刀が鞘走り、クビが宙に飛んだこと言うまでもない。

——映画版天一坊のワン・カット。

金泥集

課題「パイプ」

麻生葭乃選

パイプだこ癌を気にする年になり　阿茶
恋捨ててマドロスパイプもう持たず　若芽
忘れてたパイプクリーニングから届く　とよ
遺品分けパイプは妻の手に残し　知恵
十円のパイプ抽斗にごろごろし　美喜
半分を喫うパイプなり袖に入れ　きさ子
撥置いた指でパイプをつまみあげ　千代美
パイプの火消えたも知らぬ物思い　明美
角帯をしててもパイプふかしてい　花鶴美
忘れてたパイプをいじる片想い　美舟
マドロスの紫煙へ夢の果てしなく　若菜
この仕事引受ける気のパイプなり　吟女
うす気味の悪い返事をするパイプ　春栄

川柳に詠む姑

池上知恵美

私の最も愉しみな事は、静かな宵をひとり柳誌を開いて川柳を味わうスタンドの下が、一日の疲労から私を救ってくれる、生きるビーナスかも知れない。

姑の無病に嫁はちと困り　烏耕

句集私達の或るページにこんな句が出ている。もう嫁とも姑ともつかぬ年頃のせいで特に興味をもったのかも知れない。

医者として云えば姑達者過ぎ　生々庵

この句も又然りでこの場合も矢張り姑さんのお達者である事が余り結構でないように伺われてくるのであるが近き将来が少し淋し過ぎる感である。次に

姑の不幸は耳がまだ聞こえ　満潮

誰しも耳が聞こえなくなって喜ぶ者は無い筈、でも耳さえ聞こえなかったらこんなわずらわしい事も起らないであろう。まだと言うところに嫁の立場、姑の立場を深く考える必要があると思う。

私にとって家の姑さんは良きママさんである事を誰よりか仕合せに思っているかも知れない。然し世の多くは、私達の踏んで来た時代即ち、封建的家族制度が嫁と姑の問題を裏付けているのであろう。

姑の学歴へ合う嫁がなく　知恵美

この句のように先ず姑さんの学歴からそれに準じてのお嫁さんの学歴が婚約の第一条件であったとすると、それでは全く家の姑に対する嫁に外ならない。認られなかった時代から恋愛結婚はあとを絶たず現代の認められた自由にあっては、殆んどが恋愛結婚になってしまった。実に私達にはうらやましい事の一つでもあるようである。矢張りそれにも長短があって、

すぼっこな嫁に年寄り冷や冷やし　花村

こうした句も出て来るのではないでしょうか。人権尊重を素直に受け入れる嫁、お互いのもつ良識ある理解と云うものが総べてを解決し、仕合せを見つけるものであろう。長いものには巻かれるそれではスムースに総べてが解決する場合ばかりも無く長年月、日常生活に不満は絶えないだろう。その不満から逃れカバーするものに趣味がある。それには私は川柳以外に無いと思う。川柳する事により日常の身辺に転がる数々の悩み、歎び悲しみを、十七音字の短詩に捉えて反省し、時代の流れに沿って、深く、広く、社会、世界へと関心を深める事にもなるであろう。自

本社忘年川柳大会

日時　十二月七日（日）午後一時
場所　光明寺（電話㊼九二六〇）
大阪市天王寺区下寺町二丁目バス停前（市電下寺町又は日本橋三丁目下車）
兼題　「寒空」（二句）麻生路郎選
「鼠」（三句）（この分切六時半〆）須崎一豆秋選
「赤字」（三句）新川博也選
「宴会」（三句）西いわを選
三題（当日発表）北川春巣
席題　各支部選手
柳話　出席者全員
支部対抗句戦
雪月花句戦
呈賞　★各題天・地・人・五客、★路郎選天位に不朽洞賞★支部対抗句戦優勝者、準優勝者及雪月花句戦一位の組に川雑賞
余興　記念撮影
会費　百円、
★忘年懇親小宴——閉会後、同会場にて　会費三百円

★投句のみの方は郵券三十円同封のこと（〆切毎月五日）

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地
川柳雑誌社句会部
電話住吉㊼六〇八一番

正月兼題
賀状
盛装
銚子
車窓

最古の歴史を誇るストーブ
センター
燃料½　焚く手間⅒

センター興業株式会社
東京　大阪

お土産の父へはパイプ買うと決め　奈良子

パイプくわえ廻転椅子で輪をえがき　白美

パイプでも掃除しようか孤独の日　陽子

乳豆にはあらずパイプは放さない　万女

マドロスが似合う男のベレー帽　花代子

パイプにも時代がついた艶をほめ　俊江

拍手するパイプの煙草落ちかかり　徳子

閑そうな煙がパイプからゆらり　玉枝

取出したパイプへ煙草見当らず　美音子

たばこ喫う度にパイプを自慢にし　雅佐女

パパのくせ毎朝パイプママにきき　風の子

パイプ持つ手つき十代とは見えず　たつよ

初恋の思い出パイプの艶といる　知恵美

形見分け昔の恋のパイプ古り　都詩子

只一つパイプ残して君去りぬ　女メ

言い負けたパイプふるゝて火がつかず　周甫

あなたからマイナスパイプ答ゼロ　葭乃

己を取り巻く現実に対して、これでいいのかと云う疑問さえ湧いてくるであろう。

文明の流れにマッチした文化生活、嫁、姑川柳により明朗なる家庭生活、社会生活への交流を計りたいものである。

嫁が来てお台所の模様変え　桃村

行き届いた言葉で姑送り出し　栞

心中記事よう読んどきやと母に見せ　圜男

老眼をかけて落度をすぐ見つけ　柳児

泣きにゆく女房の里も世が代り　麦太楼

関西短詩文学連盟

秋の作品展（第2回）

――川柳部門をのぞく

ことし三月二十四日から3日間開かれた、第二回関西短詩文学連盟作品展は32年度の行事で、こんどのは33年度になるわけである。

会場は春と同じ大阪のビル街、今橋二丁目の美術倶楽部で十一月八日から3日間、花々しく開催された。文化の月にふさわしく、芸術の秋に応えるものとして、風流市民に好評もて迎えられたことは主催大阪市・大阪市教委及び、連盟側も成功であったと思う。

活字と取ッ組んでいる記者には「耳」をくずして「に」と読ませるようなあて字の多いのには、日頃の不勉強がたたってシドロモドロのていたらくをバクロしたが、さすがに川柳にはそう難解きわまる文字はなかった。

路郎先生の作品には、誰もがその筆魂にその名句に魅せられ、あかず食い入るような眼なざしであった。出品作品全部売却済という中島生々庵副主幹、北川春単編集局長、西尾栞不朽洞会理事長とわが川雑首脳陣も麗筆を揮われ、さらに松江梅里氏、若本多久志氏、後藤梅志氏、橘高薫風子氏、河相すゝむ氏等々の古豪新鋭の力作が春より一歩進境のあとが見え、相当数の売約済の札が目をひいた。

そのほか本誌でおなじみの冨士野鞍馬氏が今回も色紙を出品され好評だった。

その、ふくいくとした香り高い作品展を、花でいうなら詩の菊花展か。軸物が豪華な懸崖なら、短冊は清ソな一輪咲きであろう。

会場受付に机が二つ、そこには連盟理事長路郎先生と、安田青風先生夫人が机にならんでおられるのも、ほほえましい受付風景であった。（一三夫）

――会場　美術倶楽部・元鴻池邸

スマートで
着心地のよい
O.S.Kの
レディメード
株式会社 大坂商店
大阪市東区淀屋町一丁目二番地
電話東(94)1745・5563番

藤井毛織株式会社
特約店
純毛製品 シェルドリン 防虫加工
エアーシップ
藤井毛織株式會社
ALL WOOL
Air Ship
FUJII KEORI
足立株式會社
毛織物卸商
H.A

一路集

短気

清水白柳子選

魚釣りをしたらと短気すすめられ　参無子
気短かの拳結論まで聞かず　昌男
竹割ったような短気を好かれてい　初甫
その訳を吃って言えぬ短気者　牧人
夫唱婦和短気と気ながで二十年　どんたく
はれものの様に気短かほっとかれ　保美
短気また妻にあげ足つかまれる　恵二朗
缺点の短気もまるめて姉女房　敏子
先生の短気チョークの数が増え　不二
あれまでの話を短気こわして来　俊見
短気もの怒鳴るチャンスへ息をのみ　代仕男
石松のような短気さ愛されて　十九平
働きに出して短気が気にかかり　庸佑
花火にも似た気短かへ秘書素直　一進
短気者根問いをすれば毛むく立ち　夜潮
気短かで早口あっさりした男　半休
湯豆腐は短気な箸を崩れ落ち　光郎
ちぐはぐの下駄でどなりにくる短気　光郎
延着へ短気半分喫って投げ　鳴恍

佳句

気短かの足踏みしてる交叉点　珠笑
気短かを妻は笑ってとりあわず　陽子
辞める気になった短気へ妻がおり　幽谷
短気もうけわしい眉でやって来る　初甫
父うちゃんは気短かだから近寄らず　三四郎
仲人の技術短気にのん気者　春雄
短気だが刃物切れるとほめられる　豊年
短気もの大阪弁で吃ってる　三四郎
宴会の短気三味線端へ寄り　凡茶
さばさばと短気和解の酌をする　東岸
また馬鹿な役引き受けて来る短気　宗太郎
気短かがますます糸をもつれさせ　吉枝
末っ児の短気涙を溜めていた　葉光
俺がいい例さと短気諭される　不二
商いの外は短気で通す父　圭井堂

人

短気さえ出さねば申分ない養子　藤波

地

遮断機へ短気な男道を変え　夢路

天

金のある間は短気でも通り　淀月

癖

大西八歩選

反対を唱え一くせ持っており　牧人
爪を噛むくせで思案に余ってい　同
足くせを靴の踵に教えられ　同
ばあちゃんがモッタイ無いを口癖に　箱川
歩き型までが亡夫に似ていとし　同
癖一つなく坊ちゃんというあだ名　凡茶
指摘された癖でにやにや笑つこり　夜潮
癖ばかり気にかかり出す倦怠期　隆文
癖になるからとお箸を教えられ　蜻蛉
癖のない文字で庶務課の隅に老い　昌男
癖のある字が犯人を見つけ出し　笑太
遊び癖つけて町から帰って来　一傘
亡き父の癖の有る文字なつかしく　与呂志
社長にはやっぱり似合うくせがあり　保夫
常連の癖を仲居はよく捌き　穂波子
癖一つ一つ直してプロになり　半休
師の癖を知らず知らずに真似ており　反子
新入社給仕に課長の癖を聞き　光郎
人の癖笑えるうちはまだ若い　翠月
お見合へ我が子の癖が気にかかり　鵜汀
癖云うに笑いあってる新夫婦　悦子
娘の着癖叱って帯を締めてやり　鳴恍
酒癖の悪さ知ってて遠くいる　葉光
癖のない人だがいささか頼り無し　どんたく
電化してから朝寝のくせがつき　陽子
百姓の口癖豊作とは云わず　同
笑顔する癖がみんなに親しまれ　幽谷
悪い癖ばかりが姑の目にとまり　同
盗癖の子に先生も親も泣き　初甫
ママ母が来てあきらめる癖がつき　保美
恋人の癖も親しいものに見え　芳仙
悪い癖良い癖並ぶ子沢山　無閑
しゃべる癖放送局とあだ名され　同

中折の凹みのようになった癖漫歩　寄り道の癖でもめてる給料日淀月
癖のない嫁に家風の癖がつき藤波　酒癖を仲人口が褒めて夫に恵二朗
先生の癖が話題の謝恩会忠三　金少し儲けて悪い癖が出る春雄
職人の腹たてさせた値切る癖愛鳩　恋人の癖をコッソリ真似て見る漫歩
癖しってからの機械がすなおなり俊見　その癖を同窓会は覚えて居東岸
右下り文字の癖まで父に似て十九平

佳句

連れ添うて夫の癖が苦にならず牧人　癖多い人だと思う初対面昌男
家計簿が妻にも値切る癖をつけ鳴恍　笑う癖あって楽しい十八九晃康
わが癖がテーブルへかけてから判かり圭井堂　癖のないお髪とほめる美容院三四郎
この癖が直らぬ悔いの自己嫌悪同　飯を喰うにもそれぞれの癖があり参無子
兄弟の五人の癖がみな違い秀三　その人の癖に万年筆馴れる芳仙
未亡人いつかためらう癖がつき敏子　昼寝癖抜けないままに秋の風恒雄
筆癖もなつかし友の年賀状恵二朗　癖もあか抜けして来た白髪むじな
癖だけが目だち淋しく父は老い代仕男

名士

三鴨美笑選

広告へ名士の紹介状も載せ岳詩　仲人が名士で派手な式となり鳴恍
グラビアの憩名士の花鋏一進　出身の村へ名士として帰り牧人
応援に名士を揃えて落選し庸佑　肩書を並べて名士暇がなし箔川
自家用で挨拶だけに来た名士豊平　期待した名士の顔が肩すかし義夫
講堂の名士へマイク試験中凡茶　名士の失言新聞見逃さず一鶴
お名前だけでもと名士頼まれる一傘　村長が名士迎える顔で立ち与呂志
ゴルフ場名士の顔があり余り友子　汚職記事郷土名士の名を見つけ光郎
学歴はどうあろうとも名士なり翠月　小説が売れて名士の列に入り狂二
肩書が名刺の裏へあふれ出しどんたく　名士録順序不同と書き詫びる陽子
改札が名士へ一礼して通し幽谷　広告に名士覚えのない談話三四郎
酒席しんとさせて揮毫する名士保美　秋の陽を浴びて名士の故郷入り敏子
世話役のように名士の忙しさ無閑　加才ない女将名士へ墨をすり淀月
駅頭の名士小旗に迎えられたけお　無料パス名士特二にそり返り恒雄
選挙戦名士の頭低くなり秀三　偉方の上に上ある祝賀式八九寸
国連で名士勝手な熱を吐き藤波　名士録金でのったと呼かれ恵二朗
名士まだ見えず銚子が冷えてくる宗太郎　空港は名士クラスの集散所繁太郎
筆まめな名士を見抜くアンケート葉光　名前だけ貸して名士はタッチせず梢月
財界の名士が並ぶ座談会進之助　もみくちゃにされて名士の郷土入り圭井堂
面接に名士居留守をよくつかい幸路　名士の祝電派手に被露され俊見
滞納をしてもやはり名士なり東岸　ラジオで聞いた名士の国訛りむじな
つき合ってみれば名士もただの人愛鳩　名刺など要らぬ名士の顔が利き卯之助
善後策名士の顔を借りに来る春雄　床を背の名士へ妓よってゆき生薑
講演も名士になれば遅れて来句念坊　下駄履の名士に合うた夜店の灯不二
筆太く書いて名士は利用され圭水　諸名士を待つ折椅子のよく並び慈雨
不意に来た名士が変える式次第兼治郎　知ったのがいるから名士録を買い紋六
口重く語る名士で気が疲れ代仕男　一場の祝詞を名士譲り合い漫歩
就職へどれもが名士の紹介状暁明　名士のスキャンダルニュースを沸し吉枝
何処をどう来たか名士の額をかけ三林坊　記者席の方にも名士気をくばり雄々
掃いてはる程名士の名が並び蘭　牛乳でかるく名士の朝がすみ巌
名門に生れて名士にもならず旭峯　名士多忙名刺代理に持参さす古心
名士から貰った名刺を大事がり十九平

人

名士を送って幹事飲み直し半休

地

名士去って村の静けさ取り戻し夜潮

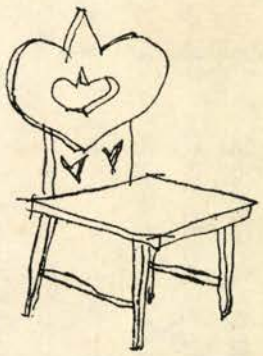
天

陳情を名士旅館の庭で聞き保夫

軸

貧乏に育ち名士の座にすわり

柳界展望



句会

▼本社忘年句会は十二月七日(日)一時から下寺町光明寺で開催される。本年の棹尾だけに出来るだけ賑やかな句会を持ちたいので多数出席されたい。▼南区医師会文化部杏林川柳会(大阪市)句会は十一月十八日午後七時半から南区三休橋南詰中島小児科診療院楼上で開催。▼大阪逓信病院川柳会は十一月十五日午後二時から五階会議室で開催。▼コクヨ川柳会(大阪市)句会は十一月二十一日午後五時半から黒田国光堂で開催。▼南海電鉄川柳句会(大阪市)は十一月二十七日午後六時半から親和クラブで開催。以上路郎主幹出席。▼第二回短詩文学作品展は十一月八日、九日、十日の三日間大阪美術倶楽部で開催。詩・短歌・俳句・川柳の大家新鋭の揮毫作品が多数展観された。会場には堀口塊人・冨士野鞍馬氏等著名柳人の顔も見え極めて盛会であった。▼川雑下関支部(下関市)一杯水句会は十一月十六日国鉄下関駅で開催。▼川雑倉敷支部(倉敷市)句会は十一月九日楢原一善居で開催。▼第六回文化祭協賛竹原市民川柳大会(広島県)は十一月四日竹原市役所で開催。▼木ノ下句会(宮城県)七周年記念句会は十二月十四日午後一時から木ノ下四一青山蝸牛居で開催。宿題「思いやり」「グレン隊」「あべこべ」各題二句以内。▼第一回豊中市民川柳大会(豊中市)は十二月三十日一時から豊中市中央公民館で開催。同日石井黙平氏を会長に豊中川柳会が発足した。▼たんぽぽ忘年川柳大会(熊本市)は十二月七日(日)午前十時から熊本市交通局職員寮大広間で開催。兼題焚火・言分・達磨・足の裏・独占・都会・一字・徹夜・花嫁・鹵ブラシ・席題五題当日発表各題三句以内、投句者は三十円封入の上十二月五日着限、宛先熊本市大江町九品寺六〇四熊本市交通局内幡野五梅。▼鳥取市制七十周年記念川柳大会(鳥取市)は十一月三日鳥取市智頭街道筋第一生命ビル三階会議室で開催。森本法泉子氏が市長賞受賞の栄に浴された。二位星影氏三位天保銭氏。大会終了後の懇親宴も極めて盛大であったと。▼第九回文化祭協賛西宮市民川柳大会は十一月二日一時から西宮市労働会館で開催。▼国鉄天王寺川柳会(大阪市)十周年記念大会は十一月二日奈良の国鉄「大乗苑」で盛大に開催。▼広島市文化祭第八回短詩型文芸大会川柳の部は十一月十六日午後一時から頼山陽文徳殿で開催。▼第三回松任川柳大会(石川県)は十一月三日十二時半から石川郡教員組合で開催。▼越路時事川柳大会(新潟市)は十一月九日新潟神宮直会殿で開催。▼故大野琴荘句集「富士筑波」出版記念句会は十月四日須崎会館で開催故人の人徳を偲んだ。▼江戸川区文化祭「川柳大会」(東京都)は十一月二十三日正午から開催。▼えひめ芸術祭第三回四国川柳大会(愛媛県)は十一月九日午前九時から三条東洋樹氏句碑除幕式を兼ねて開催。▼第十三回尼崎市文芸祭川柳大会は十一月九日正午から尼崎文化会館で開催。▼山田季貧氏(広島県)等は十月二十六日広島市内三滝山で松茸山句会を開催。同行十八名。▼川雑明和病院支部(西宮市)は十月二十六日雀のお宿として有名な神戸市板宿の禅昌寺で観楓句会を開催。▼国立島根療養所葦川柳会(島根県)は十月二十一日葦創立六周年記念号を発刊した。▼川柳ひろしま(広島市)はこの十二月号をもって一〇〇号になるので新年号を新春祝賀とあわせて一〇〇号突破記念号として発刊される由。

消息

▼麻生路郎主幹(大阪市)は十月十五日清交社第一会議室で開かれた大阪市民文化賞受賞者選考委員会に選考委員として出席、文化の日に中之島中央公会堂で行われた山村愛さん、市川寿海氏、竹本住太夫氏、鍋井克之氏、水野祥太郎氏等五氏の受賞式に臨まれた。▼池田正三画伯(留守宅大阪市)は欧洲の美術館博物館を始め美術上重要な寺院や遺跡を五十ヵ所以上も訪れ多大の収獲をおさめられたがクリスマス前後に七ヵ月の旅程を終え帰日される由。▼市場没食子氏(大阪市)は十月二十三日電通記念日に勤続三十年の表彰を受けられた。お祝い申上げる。又、十月二十六日淀逓信病院のレクリエーションで山中温泉に遊ばれたと。▼若本多久志氏(西宮市)は尼崎ライオンズクラブ一周年記念会報に川柳談義を掲載、会員の川柳への関心を高められた。▼山川阿茶さん(大阪市)は十一月十日南区医師会のレクリエーションで比叡山へドライブされたが、折悪しく雨、遠見はきかず歩けもせずで「あの辺が琵琶湖やろうと霧の中」の句信を寄せられた。▼尼緑之助氏(出雲市)は十一月十五日来阪不朽洞に路郎主幹を訪問、主幹に伴われて大阪逓信病院川柳会に出席され翌十六日の不朽洞総会に臨まれた。▼永松東岸氏(岡山県)の指の痛みは大分うすらぎ十月末より出勤していられるが、右手人さし指が約一糎短くなり特に字を書くに不自由を感じていられる由。五十日の休養中栗、椎茸の収獲に余念なく過されたと秋の楽しい音信に接した。十二月の本社忘年句会へは是非出席されると。▼林野甦光氏(呉市)は不朽洞会総会出席のため十一月十六日早朝来阪され、総会に先だち川雑本社へ路郎主幹を訪ねられた。▼国弘半休氏(宇部市)は十月中国新聞紙上に随筆「酒の味川柳の味」を執筆されたと。▼西辻竹青氏(奈良県)は十月二十六日宝生村議会視察団一行に混り別

府熊本雲仙長崎を視察「高崎山野猿に餌も傘の中」「うかつにもまずい稗搗節唄い」の旅信を寄せられた。▼速水真珠洞氏（福岡市）は十一月十四日京都大阪に遊び金閣寺や新歌舞伎座のこけら落しを見物されたと。▼河本南牛子氏（愛媛県）は四年続きの豊作の喜びと、収獲の多忙な日々を送って居られるが、寝る前に簡単な日記をつけて一句か二句書きとめて置く習慣が投句に非常に役立つとの書信を寄せられた。▼梶川蘇堂氏（西宮市）は十一月十三日仙台から北へ十里の松山町の禅寺石雲寺に遊ばれた。途中青葉号車中で「那須野一望十一月の雲低く」の句信を寄せられた。▼野村味平氏（加賀市）は十一月二日、三日の両日文化祭協賛川柳画賛展示会に出品され、会場に川柳投句箱を備えて一般の川柳を応募せられたところ、句筆の不足をきたすほどの好評を得られたとの由。▼野村味平氏（加賀市）は十月二十六日三十年振りに京都の名所を見物されたと。▼本多省三氏（大阪市）は十一月二日柳友井石悟朗氏令嬢の結婚式に参列し、川柳を引用して祝詞を述べ二人の前途を祝福されたと。

句集

▼「にしなり句会特輯号」が川雑にしなり支部句会一周年を記念して発刊される。頒価四十円、申込みは大阪市西成区玉出新町通り一の一一後藤梅志宛。▼「川柳句集」が十一月南海川柳部から刊行された。昭和三十二年三月より昭和三十三年三月までの南海電鉄句会の集成でB列5号十八頁。▼故大野琴荘句集「富士筑波」が昭和三十三年十月八日故人の一周年に当り句友の手で刊行された。B6版一五八頁。非売品。▼かもめ一五〇号臨時増刊「葵」が敦賀番傘川柳会から発刊された。福井県下川柳作家自選句集、非売品。

弔

▼本山荻舟氏（東京都）は老衰のため十月十九日午後二時二十分、品川区南品川二ノ四一二の自宅で死去行年七十七才。謹んで悼む。

転居

▼菊田いさむ氏（吹田市）は枚方市香里ヶ丘三丁目、日本住宅公団香里住宅B二の一〇八号へ▼清水白柳子氏（大阪市）は大阪市天王寺区上之宮十六番地の二へ転居された。

電話番号変更

▼須崎豆秋氏（大阪市）の勤務先津村製作所の電話番号が変更になった。大阪生野Ⅱ局㉔一〇一五番、一〇一六番。（薫）

不朽洞会から

★不朽洞会総会

十月十六日に本会総会を開催したところ、各地からも出席され、功労者の表彰もあり、大変な盛会だった。詳細は次号で発表する。

★常任理事会——去る十六日不朽洞会総会で改選された新役員による常任理事会が11月29日（土）午後七時から南区三休橋南詰西入ル中島小児科診療院階上で開催される事になった。議案は今後の運営発展の件其の他。

★新会員紹介

（十一月）

▼野村岬月氏（出雲市）正会員——緑之助氏推薦

▼平沢保美氏（大阪市）正会員——潮花氏推薦（いわを）

クリスマスに際し
川柳家の御多幸を祈る
宮政周防
ハワイ・アイエア

不朽洞の人々

ナツペリ・ファーム

金髪の肩へ
手も出る
茶目ッ振り

（快夢起）

今夏ロス訪問の折ナッペリ・ファームで撮ったもの、今少しで家庭争議を引起しかねなかった珍景です。

こうした命の洗濯をなさりたい方はホノルル寄港の際御一報下されば詳しく説明申上ます。

不朽洞会員ならどなたでも結構です。われとおもわんものは珍らしいものを返つてください。
—編集局

花地物壇

いのちある句を創れ

投稿規定
▼用紙は原稿用紙▼文字は正確▼締切毎月十五日▼投稿先本社宛

本社 文化の夕（大阪市）

11月7日　午後6時

会場—光明寺

レッド・アンド・オレンジは秋の色。文化の夕の幕があくころは、まこと釣瓶落しに陽は落ちる。

あすにひかえた短詩文学の作家展へ先生は理事長としての役目がら出向いておられ、その準備にご多忙のようであった。出席名簿へ名を書いて作品を持って走り又引き返して来るという熱心な作家もあって、さすがに文化の夕らしく盛会であったことはよろこばしい。

川村好郎氏の柳話——まず柳話の意義を強調して、柳話とは雑誌の随筆、または研究論等々と同じものであり、路郎主幹、生々庵副主幹ほか諸先輩の柳話をたのしみにしていると述べられて、みさき公園の猛獣の放ち飼、象の芸当などからその心魂のあり方を川柳にむすんで、猫のような虎になるなと獅子吼して壇をおりる。

閉会近いころ、主幹はお元気な顔を会場へ見せられる。文化の夕の不朽洞杯は正本水客氏にかがやき、独走雪風氏を追う九豪がよく決戦に持ちこむか、もう話題は十二月にとんでいた。（F）

出席者—路郎・薫風子・圭井堂・葉光・句念坊・淡舟・梅里・葉乙女・圭水・狂二・保美・一ン十・十悟・瓢太・伸生・舟遊・水客・いさむ・紫香・一三夫・恒明・雄声・好郎・堰子・文秋・静馬・知恵・弦月・漣・繁雄・悦子・麦稻子・旅風・博也・高史・文蝶・闌・晃・清潮・鵜汀・与呂志・千舟・井平・古方・貴山・清人・栞・梅志・省三・山舟・武助・水堂・一瓢・六竜子・義弘・牧人・昌男・雄峯・新石・三司・求女・柳宏子・庸佑・美恵子・潮花・氷断・すゝむ・竹荘・多久志・没食子・白木・進之助・利武・半歩・南宗・月都・・宏子・葭乃

兼題「患者」　西尾　栞選

退屈な患者へ足音また曲り　昌男
うす味のもう物足りぬ回復期　薫風子
精神科女患にかなし子守唄　一三夫
看護婦に食べさせてもらう初西瓜　山舟
サンルーム患者はクイズ考える　いさむ
手を放されたことを患者は知っていた　梅里
患者から恋打ち明けられることに馴れ　多久志
病人の残りも食べて母達者　千舟
附き添いの母も患者の顔で待ち　悦子
看護婦の艶は患者に羨まれ　文秋
病床の永さカルテも勘でよめ　求女
私の死ぬことをドイツ語とドイツ語で　古方
試歩の患者患者に手を取られ　山舟
花作る患者にまじる看護帽　奈良子
ドック入りもしやと思う事に触れ　文蝶
老衰ときめてかかった聴診器　圭井堂
患者には聞かせたくない立話　利武
清澄な空気も患者は倦きはてて　一瓢
患者とは思えぬ程に大いびき　南宗
見舞客を戸惑いさせた肥りよう　半歩
患者さんでっせと畠の医者を呼び　十悟
患者みな子供のようなことを言い　満秋
なぐさめられてなぐさめて患者順を待ち　六竜子
誤診とは知らず患者は頭下げ　圭水
十円ずつ集め患者の義理は済み　一鶴
患者どう誤解したのかうれしがり　幽谷
うちの患者が患者がと自慢なり　水客
盛装で注射だけしていく患者　紫香
簡単に治って患者気に入らず　堰子
父の代からの患家で菊仲間　木客

兼題「和服」　土井文蝶選

あの人の好きな和服で逢いにいき　寿栄
和服着て行けと仲人耳打ちし　美音子
和服着て看護婦別な美しさ　白水
レジスタンス和服で通すお家はん　一三夫
黒繻子が似合いマダムにある魅力　昌男
和服が似合う自信へ髭もあり　栞
舞扇和服の線を失わず　潮花
懐手出来る和服で散歩する　与呂志
裏だけの値ですと古着のたたき売り　六竜子
目の保養せめて和服を見て去のう　弦月
角隠し内股にする手を曳かれ　堰子
和服着た足の運びに気を使い　牧人
参観日今日は和服の帯を換え　千代子
若き日の妻に似ている娘の和服　淡舟
よろめいて来たとも見えぬ訪問着　昌男
和服でと言えば二十才に母が着せ　一瓢
訪問着胸の起伏も娘めき　六竜子
言葉まで変えて和服がかしこまり　圭水
仲人に和服姿も見てもらい　牧人
和服を着ても繕かぬ髭をもち　漣
思い出の矢絣り孫の掛ぶとん　圭井堂
両袖が地につきそうに七五三　千舟
丹前に朝日を受けて日曜日　失名
姙娠と言われたくなし和服着る　圭水
歌舞伎座の廊下で鍋を削るべべ　圭井堂
行きつけのところで飲む気の和服なり　紫香
新妻の当座和服の日が続き　いさむ
左遷しられる辞令へ袴はいてくる　十悟
当人は和服で坐る善後策　水客
和服着て出れば御病気かと訊かれ　多久志
大輪の菊に和服も競い合い　雄峯
振袖のちぎられそうなワンダフル　堰子
和服の看こなし前の職がばれ　山舟
乾杯へフラッシュ浴びている和服　進之助
着こなしは師匠としての舞扇　進之助
吉日が近し和服の針を持ち　一三夫
和服着る楽しみがある三カ日　文秋
晩酌へ和服になった気の軽さ　梅里
父に見て貰う羽織のしつけ糸　省三
玄人とわかる和服が目を集め　雄峯
仁丹の粒が出てくる袂くそ　梅志
スタイルに自信がなくて和服着る　月都
着こなしも元色街にいた和服　漣
和服しか似合わぬ妻にしてしまい　保美
麻雀へ結城の袖を気にして居　阿茶

兼題「日記」　冨岡淡舟選

日記帳三日目位でメモになり　句念坊
亡き父の日記に僕の嫁のこと　白水
絵日記へ見るから孫の知恵がつき　梅志
日記をばきちんと書いて平社員　いさむ
うれしさを今日の日記へ書ききれず　牧人
アリバイがばれてしまった日記帳　静馬
嫁ぐ日も近く日記を整理する　三司

ここから恋が芽ばえた日記帳　美恵子
もう過去のひとになつてる日記帳　潮花
日記帳伏字も使う年になり　柳宏子
お袋の日記にひ弱い僕だった　堰子
よろめいたことは日記に書いとかず　恒明
この恋も終りぬ日記そのままに　三司
新妻の日記嬉しいことばかり　千舟
あの恋の涙がつづく日記帳　六竜子
反省の心日記へ朱を入れる　夢路
一と月で飽くに豪華な日記帳　梅里
入知恵をしたなと思う子の日記　夢路
ぬすみ読みされたか日記の栞なし　阿茶
日記から足がつくとは知らなんだ　弦月
日記には書かずに花瓶の花を替え　水客
ママさんと呼ばれる日日の日記書く　木客
親にもう言えない事がある日記　六竜子
日記へ言いたい事言うて孤独なり　伸生
秋さやか一句も入れて旅日記　六竜子
頼りない男日記はちゃんと書き　いさむ
几帳面に日記を書いて一人っ子　旅風
遺書めいた日記を書くも倦怠期　梅里
それ見なはれと白い日記を笑われる　省三
妻の名が見えて日記もあらたまり　奈良子
茶もうまし宿直日記無事とだけ　好郎
推理小説のような刑事の日記帳　狂二
藤村の詩を埋草に娘の日記　旅風

兼題「デザイナー」　佐野白水選

まん丸いビルを僕は建築デザイナー　十悟
デザイナーは肩に若さをのぞかせる　夢路
お似合ですよと自賛するデザイナー　淡舟
デザイナーのセンスそろばんそっち退け　省三
皇后を売物にした田中千代デザイナー　永断
やせて来なさいとも言えずウエストはどうされますとデザイナー　麦稲子
博也
デザイナー足らない生地を撲様にす　周甫
デザイナーチンパンジーの服もたち　雄声
デザイナーに変な個性を見つけられ　葉光
デブが着るつもりでなかつたデザイナー　一瓢
説明に鯨も出したデザイナー　周甫
逢引のポーズもデザイナー教え　一ン十
デザイナーの脳細胞に踊らされ　弦月
無理しなさ思い乍らのデザイナー　悦子
デザイナー季節がピンと来なくなり　恒明
デザイナー猫背をかくすのに苦心　千舟
デザイナーにお任せしとく年になり　保美
デザイナーしぶしぶ客の好みにし　堰子
デザイナーはしたがわが身に遠い服　漣
皇后の栄に浴したデザイナー　奈良子
デザイナー実用向は考えず　恒明
デザイナーもう任かされる客と知り　梅志
先生とも言われ女史とも言われデザイナー　梅里
人形の服もデザイナー気取で縫い　新石
デザイナー妙な好みと思えども　堰子
デザイナー本当のこと言いそびれ　水堂
デザイナー案外こらぬ服を着る　奈良子
デザイナー今年は袖を切って見る　鵜汀
菊もみじ秋を呼び込むデザイナー　井平
デザイナー客の好みがのみこめず　阿茶
デザイナーに脚の太さがままならず　満秋
デザイナー八頭身へ着せたがり　一傘
デザイナー死もラインも共に消え　どんたく
デザイナー気取で服地断ちそこね　一鶴
デザイナーここらに穴をあけておけ　昌男
説明の英語に困るデザイナー　幽谷
デザイナー詩情のかけら持ち合せ　水客
デザイナー男の視野のライン裁る　水客

席題「チャンス」　水谷竹荘選

ねむそうな顔してチャンス見逃さず　瓢太
四十過ぎ最後のチャンス逃したり　鵜汀
晩酌の気嫌を妻は見逃がさず　漣
立志伝チャンスチャンスの波に乗り　柳宏子
気のついた時はチャンスの去ったあと　半歩
チャンスさへあれば妻に見得を張り　旅風
このチャンス優柔不断踏み切れず　旅風
浮子引いたチャンスは煙草つけた時　井平
飲んでいる親父へチャンスと口火切り　雄声
先生にシャッタチャンスをほめられて　省三
一一九番消防が来保険が来　文秋
金もないせにチャンスを追い回わし　闌
ぼんやりとチャンス逃した甲斐性なし　与呂志
たくましい商魂チャンスを見逃がさず　狂二
商魂は今がチャンスや買いなはれ　堰子
此のチャンス番頭はふたたび無いと言い　新石
多かったチャンス一度もつかみえず　晃
むざむざとチャンスを逃がす小資本　六竜子
絶好のチャンスを雨が持って逃げ　水堂
折角のチャンスを酒でぶちこわし　水客
きっかけのうまい男にしてやられ　雄声
チャンスさえあればと恋を胸に秘め　与呂志
チャンスチャンス父の留守をば知ってる子　闌
チャンスよう摑まん男金もなし　雄声
雷が二人を結ぶよいチャンス　句念坊
このチャンス逃がすものかと腰をすえ　美恵子
下積みの無口がチャンス又逃がし　静馬
借金を言い出すチャンス見失ない　梅志
チャンスチャンス応援団があせり出し　梅志
好きな酒出されてチャンスをとり逃がし　紫香
逆転のチャンスへバット振り回し　古方
性に合わぬチャンスあっさりあきらめる　悦子
チャンスにものってくれない人を恋い　葉乙女
目前のチャンスを逃している勝気　庸佑
又とないチャンス女はうまく逃げ　淡舟
親友に尻つつかれているチャンス　酒の出るチャンス逃がす顔を出し　牧人
絶好のチャンス女房も外出し　多久志
過ぎてからチャンス逃がしたなと思い　鵜汀
嫁き遅れまたのチャンスを待つばかり　圭井堂
ええチャンスやつたに人が来てしまい　博也
このへんがチャンスと酒席そっと抜け　清人
うまいことチャンスつかんでた儲け　竹荘

席題「株主」　新川博也選

病院の電話で株を買うている　舟遊
論功で貰らった株の値が下り　すゝむ
社員みな株主にしていい会社　紫香
百株が傾聴に足る事を言い　省三
株主の顔でビルディングを見上げ　牧人
株主の名義を借りる頭数　梅里
ママ宛に端株整理を勧めて来　静馬
十株程お義理で買うた自社の株　漣
寄付金へ大株主とおだてられ　求女
株主へ就職難を持ち込まれ　麦稲子
受付へ大株主の顔で来る　瓢太
端株持ち今日北浜へ用が出来　伸生
総会をたった十株でかきまわし　梅志
株主へもう嘘つけぬ程となり　恒明
株主はでっかい部屋で待たされる　恒明
こけら落し株主隅でごまかされ　圭井堂
増配のニュース株主みおとさず　義弘
総会屋大株主のような顔　柳宏子
配当金ポケットマネーくすねとき　闌
大株主らしくやっぱり資本主義　古方
株主の無理は聞くだけ聞いておき　鵜汀
前場から後場の間の株を持ち　高史
新社長大株主へ辞が低く　多久志
株主へマダムウインク忘れない　麦稲子
家族みな株主にして税を逃げ　一三夫
配当はかりで暮せる身分うらやまれ　竹荘

株主になって冷や冷やして暮し　文蝶
暴落を株主でない顔でき き　義弘
兵隊で言うなら株主二等兵　一三夫
株主はモデル工場の方だけ見　一瓢
株主やさかいにストは反対し　淡舟
株主になって考えちとかわり　古方
赤字経営株主ちっとも寄りつかず　昌男
定年に淋しい株を持たせられ　梅志
株持っているのにやはり馘にされ　保美
株主の名義知ってる名が並びいさむ
総会で端株も負けず発表し　一ン十
はした株持って女の口が過ぎ　水客
株主総会僕の判でもほしいらし　晃
新館落成株主弁当貰いに来　貴山

席題「口車」　菊田いさむ選

欲張りが直ぐ乗ってくる口車　漣
口車うかうかと金を出し　多久志
軽卒を詫びて恥じてる口車　没食子
貞操を問題にせぬ口車　瓢太
口車とぼけた顔でそらしとき　十悟
口車乗ってしもうた十二月　鵜汀
女さかしく口車にのってやり　水客
口車家出はおぼこいものと知る　六竜子
同じ手で二度もかかった口車　求女
口車女の知恵が見透かされ　梅志
口車子供は薬みんな飲み　武助
何時からか踊らされてた口車　昌男
口車乗ってくれたが今の妻　昌男
口車役者は一枚上だった　恒明
口車に又ひっかかるお人好し　舟遊
チラチラと上目使いに口車　牧人
口車男は甘いものと知り　弦月
身を寄せて姑の甘い口車　利武
パーの灯に米て乗せられた口車　瓢太
裕次郎に似てる男の口車　文蝶
口車うまい条件揃えて来　庸佑
よろめいてもよいわと妓の口車　淡舟
純情を罪におとした口車　漣
年甲斐が口車に乗ったとも言えず　進之助
口車乗るなと妻が袖を引き　高史
口車のって掛金一つ増え　麦稲子
口車乗って急所は押えとき　麦稲子
親としてまた乗ってやる口車　一三夫
世間にはうとくまた乗る口車　いさむ

（庸佑清記）

雑川　ハワイ支部句会（ハワイ）

築山快夢起報

他人から励まし受けて力づき　固防
将棋さす後から妻が力つけ　銀水
何かと云えば腕力で来る癖でなし　エス子
知恵で勝ち力で負けた子の哀れ　美潮
和合力一家一社を栄えさせ　気七有
白い手の魔力万金絞り取り　弦月
金力の押しの一手がまだつづき　拝山
椽の下の力で舞台に花が咲き　風草
力一杯叫けべど出ない夢の声　平八
ウイドーになって断然魅力が出　M子
九分九厘金の力が物を言う　泉水
権力で退かす屋敷へ道が貫け　斧平
ある力使いそこねて身をくずし　紅茶
実力はないがお金に物云わせ　虹橋
金がなく力もないのに見栄を張り　緑星
金力の相違さっぱり諦める　快夢起
体力の限界を知る齢となり　迷朗
学歴に触れず実力認められ　浅太
力ある白痴おだてて又使い　八丁堀
権力に握り拳を振る若さ　柳葉
封建の権力で縛る子の自由　ィッヨ
まだまだと何時かな見せぬ底力　暁舟
嫁ぐ荷へ老いの力のありったけ　草一郎
権力に楯衝く愚か悟る老い　北海

雑川　淀川支部句会（大阪市）

武部香林選

大阪には一人息子の嫁が無く　十七
一人息子だからと保険ばかりかけ　幽谷
一人息子百姓だけはせぬと云う　陽子
一人息子素直なだけに又案じ　多久志
保証人の方が気にする弁済期　東洋男
保証人金も無いのに引受ける　灯子
保証人忘れた頃に呼び出され　さぎす
証文をためつすがめつ保証人　三十郎
何もかも揃って出来ぬ保証人　句念坊
台風がそれた月見の酒の味　水堂
月見にもあいて夜警はくっしゃみし　花村
名所から帰ればただの月であり　若菜
〆切を十分延したトップ記事　文児
〆切が明日に迫ってとけぬ謎　礼司
〆切りのドアを役人だけ通り　香林

雑川　阿倍野支部句会（大阪市）

金井文秋報

一人者また丼ですましたり　喜仙
丼かと思えばうどんで帰らされ　庸佑
丼に盛り分けられた腹が鳴り　愜子
瀬戸物屋丼鉢へ銭を入れ　豆秋
狐つき物見高さの顔も寄り　すゝむ
昔々狐も化けて恩返し　葉光
ビル屋上けんけんさんの社建て　句念坊
捜査二課つけた痣とは知らぎりき　六竜子
笑わない女の顔の小さい痣　晃
太腿の痣を知られてから弱し　朱人
痣一つ頼りに捨てた子をさがし　文秋

本社句会　天位句受賞者（33年度）

4回・奈良子・木客―**3回**・淡舟・梅志・堰子・省三・一三夫―**2回**・茶仏・三司・凡九郎・博也・南宗・菁風・圭井堂・漣・旅風・清人―**1回**・陽子・竹荘・牧人・多久志・義弘・玲人・雄峯・淀月・武助・紫香・一瓢・栞・十悟・葉乙女・晃・美恵子・凡茶・鵜汀・庸佑・進之助・水堂・豆秋・潮花・日満・昌男・きさ子・瓢太・いさむ・清潮・黙平・笑司・柳宏子・阿茶・貴山・**不朽洞杯獲得者**2回目菁風・1回陽子・淡舟・栞・茶仏・梅志・阿茶・生々庵・一三夫・木客諸氏。（十一月現在）

本社句会　全出席街道を行く人々（十一月現在）

淡舟・与呂志・句念坊・梅志・多久志・繁雄・三司・舟遊・雄声・漣・潮花・いさむ・文秋・水堂・鵜汀・栞・高史・進之助・葉乙女・庸佑・利武・すゝむ・博也・永断・六龍子・十悟・柳宏子・旅風・義弘・静馬・一三夫

頭数ばかりで話混線し　十悟
混線らしいと問うの方で言っている　亜鈍
聞き合せ混線さした近所口　清人
やっと掛ったら混線だとさ　恒明
戦争と平和の電話混線し　繁雄
小道具の傘が借りたい空摸様　唯義
小道具の刀を子役抜きたがり　薫風子
小道具も揃いおさらい会近し　柳宏子
名優が持つ小道具へ気をつかい　一三夫

川雑 たまつくり支部（大阪市）

西出一栄報

相談をしますと女にえきらず　文秋
共稼ぎ女は損やなと思い　清子
共稼ぎ夕餉に昼を語りあい　井平
帰唱夫随もあって愉しい共稼ぎ　柳宏子
後押しの妻の身体を思いやり　貞句朗
定年へ格下げしての職探し　一栄

川雑 にしなり支部句会（大阪市）

後藤梅志選

たこ焼を丸のみにしてあつかった　愼太郎
ほろ酔がたこ焼百円買うていぬ　すゝむ
たこ焼に夜店の匂いしみて居る　狂二
劇通が居る三階の老眼鏡　三司
りれき書とくらべられる眼鏡越し　堰子
満ルイへ投手は眼鏡ふいて立ち　満潮
美人とはいいな眼鏡に個性が出　薫風子
うぬぼれている手はあこへ行きたがり　唯義
うぬぼれが今日もネクタイ変えて来る　以兆
運が悪かったのだと未だ自惚れる　晃
気の利いた助手は手真似をもう悟り　牧人
助手として残れと恩師に望まれる　太路
助手の口から知れて来た私生活　舟遊
菊人形さて三脚の据え所　六竜子
菊人形お歳がわかる褒めっぷり　多久志
孫連れて途中下車する菊人形　はるを
菊人形姫の袂が萎れかけ　蘭
菊人形の菊は個性を曲げられて　北州
お陽さまに歩いて見たし菊人形　玲人
夕顔の短いいのちそっと褒め　三舟
ゲタあずけいのちにつながる判を押し　十悟
実験へすくすく育つモルモット　漣
魔の都会いのち知らずが行く夜更け　眉水
惜しくない命ビタミンすすめられ　敏子
蚊のいのち燈下親しむ人へ落ち　淡海
繃帯をとれば治っているいのち　梅志

川雑 小松支部句会（小松市）

伊藤茶仏報

来客へ糖漬の手を持てあまし　松水
宿の灯へ刑事は臭いなとにらみ　漁山
金臭い水も工場の喉へ鳴り　一進
鼻つまみされても太る不良の徒　生風
出帆のドラにテープを持ち直し　茶仏
もう出よう合図へ顎はしゃくるだけ　光郎
仲人の合図ふすまのかげですみ　多恵子
もどかしさ目に万感の合図こめ　吉枝
浮き足がたつてサインが見破られ　宗太郎
封殺か指がミットに出た二本　正柳子
十代を踏みはずさせて都会の灯　香径
宿題を夜へ廻して朝となり　若浪
停電も嘘し手と手がそっとふれ　浄美
宴会の席で手拍子だけしとき　永流
手相見がジックリ見てる後家の相　竜泉
牛糞を手摑みにして農夫笑み　清春
失敗をすれば他人が手を叩き　万女
気短かと話せば何もかも怒り　秋月
交番で悟ったような口をきき　伊久野
方便の嘘だと口は知り乍ら　三六
早口になって出て来た国訛り　陽子
いつわりの口実いえば汗になり　小田
まだ汗が出ますと試歩へ気が疲れ　昌昌
見どころがあると腕白はげまされ　東岸
見どころはないが真面目なような人　自娯句
見どころがあるでしょうかと実家の母　柳風子
ラジオかと思えば例の寝言なり　幸仙
寝言にも欲しい子供の浮袋　正洲
寝言にまで言うていたのに雨になり　一声

川雑 京都支部句会（京都市）

田中烏雀報

地球に錐で穴をあけるのが商売　ゆきら
錐の穴南京虫のとり道具　句念坊
人間の智恵に天狗は奥の奥の山　尚平
ドライブウェー出来て天狗は山を越え　誠史
天狗或る会話の先に居る　晴芽
皮膚のたるみ三面鏡の片すみに　白扇
想うまじ素足に続く皮膚の色　鳥雀
とり返しのつかぬ言葉へ真蒼のせまり　親生
真蒼に心ちじめて悪果てる　司郎
右に出る者、何人もいて哀し　蝶
お見合の時だけ右手つかっとき　千潮
ズボンの右のポケットにある親すべり　豊次

川雑 備前支部句会（岡山県）

三村柳風子報

川雑 倉敷支部句会（倉敷市）

楫原一善選

公僕がアゴであっちへ行けという　方大
一芸を持って職人気質なり　一善
公僕と云うたは選挙前の事　風の子
公僕の肩書私生活にも使い　銀子
戸口まで来て口実がみあたらず　素身郎
付馬もトラも戸口で恐れ入り　平平
当然のように公僕上座へ来　狂風
どやどやと来たが戸口で遠慮する　飴ン坊
ヨロメイて帰れば戸口でけつまずき　真奇
飲む話し狸寝入りが動きだし　隆文
戸口まで帰って女長話し　薫月
看護婦の櫛をベッドの上で借り　幽谷
狸寝が起きてはならぬ破目になり　陽子
公僕などと歳費のボロイこと　一春
運動会親子三代よくねばり　三吉
櫛持って来てと病人気をつかい　萌芽
どう櫛をもっていっても禿が見え　春也

川雑 篠山支部句会（兵庫県）

小西無鬼選

晩酌の時はやさしい父となり　静代
あの人はやさしい事を言うだけ　よし子
優しさを顔一ぱいに抱き上げる　岳詩
別居して始めてやさしい便りが来　まさ子
女房もいつしか酒の味覚え　美千代
やさしうに言うたら泣きが止まらない　初穂
薬よりやさしい看護の手が届き　枝葉
やさしさはたしかに象の眼に似とり　ひか平
雨の駅やさしい傘に又吸われ　左文字
味かげん矢張り主人の好きなもの　文子
松茸の走り陳情持って行き　永断
逃げもせぬ松茸走りよって取り　初歩
松茸の匂いがホーム乗換える　秋月
松茸が丹波のひろうして歩き　はつ子
つまずいた手が松茸を籠に入れ　万世

色紙短冊
書畫用品
大阪戎ばし筋
丹青堂
電話 ㋲三二・七三二

目の届く位置へ松茸植えて待ち　凡　志
応募するたびはねられてもつづけ　とみゑ
ミス募集自信の顔が場に溢れ　しげ子
尋卒へどうにもならぬ募集ビラ　ゆたか
月旅行もう募集する広告が出る　弥栄子
肉体を張れとは書いてない募集　一　雨
商魂が植え松茸で儲ける気　無　鬼

川雑　**岡山支部句会**（岡山市）
津田麦太楼報

岩風呂で男のずるさ見てしまい　久米雄
青切符見られてならぬ人を連れ　正　一
早合点クイズのワナに引っかかり　雷　山
名調子酔えば十八番の黒田節　佐加恵
一合もあれば頓服いらぬ父　義　夫
早合点されてるままでベルが鳴り　日出雄
幾歳の無事故へ酒が味噌をつけ　鮫虎狼
草の葉を煎じて母は秋の色　耕　水
駅長が時雨にぬれる通過駅　麦太楼
晩年の手相を母は信じ切り　浄　美
火葬場の此処にもやはり秋の色　秋　月
早合点している妻の気にもなり　東　岸
岩風呂へ情緒を添えた洗い髪　陽　子
忠告をして十代をさからわせ　幽　谷
手相見に見せて年頃あせりぎみ　流　風
頓服で様子見ながら虫を聞き　矢寸志
忠告をしといてお金貸してやり　一　声
早合点また街録に興を添え　承　平
医者が来たらしい頓服かくされる　三林坊
駈落の車窓に迫る秋の色　七面山
二日酔味噌の香りで起される　法　院
味噌くさに言われていてもまだ儲うけ　喜久次
吉運という掌へ物を乞い　九　坡
悪友のする忠告がよくこたえ　葵　丘
早合点する程の才妻になし　美音子
忠告は涙となって絶句する　万　女
検札が済めば無切符便所を出　半　翁
いい娘だと話せば母の早合点　武　夫
早合点してから気まずい日が続き　尚　子
手相見へ成功せずにまた出逢い　飴ン坊
頭だけ見るのに切符高く買い　十　七
手相では今年は金が残るはず　佐楽天
早合点するとこまでが親に似る　凡　九

川雑　**弓削支部句会**（岡山県）
直原七面山選

クチャクチャにされて悲鳴をあぐスター　七面山
的外れの珍答弁も出る議会　耿　介
グラマーを的にピットが定められ　夢太郎
妾宅が建って噂の的になり　寿　子
金的を射止めるまでのバー勤め　山茶花
射的場次は女の子を狙い　浮　草
一瞬の表情も刑事見逃さず　南　鉱
停電の瞬間箸が空に浮き　一　草
瞬間の出来ごとだった遭難記　只　世
帰えるのをとめても一度飲み直し　句念坊
帰える気になれば花火がまた揚り　知恵美
言い訳を作って帰える終列車　賤　女
帰えるなら帰えれと養子居直られ　美　沙
重役が調子外れの唄を出し　入　江
調子よく合せておいて裏をかき　一　枝
安物の機械と思えぬ調子が出　水　雲
風景が生きるガイドの名調子　知恵美
クチャクチャになっても千円札の価値　竜　児
クチャクチャにされて渦から押し出され　喜　楽
クチャクチャの札で魚屋っりを呉れ　ちとせ

川雑　**鳥取支部句会**（鳥取市）
河村日満選

削減をされて予算もなりたたず　秀　和
お洗濯溜めて素顔の日が続き　穂波子
小そう小そうなってるのに説教まだつづき　三　歩
削られた旅費に宿舎の格を下げ　耕　民
人情で口説き札束で落し　日　満

川雑　**大聖寺支部句会**（加賀市）
野村味平選

新家姪二足揃えたお玄関　魯　木
玄関へ出ても自慢がまだ続き　光　郎
玄関からおかずかず分け子の帰り　久　雄
飛石のように子供は靴を脱ぎ　恒　雄
たまさかに靴を磨けば雨が降り　金　仏
靴買って家の中からはいて出る　酔　羊
ナイロンですかと皮靴見損ない　味　平

川雑　**木次支部句会**（島根県）
藤井明朗報

縁談は私が決めますアプレの娘　澄　子
仲人のめでたい嘘を先きに言い　迷調子
親友へ落目見せたくない涙　明　朗
よろめきを親友だけが知って居り　鶏　声
寄りそった肩へ覗いたお月さん　晴　朗
亡き母が瞼に浮かぶお月さん　すみ子
あくびして仰げば丸いお月さま　綾　美

川雑　**宇部支部句会**（宇部市）
津秋六花選

漫画本読む程勉強して呉れず　粋　歩
孝行のまね事母を連れ歩き　箔　川
茶器撫でる隠居偽物とは知らず　一　喝
案内がなく共祭の酒に酔い　仏　道
偽物のジャパン製とは気附くまい　半　休
偽物が売れて骨董屋が笑い　翠　月
教科書がすらすら漫画のよう読めず　実　男
偽物へサクラは派手に買って見せ　正　行
旧家から出た偽物をあきらめず　豊　年
バーじゃろと間違えられる一人言　秋　月
漫画本いつか親父ものぞき込み　緑　豊
急患が案内を待たず上って来　滝　山
負け惜しみ勝目ない碁の一人言　天　作
待ち呆けの余憤一人言となって消え　粗　影
ポン引の案内露路から露路を抜け　六　花

川雑　**高知支部句会**（高知市）
川竹松風報

ホロ酔の主客へ主人のグロッキー　梅　林
妹を先に嫁かして花を生け　酔　雀
応援の弁士の方が立派すぎ　幸　陽
アパートの噂新居の若夫婦　汀
頂上の空気がうまい背伸する　柳　翠
生命を空気でつなぐ海の底　守
自転車屋空気を泡にして捕え　温　夫
逢曳の夢を途中で起される　照　資
へそくりへ妻つつましい夢を持ち　鶴　亀
未練など無いはずなのに夢に見る　真　子

よく聞けばほんとは夢の物語　蟠蛇
今朝の夢気になり電話かけてみる　松風
夢未だ捨てず白髪を抜いている　実
月に又話しかけてる故郷の夢　迷窓

杏林川柳会（大阪市）

麻生路郎先生選

観覧券一人手前で売り切れる　端川
長女二女三女の順で嫁ぎ無事　小石
撒水車来て順番をくずされる　同
順番を持つアロハには紐がつき　太希志
順番が待てず特診券を買い　阿茶
順番はボスニワネーと云った顔　珊枝郎
順番を忘れた様に長生し　生々庵
順番を子に坐らせて煙草吸う　太希志
順番がお気に入らないかくし芸　阿茶
鉄鬼大将にならねばすまぬ親ゆずり　同
父に似た度胸の良さで出世をし　瑞川
二代目もやっぱりこまこういいはりま　小石
直言で損するあたり親ゆずり　一哲
はしまめも筋をひくとは知らず嫁し　葭乃
助太刀を予約してから大ジョッキ　生々庵
助太刀に来たは一くせある女　阿茶
助太刀はとうのむかしに酔いつぶれ　瑞川
助太刀が鴨にされてるはしご酒　太希志
助太刀をしますと妻もいける口　小石
ながし目は助太刀たのむこう云うサイン　生々庵
助太刀へ唄はまかしてのんで居る　小石
若旦那今は斜陽の四畳半　一哲
文句も言わず只睨んだまま帰り　太希志
借金を断りたいし恐い記事　阿茶
借金が抜けりゃ変った苦労出来　珊枝郎

333川柳会（堺市）

川村好郎報

女房の臭さが落目でわかりかけ　一楽
落目には触れず呑みに連れてくれ　好郎
いざこざへまた世話焼きが口を出し　雪山
新築の客間だけ家具ととのえる　冗歩
人ごとと思った落目こちら向き　新石
いざこざがまだ済まぬうち子が産れ　狂二
いざこざで背中そむけて寝たものの　梅里
怒っている方が魅力のある眉毛　南宗
掛声についうっかりと踊らされ　狂二
虎のサービス一声ほえてみせ　好郎
薄うなった頭キリンにのぞかれる　冗歩
掛声のわりに仕事ははかどらず　新石
突当り鯛木族館を意識する　雄声
再起の日まぶたに何か光るもの　圭水
虎よりも一升瓶を気にしてい　一楽
掛声の大きい奴が力抜き　雪山

南海電鐵川柳会（大阪市）

友淵貴山報

書留へ御苦労さんと愛想よし　梅志
たった百円書留の判を押し　貴山
書留に一家総出で印捜し　和男
書留の判は何でもよいと言う　貴山
書留に母の涙の筆の跡　狂二
二の臍がついて幹事の腕がしれ　梅志
本通り出来ぬ献立食わされる　圭水
見くらべて中華料理の名を覚え　のぼる
勤評で二学期までももめつづけ　圭水
二学期へもう就職の風が吹き　宏子
二学期へ遊びたりない顔でくる　南宗
虫の声聞いて二学期よく眠り　貴山
奇蹟の偉大さ道へのむつかしさ　宏子
船山へ着くとは予言者も知らず　貴山
十戒はおろか一つにつまずきぬ　路郎
十戒のすることなかれがみんな好き　貴山
凡人のつらさ十戒ビンとこず　圭水

大阪通信病院川柳会（大阪市）

橋本幸男報

海のカーニバル裸も舞台に出　ハナ子
来客に裸の女房顔見せず　よしを
裸体写真こっそり名刺入れにいれ　竹荘
すだれ越裸体でビール飲む姿　桃村
親しさは客も主人も裸体なり　草右
常連に出す酒別の瓶を出し　方正
金賞は又常連と云うカメラ　夏生
常連のいつものアレで用が足り　鬼風
手拭をたたみ赤子の枕出来　春巣
重症は腰にも手にも枕され　春雄
母にだけ逢いに帰えった枕もと　幸男
告別式へは失敬したと裸で居　路郎

たけるべ句会（岡山県）

勤評の疑問そのまま点につき　秀波
ライバルに勝って一生不倖絹子　
お下りで肩身狭盆踊敏子　
政敵をほめて己の巾を見せ　美沙
肩で風切った昔がなつかしい　尚子
発車ベル指先だけの握手する　賤女
ライバルになるとは知らず紹介し　只世
お隣と合うつきあいを疑われ　美舟
歓待の疑問が解けないままで酔い　山彦子
缺席の永い机の上の塵　青柿

谷向病院句会（西宮市）

青空にたのしくすすむ船の旅　大明
青空がかくれるまでにおしめ干し　たかし
青空が見えて寿司屋がせかされる　舟遊
青空が見え雨宿りホッとする　一満
青空にかるき財布の日曜日　一光
青空へ祭囃子が消えてゆき　町人
青空の下はしあわせ満ちており　町子
青空へ生きる希望が湧いてくる　一本園
青空の下で白勝て赤も勝て　牧人
失言も七十五日で消えてゆき　泰
失言をとりつくろうて煙草もつ　友子
失言の出るのを待って野党席　豚太
失言と云わずカラカラ笑うてい　三舟
失言はほんとの事を云うだけ　一傘
口紅を選ぶ女の真剣さ　アユ子
鏡台へきょうも自嘲の紅をひき　弦月
試歩の朝そっと口紅さしてみる　勝子
口紅をおとして今日の疲れ知り　克義
口紅の色鮮かに巫子の舞　半歩
姐さんが紅をきづかう花氷　薫風子
ふて寝する娘に口紅の濃くなり　凡平
失言をにこにこうけて寿司にぎる　浪六
青空で入道雲のボディビル　砂牡天
青空に秋を売出すアドバルン　窓星
うらないは吉口紅をつけて待ち　甘美
口紅もつけず一家を支えていす、む

鮨と料理と酒
アベノ橋地下映画食通街
千日前 ㊐〇一四七 大劇裏
梅里の店
大萬

★大万川柳（第九十四回）を募る
兼題「主任」路郎先生選
締切・十二月十五日（句数五句以内）
発表・十二月廿一日（店内掲示）
投句は 阿倍野区松崎町三丁目 一〇 大万川柳会宛

12月の句会

川柳雑誌社支部

淀川句会
時 3日（水）六時
題 子守・ボーナス・顧問
所 十三西之町五丁目東淀川郵便局

みおつくし句会
時 9日（火）六時
題 都合・工面・問合せ
所 天王寺小学校

玉造句会
時 10日（水）七時
題 失礼・ちぐはぐ
所 市電玉造電停南一丁大阪信用金庫

3333句会
時 12日（金）
題 親子・失恋・火鉢
所 堺市老松町三丁島野工業KK

明和研究句会
時 14日（日）一時
題 十二月・生返事・女心
所 西宮市鳴尾町新明和興業KK

阿倍野句会
時 17日（水）六時
題 てっちり・タレント・悪酔
所 旭町二丁目 金塚会館

にしなり句会
時 18日（木）六時
題 人間・あきらめ・風船
所 玉出新町通一ノ一一 後藤梅志居

南海電鉄句会
時 25日（木）六時
題 乗越し・やつれ・クリスマス
所 難波高架下 親和クラブ

倉敷句会
時 7日（日）一時
題 おしゃべり・日本髪・ストーブ・犬
所 水島弥生町四 楫原一善居

篠山句会
時 7日（日）一時
題 さし向い・終り・かくし芸
所 篠山町立町 池富旅館

広島句会
時 14日（日）十時
題 おどす・残り・警職法
所 広島駅二階会議室

宇部句会
時 14日（日）一時
題 かけ持ち・くわえ煙草・延着
所 宇部市東区恩田長沢 津秋六花居

京都句会
時 16日（火）夕
題 なだれ・表情・孤影
所 四条繩手 仲源寺

たにむかい句会
時 21日（日）一時
題 大晦日・じゃんけん・茶
所 西宮市今津谷向病院テレビホール

高知句会
時 25日〆切
題 どん底・火事・雑誌・テレビ
所 高知市追手筋 湖月 川竹松風居

弓削句会
時 月末〆切
題 回り道・思案・こおろぎ・ガラス
所 久米郡久米南町 直原七面山

青ペン・赤ペン

▼主幹の「新川柳鑑賞」も六百回を記録した。大変な仕事である。われわれは佳吟をもてこれに応えねばなるまい。

▼高鷲亜鈍氏の「須崎豆秋論」は堂々完結、本年後半の好読物だった。東野大八氏の長篇「柳風三国志」は筆者のご都合で、ひとまず前月号でおわることになった。新年号からまた筆陣新たにまた快筆をふるってくださる。

▼アンケートの「胃袋拝見」はご満腹ねがえたことと思う。一瓢氏担当の「句評リレー」は回を重ねるごとにその批評に鋭さが見えてきた。仲間ほめばかりではすぐあきられてしまうだろう。新進作家と女流陣の執筆がふえた。新鮮さがあふれて活気があるとの声だ。古豪をしのぐ名文をドシドシ送っていただきたい。

▼短詩文学作家展、不朽洞会総会がともに盛会だった。年々根が伸びていくことは心強いかぎりである。

▼仕事に疲れるとフラ・フープをやる。女房や娘がマリリン・モンロウじゃあるまいし見っともないから止せと云う。かつての"ヨー・ヨー"を広めた米人ルイス・マークスの再度のヒットだそうだが、ドエライものが流行りだしたものである。

▼ミッチという愛称で皇太子妃が平民出だという。うれしいニュースである。（一三夫）

柳人交歓年賀広告を募る

新年号へ貴方の年賀広告を

★一口金二百円。幾口でも申込んでください。

★一口分の原稿は住所と姓と雅号程度。活字指定はおまかせ願います。

★一口分は五分の一段組三行。

★原稿締切は十二月五日着便

★広告料は前金のこと（郵券代用でもよろしい）

川柳雑誌社

募集

課題吟募集

神詣で（十句以内）尼 緑之助選
女店員（十句以内）西 いわを選
馴染み（十句以内）真鍋 一瓢選（十二月十五日締切）
印鑑（十句以内）土井 文蝶選
手土産（十句以内）大鶴 喜由選
上役（十句以内）田垣 方大選（一月十五日締切）

毎号募集

近作柳樽（雑詠廿句以内）麻生 路郎選
川柳塔（雑詠十句以内）北川 春巣選
文章（評論・研究・感想其他）麻生 路郎選（毎月十五日締切）

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。

▼『近作柳樽』は一般作家の雑吟を募る。

▼▼『課題吟』は誰でも投句が出来る。『川柳塔』えの投句は不朽洞会員に限る。

printed in Japan

B列5号 毎月一回一日発行

川柳雑誌 第十三巻 第十二号

（禁轉載）

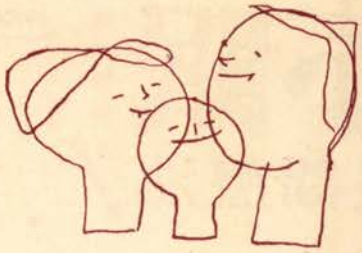
昭和三十三年十一月廿五日印刷
昭和三十三年十二月一日発行

定価 六〇円
（送料四円）
半カ年 三八四円
一カ年 七二〇円

大阪市住吉区西万代西五丁目二五番地
編集兼発行印刷人 麻生幸二郎
大阪市住吉区内万代西五丁目二五番地

発行所 **川柳雑誌社**
電話 大阪 ㊟ 六〇八一
振替口座 大阪 七五〇五〇

一家そろつてホーライ党



廣東料理

蓬萊

大阪なんば・TEL (64) 551—2

K.C TEX

ケー・シー・テックス

株式會社越田商店

本社 大阪市東区茶町四丁目 TEL (23)—4573～6番
東京支店 東京都千代田区神田豊島町四番地 TEL (86)—7886番
一ノ宮支店 一ノ宮市花園通り二丁目 TEL 一ノ宮(3)3919

麻生葭乃著・米田三男之介装幀

葭乃句集

福壽草

本書は川柳の母・麻生葭乃女史の異色ある作品の金字塔です。各方面から御好評をいただいて居ります。

定価 二百五十円
送費 三十円
菊半型・函入

発行所
川柳雑誌社
大阪市住吉区万代西五の二五
振替口座大阪75050番 電話住吉(67)6081

昭和廿二年七月一日 第三種郵便物認可
毎月一回一日発行
編集兼発行人 藤生幸一郎
発行所 川柳雑誌社
大阪市住吉区内万代西五丁目二五番地 電話(大阪)六〇八一 振替口座大阪七五〇五〇番
定価六十円(送料四円)

山之内

不眠
昼間療法！

昼間の服用だけで、夜自然に安眠ができ、日中のイライラや不安感もとれ、明朗・能率的な生活を送れる習慣性のない安全な新薬ですスッキリした頭で作句の為にも！

日中のイライラもすぐとれる

晝はすつきり・夜はぐつすり

ノクタン錠

東京・大阪 山之内製薬株式会社 福岡・札幌

あみ上りのよさ！

スキー毛糸

倉敷紡績株式會社

万人
その名を知り
万人
その味を賞す

世界の名酒

サントリー

オールド 1,600円・角瓶 1,250円・白札 730円

洋酒の壽屋